さてテニヲハの指合といふはテ留りもニ留りも附合はまして打越し（打越とは我附すべき一句置て前の句を云）をもとかむへし腰の「て腰の「にといふ事は七七の短句（低句とも）に限りて長句（高句とも）の中間には其とかめなし或は見れは聞けはの如き「ハを濁る詞より押字も抱字もすへて附句を云へき也

されと打越に附る時は五文字か七文字か同し拍子には用へからす畢のぬはまして不のぬとても惣してテニヲハの指合は吟聲に語路の惡しき故なれは譬へ名目なきテニハとても同し拍子にとゝこらは我と指合はすましき事也

古法は其字に此字をとかめて問はねは知らぬ事も多からん爰に指合の汲といふは「ぬの指合を「すと直すに眞名（眞名は言語の首本の變化せさる所を云送假名便に委し附て見るへし）には同し「不の字なれと吟聲の差別にて本よりとかめす是等を一理の凡例と知るへし

凡數字も送り字も耳目の變を先にして文字の上にてとかむへからす（送字とは送りかなを附すことなり語尾變化するものは其變化する所より寫すを云）たとへは一盃に山ひとつの如き語路の拍子の耳にかゝらぬは二句以下は許すへし

されと送字は目たつ物なれは三四句も去へきにや古式の鈴鹿に鹿の如きまして野分に「分の字の如き文字の上にてはとかむへからすたとへは鈴鹿の打越に染物のかのこの如き是を異体の差別といひて執筆ハ假名眞名のくはりを知るへし

名所人名には同字別吟（同字別吟とは難波に波大和に大紫に筑紫の類を附句に嫌はす）の古法あるをや是等は大概打越をも許すへし二句さらはましてとかむへからす此故に去嫌の古法に萬物ともに打越を嫌へとも附ては苦しからぬ物あり親子に障子といふ類也打越はかへりて目に立へし　古今抄

指合證歌の事

古式

月に影花につはみや村に里
弓矢に駒は付句さらへり
明にあす手に持にきる足に踏
わゆひといふも付句嫌へり
鼻にかぐいさり火に蜜末にすそ
待に攝待付句さらへり
名所に寺號天竺日本や
名字名神嫌ふ打こし
ふり物に霧や火の雨花のふる
雨露のめくみも嫌ふ打越
影に陰星に月日やたそかれに
暮夕の二字も嫌ふ打こし
馬舟に綿に衣類や獵人に
生類なとも嫌ふ打こし

野に原や閑にのとか今にけふ
七夕に月二句去そかし
糸に緒や衣類に砧箸に背
木履にせつた二句去にけり
そらに雲久かたに空寢に臥
雲に墨りは二句去そかし
生に死や幾日に日頃にくりたる
同字の假名も二句去にけり
古にふるきもみちに楓や風に風呂
わたに木綿は二句去そかし
火にもゆる煙に薪間にすきま
油煙にあふら二句去にけり
もつたいに姿や文に反古なと
都に宮は二句去そかし
食に飯米にふちかた駒に馬
旗に八幡三句去るへし
父母に伯父伯母なとや賀に祝
文字にみそちは三句去なり
風炉に風呂匂ひは伽羅やうら盆に
蘭の花をも三句去るへし
島に磯釣籠につり針舟にのり
さすに月戸は三句さりなり
朝にけさ虫鳥けもの聲に音

麻に鈴鹿も三句去なり
衣季や竹田のけふり夢なみた
月松まくら舟は五句さり
堂に寺垣にもかりや橋に柿
石に岩茸七句去るなり
山かつにいやしき馬に一騎なと
駒にまくさも七句去るへし
人足に道具のあしや火に火燵
あしに脚氣は七句去なり
神にみこ帝に門や大君に
公達なとは七句去るべし
御の字や匂ひにかはる三字假名
花にさくらも七句去るへし
網にあしろ海にうな原闘にせく
渦にともへは面さらへり
夕暮に黄昏なとにかみなりに
いなひかりをは面さらへり
短冊に歌や眠にねふりの木
うたひに能は面さらへり
若舞に瀧丸文に戀や糸
男堀海面さらへり
妻に妹みやこに京や酒に下戸
旅に旅籠は面さらへり

殿門や王星神に庭はしら
床駒車おもて嫌へり
餓鬼に鬼經に看經塚に墓
禪にさとりは折を嫌へり
天目に茶碗や釜に鑵子なと
行燈に挑灯折嫌ふへし
煩に病もくさに蓬くさ
油煙に墨は折きらふなり
君か代に御宇や勅使にみことのり
伶人に舞折をきらへり
峰山も風も嵐も海川も
沖澤磯も三句去なり
馬車火虫茶酒飯と餅
一座に二句と定むへき也
飯鐘と木魚の異名四つはかり
脊虫の異体數を定めす
龍虎も鬼も千句に一ッなり
異名異体は數を定めす
からもゝや歸花より山吹も
千句一座に一句なりけり
雁燕柳さくらも鶯も
菊も千鳥も二季に二句也
庭垣もわかつき昔ゑり袖も

新製

文も便りもひひかへて四つ
泣く笑ふ照るも曇るも植刈も
寢るも起るも面八ッなり
目と鼻と耳口手足此類は
折をかへては四つもあるへし
網に魚鳴子に鳥やけたものや
かゝしも海苔も植物に二句
月次のに月に月影三句にて
てる月と月五句去るそかし
百韻に雨は一折四つなれと
雪はおもてに八つとこそきけ
子の日には松さらしなに月の句も
花によしのも去り嫌ひなし

以上袖かゝみ

爲辨抄に指合といふは「てにをはの同字也それもてとでとの清濁はとかめすよむ時耳にかゝらぬ故なり數字送字も舊式より輕したとへは一盃に山ひとつの如き語路の拍子の耳にかゝらぬは二句以下は決してとかむへからす惣して名所も物名も鈴鹿に鹿のことき屏風に松風のことき偏か旁(つくり)かの字形をかへ眞名か假名の差別あらは附句も打越も用捨の捌あらんされと松かせも山ひとつも假名にやはらけて書へけれと風寒みともひと雨とも假名にかゝれぬは其論にあらすこれらは同字に同意の捌にして松風に風

呂敷の如きは舊式より同字別吟なりされとふろしきと假名にかくは執筆のはたらきといふへきなり畢竟は法式の道理をしり一卷の變化をしり諧路の拍子をしる時は指合も去嫌もさして新舊の法になつます其座に其事は明ならん此故に此論は明眼の師をえらみて其故を學ひさらんには法にあやまつ所あらんとそ古法は誠に學ひてしるへきをしると其法になつむ人は學ひてしらぬ人といふへし

偽辨抄拔

折合の事

折合とはたとへは下の句中に「花を見んとて山に入るなりと云句にテ留の上の句を附す又前句の上句に「秋の夜の明はつるまて月を見て」といふ句に泪にくれてなとゝ腰の折合に「て文字をすへからすと云義なり「ての字に限らす「は文字「に文字「はね字皆同斷「はて「まて「すてなとのテニハならさる「て留に嫌はす夫も「捨て「果てなとゝて文字附たるは嫌ふ也　御傘

上句の留りの字と下の句の中の留りと同字を嫌ふなり但てにはの字なり物の名は苦しからす又上句に下句を付るには折合わろし下句に上句を付けるはかまはすといふ人あり此說非なり兩方いつれも嫌ふなり又「て文字「に文字はかりの事と心得たる人あり左にあらす一切のてにはの字を嫌ふなり文字苦しからすといふ說あり夫もわろ

し　名目抄

同字別吟の事

別吟とはたとへは難波に波、大和に大、紫に筑紫のたくひ是を同字別吟といふ附句を嫌はす

重と重は同字なれとも八重九重なとに石の重きなとは同字別吟にて付句を嫌はぬ事なり　俳諧獨歩行

中風に中ヵ、春日に春日、關白に關白しの類さし合にならぬなり又同字別心といふあり正直に高直、滿足と兩足との如し同聲なれとも心のかはる故に五句去なり　俳諧名目抄

去嫌の事

去嫌はすへて同し心に通ふを制するの法式也故に異なる字なれとも同意になるは嫌ふ也今其一二を擧くたとへは

古へに昔しは面を嫌ひ古筆古歌或はふることは句によりて昔に二句去也

又

重と重は同字なれとも八重九重なとに石の重きなとは同字別吟にて付句も嫌はす

重に重なるは三句去重と重は七句去八重といふに幾重一重なとは折を嫌ふか如し

幾多の文字皆此格也擧て數ひ難し然れとも一座々々に御傘嘸草を懐にして指合をくる時は果しなく附合は文字穿

鑒の論場に落ぬへし是をしりて拾捨の捌きあるを上手の宗匠といひ杜撰に捌くを下手の宗匠といふへし左に顯す所は古式を忘れぬ爲に擧たる也されと歌仙は只三十六句也三十六句皆別の句たりとも容易なるへしよりて何なりとも一句云なは餘は遠慮有かよき也　獨歩行

去嫌に前句の詞の體用をよく見定むへし

あつまやのまやのあまりのあまそゝき」とある歌の詞をとりてする句は居所にもならす降物にも嫌ふましといふ人有へしたとへは

あつまやにうたふやうなるあまそゝき」といふ句ならは居所には嫌ふへからす降物には嫌ふへし今降る雨を見ていひたる句なる故也雨そゝきは其句の體にてあつまやにうたふやうなるは其噂の用也

されと是等の類迚も老練の上はとにかく先は前にいふ如く去嫌かよき也

頃折時の三字同し心に通ふ時は互に二句去と本文に擧たるはたとへは

物思ふ頃といふ句のあるに、花の咲く時、花の咲折」なといふ句の事にて句質の親疎によりて斟酌すへき物也

すへて加樣の類は一座の宗匠に任すへし

前にも云しことの去嫌の輕重のある事をよく辨ふへしたとへは

松をたよりに住ひとつ家

なとゝいふ句には旅のびんき便風の類字去也

風のたよりもたまさかになる

なとゝいふ句には旅の便宜聲によむも折を嫌ふ

此句の如きは折を嫌ふも嚴しきやうなれとも前の便りと後のたよりとおのつから其輕重なり是らの義は凡て其坐の宗匠の捌きにある物なり且此便りといふ字は一坐三つ便りと聲によみて一以上四の物にてびんとたよりは折か面か嫌ふへしといへるもの也　同書

去ると云ふは重し嫌ふといふは少は輕き心あり去るといふ物はいかやうにても用捨を加はふる事成り難し嫌ふといふ物は句により時により又宗匠の料簡によりて用捨する事もありとなり

連句の去嫌は當日々々の宗匠の預る處にして露ふたつとも一とも同字三句とも五句とも式書たる本をひらけは其まゝ定めしらるゝ物にて今日附句の手練三句のかけはつしの修行地に於て無益の事なりさて越に「馬の候て蚊帳とは生類以の外也なと執筆の匂もおそろしけれはあはれ其日の宗匠寛仁大度にましまさん事を蓋是を他に出して判を乞は一句の仕立二句の間の親疎三句の運ひの當非を討論せしめて明日の修行にそなへん爲なれは判者其ところを辨明して强かち去嫌をのみ目かとにたつる事なかれ

去嫌大意　貞享式云去嫌とは天象地形より草木鳥獣も器財食服も目にたち耳にひゝくものは見渡しに遠慮あるへけれはたとへ人の制せすとも我と用捨は知るへき也云々是を我門に一理莨通といふ抑俳諧の式は楚仙の無言抄に濫觴て貞徳の御傘にひろまりたれといつれも連歌の家にならひ慶安の新式を鑄形となせるより例に委情の行ちかひありたとへは

袖ぬるゝに「泪、遠きに「遙か、天に「空、雲に「曇り、の類ひ二句去の式なれとも蕉門一派の委の運ひに誰か二句にて附へからん

古式に牡丹は一坐一句の物故に俳には廿日草深見草の異名にて今一とつあるへしといふたくひたとへ音を訓にかへたりとも同し一坐の百韵に同し物の二つ出たらんには實に作者の不機轉といふへしさはいへ牡丹のけやけきも蹈皮の牡丹をいひ或は牡丹餅といふときは植物の牡丹にあらされは折を去面をかへて五句も三句もすへし是等を異名といひ異體といふ古式今式の差別餘は准て知るへし世に流布の俳式は御傘より抄出したる去嫌ひなれは委情の行ちかひあり用かたき式もあり貞享式もあるへし（蟲時記）

むかしの俳諧も今の俳諧も打越の論の明ならぬは委情の二のわかれさる故也それか中にも人倫の運ひはたとへ雨ふり風吹といふとも見るか聞かのさかひより百韵は百句なから人倫ならすといふ事なし本より人倫を二句去と

定たるは起居見聞の詞につけて人のさまは多き筈なれは父母といひ男女といひ目たち耳たちたる文字の外は或は自他のさかひにわかち或は委情のたかひを考ひて打越の附心と別ならは人倫の噂は似かよふとも一卷のくはりは變しやすからん然らは古抄に掟たる「主「誰「身「獨「媒といふ類はたゝ人倫の噂にして人倫とは定へからすこれらに法制の寛猛を察すへしそもや古式の覺へかたき所は「誰「何といふ打越に人倫を嫌ふとは例のいふ字をとかめ、僧は人倫にあらすとは例のいふ理屈にて一色〳〵に書つけて百式は百品に分別すへきや

「僧の打越に人倫は去へく「寺の打越に居所を嫌ふへし然らは「親王「皇女の如き「天童といひ「天女といふとも何の部に入れてさはくへきや「帝も人倫に二句去へく「御門は居所に三句さるへしされと「仙洞「新院の類は人倫と居所との品によるへし昔しより舊式にも部類を定かねられしか「佛と「鬼の打越はたとひ人倫ならすとも人倫のさまは嫌ふへき也

雪は四ありて「雨は二とあれと雪にまさりて用多し「あめ「さめにかはりては六も七もあるへき也或は「虫「魚「馬「車の如き「飯「餅「茶「酒の類は其名を其まゝに二つゝあるへし「木魚「飯鐘の如き異名にいたりては三四にゆるすへし「背虫「煮餅の如き異體に呼ひては例の數量を定へからすいてや古式の嫌ふ物は「松に子の日の大論

より「月に更科は附句をきらひて「芳野に花は附句を嫌はすされと此論は今の用にはあらすいてや古式の嫌はぬ物は「冠に烏帽子をつけ「綿に木綿をつけ「夕立に雲をも嫌はねは「雨に笠とても「鷹に狩とても論すれは二句一意なれとも此類はすへて附句を嫌はすこれらは今の俳諧に全く無用の沙汰なれとこゝには五品をもて無用の凡例としるへき也其餘は皆々擧るに及はすされと大昔の沙汰には「彌生といひ「師走といふ類に異名の月をは附へし打越を嫌ふとは古今の掟と稱すへし但し彌生にたゝ月とも附へきにやまさに知るへし

古今の掛酌とは連歌には二三ある物をも俳諧には只一といひ連歌には只一と制せし物をも俳諧には二三ともいへるは俳諧はたゝ日用の咄にて一坐の人和をあつかひは折ふしは馬の打越にまさしき牛ありとも其日の時宜にやと見ゆるすへし是らに連俳の用と無用をしらは彼は其家に其用あれは是は此家に此用ありて法は變通自在ならんをや

然るに字をとかめ意をはこひて「山伏に五品さらひ「師走に釋教を嫌ふか如き一坐の爭は絶えすしてかへりて世法の害とやいはむ

今選するにむかしの去嫌は人の見聞になれる物は重けれども近くゆるし人の言語になれぬ物は輕けれとも遠く嫌ふたとへは「山は三句去にして「峰は一坐に二なり「風は三句の字去なれとも「嵐は一坐に二なり是等を舊式の凡例にて連歌の艶詞くらへには「峠とも「颯とも目にたち耳にひゝく物は只一と定られし法の增減は尤なれとも今の世の俳諧は擧一知萬といへる敏據の變を家とすれはこれらの差別に掛酌あらんかたとへは「山を三句さらは「峰も「麓も勿論にて「岨をも「谷をも三句去るへし しかれは「海も「山の對にて「沖をも「磯をも「川も「澤もすへては三句去ならんに「山に「峯との去嫌は二十餘字のちかひありて百世のまとひは此故也たとひ山字を三句されとて百韻の俳諧に二十五句もすまし古今抄

去嫌といふは象物の類にして草木鳥獸はいふに及はす器財食服の類より居所には躰用の差別あり支躰には詞の輕重あり或は名所物の名に同字別吟の取さはきもすへて姿情の二より趣向と句作との差別をわけて用と不用との道理をさはくへし舊式の如く文字をとかむへからすたとへは梅櫻に柳腰のことき野飼の牛に咄の尻馬のことき居所に傘の家名のことはたとひ打越も其人により其句によりて用捨すへけれは二句以下はまして とかむへからすそれを姿情の差別とは野飼の牛は目に見ゆれとも咄の尻馬は馬の姿なし其外もこれらの格例より趣向には用あれと句作には用なき故と知るへし 爲辨抄拔

去嫌早引

打越をきらふ物

木と艸　鳥と獸と虫　月と日と星

このことくかはれは二句去にて付てよし

二句去のもの

とて　るゝ　から　より　たき　たゞ　れり　れる

それ　なり　なに　らん　うち　このことは てにはなり　のみ　やら

まて　けり　こそ　さて　さへ　さは　めり　する

重ね字　折々　猶々　など

此分たかひにかはれは附てよし、とまりは見わたしをきらふ

二句さりにて附られぬ物

風体　火躰　書体　降物　雨に露の るぬ　言語　乘物

歩行体　時分　濁り假名　畢ぬのぬ　ふのぬ等

三句去の物字去といふ

（イ）言いふ　幾いく　色いろ　今いま　出いて　入いる

花はな　原はら　早はや　晴はれ　降物の晴は折　果はて

張はる　外ほか そと　程ほど　邊へ　ほとりとゝへは折去

所ところ居所の所は折　時とき　遠とほき　問とふ　共とも

取とる　解とく　通とほる　留とめ　止とめ やむ

（チ）路ぢ　散ちる花のちるに花のちる、葉のちるに葉のちるはともにおもてさり葉と花かはれは三句去音おと

置をく　小を　折をり　押をす　我われ　忘わすれ　分わけ

渡わたし水邊の渡は折　割わり　川かは　風かぜ　替かは る

歸かへる　方かた　陰かけ　影ケ　懸かけ　兼かね

（ヨ）吉よし　夜よ　立たつ　爲ため　絶たえ　誰たれ

初そめ　添そふ　其その　遣つかふ　露つゆ　他の季にかはり

て　次つく　付つく　就つく　着つく　詰つめ　中なか

鳴なく　並なみ　無なく　成なる　猶なを　双ならふ

（ラ）内うち　上うへ　請うけ　打うつ　居ゐる　登のぼる

上のぼる あげ　殘のこる　野の　落おち　思おもふ　多おほし　追おふ

呉くれ　雲くも　艸くさ　來くる　暮くれ　暮の秋年の暮なとを大暮といふこれは折

（ヤ）山やま　樣やう　待まつ　間ま　又また　廻まはる

深ふかし　吹ふく　振ふる　心こゝろ　聲こゑ　木こ　比ころ

此この　是これ　爰こゝ　此の三字共にかはれは二句

事こと　込こむ

（ア）明あけ　有あり　淺あさ　跡あと　逢あふ　合あふ

相あふ　餘あまる　當あたる　里さと　下さかる　先さき　去さる

更さら　木き　際きは　聞きく　切きる　消きゆ　行ゆく

道みち　水みつ　見みる　皆みな　知しる

（エ）日ひ　人ひと　引ひく　元もと　下もと　許もと

物もの　持もつ　住すむ　末すゑ　捨すて　過すき　濟すむ

全三句去

木に木　草に草　鳥類に鳥　獸に獸　虫に虫の類　魚に

魚　山類　水邊　降物　かはれは二句さり

地名　名所　かはれは二句去　神祇　釋教　無常　述懷

支躰　飲食　かはれは二句去　衣類　旅体　在体　賣体

聳物　居所　夜分等也

五句去

衣季や竹田の船路　夢　泪　月　松　枕　七句去るへし

と連歌の歌を引て俳諧に五句去と定たれとこれらは斟酌もの也

煙けふり　御み　御お　袖そて　等也

七句去の物

飛とふ　頓やかて　御ご　旋めくる　花に櫻のるゐ　戀の句　並に三字假名　いつれ　いかに　いかゝ　いかんはかり　はなし　ぬらし　ぬめり　ぬめる　ぬらん　からん　からし　つらん　つらし　ならん　ならし　なれや　らるゝ　やらて　けらし　もなし　せられ　せらるすらん　かてら等也

七句去留りは折也　るらんは三字假名にあらす二字かな也

面去の物尤見わたしをきらふ事也

（イ）　離はなる　走はしる　泊とまり

（チ）　終をはり　若わか　かわりて面也　重かさね　隱かくる

數かつ　代かはり　假かり　片かた　輕かるき　返かへす　彼かれ

（ヨ）　寄よる　依より　高たか　垂たれ　賴たのむ　給たまふ

逢たかふ　空そら　傍そふ　面つら　作つくる　突つく　摘つむ

積つもる　盡つくす　長なか　馴なるゝ

（ラ）　結むすふ　浮うく　薄うすき　移うつす　失うせる　除のそく

後のち　表おもて　遲おそし　送おくる　組くむ　廓くるわ　の噂

（ヤ）　屋や　屋號は折也　安やすし　眞ま　參まゐる　前まへ

先まつ　氣け　古ふるき　越こへ　拵こしらへ　毎こと　如し

撰ゑらむ　得ゑる　手て

（ア）　朝あさ　間あひた　嘸さぞ　覺さめ　酒さけ　の噂

氣き　着きる　夕ゆふへ　結ゆふ　故ゆゑ　代しろ　人名等

（エ）　光ひかる　火ひ　廣ひろき　病体ひやうたい　面もつら

少すこし　素す

酒の噂廓の所作當時七句去にゆるすといへとも式の通り見わたしを嫌ふへし

折去の物

（イ）　家いへ　板いた　糸いと　至いたる　致いたし　初はつ

初には字去　始はしめ　拂はらふ　放はなつ　刎はねる　葉は

但無名也　木と葉と竹と替て三句去　逆はこふ　俄にはか

邊ほとり　隔へたつ　年とし　年歳も音ンにかはりて面去

（チ）　地ち　千ち　濡ぬるゝ　惜をしむ　納をさむ　霞かすむ

算かそふ　書かく　垣かき　門かと　限かきり　搔かく　借かり

買かふ　勝かつ　欠かけ　藏かくす　傾かたむく　幽かすか

（ヨ）　世よ　世に代に三句去　呼よふ　横よこ　讀よむ

悅よろこふ　旅たひ　大たい　便たより　溜たまる　叩たゝく　互たがい

慥たしか　尋たつね　他た　類たくひ　染そめ　背そむく　揃そろふ
築つく　常つね　包つゝむ　續つゞく　繼つく　强つよき　寢ねる
人生類かはりて七句
流なかる　撫なで
（ラ）　群むれる　後うしろ　埋うめ　寫うつす　賣うる　動うこく
疑うたかう　初ういう　初はつとかはりて面なり　軒のき　延のふる
乘のる　望のぞむ　拭のごふ　御おん　奥おく　驚おどろく　恐おそれる
威おどす　覺おぼへ　同おなしく　重おもし　劣おとる　趣おもむき　負おふ
國くに　喰くふ　苦くるし　汲くむ　加くはふ　悔くやむ　賦くばる
熊くま
（ヤ）　宿やど　宿しゅくに面なり　破やぶる　任まかす　罷まかる
曲まがり　稀まれ　毎まい　增ます　迷まよふ　卷まく　丸まる
交まぜる　削けづる　消けす　踏ふむ　福ふく　細こまか　乞こふ
剛こはし　扱こく　濃こき　天てん　照てる
（ア）　集あつまる　顯あらはる　他あく　預あつかる　厚あつし　改あらたむ
悋あやし　凶あしゝ　哀あはれ　雨あめ　雨う　雨さめ　にせものゝ
あめにも七句去　刺さす　探さくる　捌さばく　騷さわく
逆さかさ　定さだむ　扒さかす　流石さすが　清さやか　儀ぎ　究きわむ
霧きり　雪ゆき　異名他の季は面さりにせもの七句去
讓ゆずる　緩ゆるやか　短みじか　猥みだり　瑩みがく　亂みだる　品しな
忍しのぶ　靜しつか　然しかる　沈しつむ　凌しのく　順したがふ
（エ）　響ひゝく　扣ひかへ　開ひらく　浸ひたす　諸もろ　求もとむ
戻もとす　用もちゆ　者もの　盛もる　催もようす　筋すち　勝すぐる

居すはる　既すでに　隅すみ　直すぐ　救すくふ　勦すゝむ
百員に二ツの物
（イ）　命いのち　勇ゆふ　古いにしへ　石いし　池いけ　祝いはふ
磯いそ　煎いる　市いち　暇いとま　庵いほ　賤いやし　僞いつはり
厭いとう　いとゝ　濱はま　林はやし　橋はし　耻はぢ　遙はるか
榮はへ　庭には　場には　新にい　西にし　洞ほら　堀ほり
仄ほのか　干ほす　友とも　鳥とり　無名
（チ）　沼ぬま　布ぬの　主ぬし　岡をか　小野をの　敎へし
怠おこたる　驕おごる　補おぎなふ　別わかれ　僅わつか　業わざ　潟かた
顏かほ　神かみ
（ヨ）　宵よひ　代　世に去　焚たく　瀧たき　谷たに
堪たへ　樣ためし　忽たちまち　貯たくわう　譬たとへ　助たすけ　園その
育そだつ　存そんち　反そる　連つれ　津つ　傳つて　難面つれなき
つらさ　願ねがひ　名な　習ならふ　渚なぎさ　眺ながめ　半なか
灘なだ　嘗なめる　投なげる　情なさけ
（ラ）　村むら　虫むし　無名　昔むかし　歌うた　浦うら
噂うはさ　伺うかふ　失うしなふ　海うみ　非ぬ　老おい　冲おき
帶おび　自おのつから　可笑しおかし　課おほせる　仰おほせ　車くるま　窪くぼ
競くらへ　括くゝる　委くはし　癖くせ　臭くさし　碎くだく　曲くせ
繰くる　中なか
（ヤ）　燒やく　漸やう〳〵　町まち　窓まど　誠まこと　申まうす
負まけ　招まねく　紛まぎれる　けふ　けさ　麓ふもと　防ふせく
塞ふさく　子こ　生類に七句去植物子に三句去　殊こと

好このむ　異こと　漉こす　轉ころふ　江え　枝えだ　寺てら

（ア）　曉あかつき　翌あす　嵐あらし　炮あふる　主あるし　與あとふ

染あんする　足あし　味あぢ　遊あそふ　洗あらふ　爭あらそふ　欺あざむく

危あやうき　嘲あざける　侮あなどる　誂あつらふ　酒さけ　音と異名に又あるなり　笹さゝ　崎さき　澤さは　坂さか　盛さかり　淋しみ

幸さち　榮さかへ　境さかひ　避さく　喚さけふ　君きみ　御きよ

きのふ　岸きし　殿きひし　嫌きらふ　北きた　夕ゆふへ　豐ゆたか

所縁ゆかり　免ゆるす　珍めつらし　都みやこ　宮みや　峰みね　南みな

湊みなと　右みぎ　島しま　汐しほ　印しるし　鎭しつまる　認したゝめ

忍しのふ　親したし　凋しほむ　退しりぞき　絞しぼる

（エ）　東ひがし　于ひろ　鄙ひな　豈ひろ　低ひくし　拾ひろふ

左ひたり　密ひそか　等ひとし　森もり　專もつぱら　守もる　尤ともつ

貰もらふ　瀨せ　關せき　洲す　砂すな　冷すさまし　涼すゝし

速すみやか　則すなはち　進すゝむ

此書面に記さぬ分は百員に只一ッと知るへし尤訓と音と替りては二ッ有也禽獸艸木も異名とかはらは折去ては又有なり

東　西　南　北　此四字音んに二訓に二ッ折也

青　黃　赤　白　黑　此五字音んに四ッ訓ゝに四ッ訓音かはりて面テさり但白の字はかりは白しろきと白はくと替りて七句

百　千　萬　此三字は音に四つ訓に四つ訓音かはれハ面テさり也

一文字音ゝに八ッ訓に八ッ訓音替て七句

二より十の字までの文字ハ訓音の差別なく見わたしに一宛なり

但し折去の物も折かはれハ三句去り見わたしをきらふ物七句去の物も其面テをされハ三句去り也又云二句去り三句去り五句去りの物は面テ折かハりても式のとほりに去へし

支躰の部

一ッの物　頭　耳　鼻　眉　腮　襟　脊　腹　肘　膝

腕　股　胯　髮　髭　腰　肩　臍　等也

二ッの物　顏と足

四ッの物　目と口

八ッの物　手（腕、器財の手、又ハ上手、下手に七句去り）

此分入用の字なれは類を分出しおく

樂ゝハ二つ　苦ハ四つ　福ゝハ四つ　貧ゝハ一つ　高ハ八つ　低キハ二つ　廣ハ八つ　狹キハ三つ　輕ハ八つ　重キは四つ　大は四つ　小は三句去　勝は四つ　負ゝは二つ　夜は三句去　昼は二つ　拾ハ二つ　捨ハ三句去

此定めの輕重を推察して萬端に心配らは中らすといへとも遠からすとしるへきなり　俳諧去嫌早引大全

打越の事　俳諧の制

秀句の打越に秀句言たるは悪し又秀句に秀句云もあしゝ結ひ句言かけの句次の句にて請るはよし

字に書て假名付る常の事なり是又當世の俗俳のする事なり萬葉の文字の外は義理よみは有るへからす假名つけ文字にて文をしらすること第一比興の至りなり

俳言も言聲にて遣ふこと好むまし俳興われはとて指合の句いふことは親子兄弟貴人高位の慰にもなる物なれは戯の言葉すらけやけなること好むへからす

故事のこと其事を含て句作りたるはよし楊貴妃昭君淵明孔明なとゝ押出して其名をさし其所をいふことの次の句の邪魔なるへし

熟して覺へさる事なと申出して其句の譯問ひかけられ答につまりたるは第一赤面たるへきなり

都鄙ともに渡りて人々能く知りたるは言出しも科わるまし近年のはやり言葉なと申こと一向宣俳の業多かるへし花の坐の外に引上けて花の句すること最上の尾籠多かるへし

難句申出し一坐の衆も付わくみたる躰ならは斷りを申早く歸るへし

長短の句ともに言つめたるはいやし聞にくし心敬僧都も連歌に篇序題曲流を第一と心得へしといへり歌にていへは篇は「冠五文字序は「肩七文字題は「腰五文字曲は「足七文字流は「沓七文字連歌にても前句篇序題上の句下の句かはりなし附句曲流と前句曲流なれは附句篇序題と心得へし一二を舉てたとふ左の如し

下の句　落着なり

前句曲流　かへしたる田をまた返すなり

左の有樣と云

附句篇序題　足曳の山に臥猪の夜るは來て

落着なり

前句曲流の心　面影は遠くなるほと悲しけれ

右の譯を云

附句篇序題の心　花見し山の夕くれの空

右の通り曲流々々とも行かす篇序題々々々とも行かす前句言流したるは附句にて斷る多くは附句言渡すへし句毎に言つめたらは此味ひ有ましたとはゝ篇ははしめて見ゆる樣、序は中立賴むさま、題は文をやるさま流は成就したさま也

前句親句より又親句と來たらハ附句疎句と心得へし親句といふは親しく細かに手をこめたる句疎句とは眞實をもとにしてさらりと言ひたる句なり親句は緣言なとを委しく相はなれさるなり疎句は別句を引まとひていひおとす句なり俳諧獨稽古

打越の證句、句去等の事

金陽より出したる兩唫集に

百姓なれとみな兒玉氏
月星を神事にかけて祭るなり
長きは稻とおもはれぬ稻

此三句目打越しへ通ひて所謂觀音開といふものなり

賤か家の乙鳥も通ふ法性寺
同しつらなる鶯の拵へ
いし〳〵を綸子の袖にかくし喰
あかるう成てはつす覆面
凩に潰れたもある八十社

綸子の袖打こしの法性寺の人物と見えて○いし〳〵已下いつれも變化かしねて芭蕉の申されし蓮の莖といふしめしには

凩に潰れたもある八十社
こゝやかしこに休む雇人
粥ふかす鍋の大きさ五六尺
田舍へ下る輿を泣々

八十社五六尺二字つゝの數字打こし○田舍へ下る輿も打こしのこゝやかしこの場願るへし

寢る鳥のむらつく中に二日月

二句去に

二歩も崩せは鑑はとつさり

これらは取かへられぬ數字にては無きを

壺燒の貝に松葉をとり合せ

打こしに

花咲て行脚もしよく成にけり

打こしの松葉植物ならすとも云はれまし

しら梅や鶴までほしき山の畑

此四句目に

老の手業にのらぬ活魚
薄へりの數の揃はぬ暮の月
小高の中に廣き秋の野

老の手業述懷なり表に如何○ふのぬ二句つゝき○腰の「にも打こしなり殊に表の見渡しなるそ

陣屋のうきを遁れたる朝

二句去に

尾張屋の楓伊せ屋の松の月

屋の字家にかゆるとも近くて

きり〳〵と鳴く音は霜のきり〳〵す

打越に

花の蔭煎茶道具こま〳〵し

疊字打こしそ

德利合點となるも樂しみ

打越に

吹あけくれた傘を見とれる

又打越に

たわれて隠す髪結の宮

器財打こしつゝきてうつとし

暮遅き日やたれ灰汁の音もせす

此五句目

満月も縄手通りは片明り

田むし送りにわたる獅子舞

髪わけて頭瘡吹るゝ初嵐

満月中句なり初嵐初秋なり季戻になりて

ひそ〳〵と二階の口舌聞とれす

冷し肴のぬるくなるらん

涼しさに椎の木抱て一眠り

寶物一の破れ鐘か鳴る

中日は月もはとよき彼岸にて

國の踊をおとる親ふね

雁梢をやたらに落す年も有

旅籠たけなり客のわしらひ

數字近くて見苦し○寶物の鐘に彼岸いかにもべたつけなり是を前句へはまると云ふなり○彼岸に踊り時候戻りて何れ此踊七月と聞ゆ○國の踊旅躰なるに旅籠も旅躰打こしにて

畑割すんで蛙なき出す

打越に

一掻鎮めた僧を見送る

畑割一掻事は變れども何れも田家の趣にて打こし聞くるし

烏の巣五斗俵ほとにしたりけり

句作つまりて聞苦しいかよふとも云ひまわさるゝものを

年明けてから初めての雨

假初に寝られし息の屠蘇臭く

初の字如何こは同字別吟といふにもあらず

栗の皮こはす羽織の袖たゝみ

襟に卷居るおとり手拭

おとり手拭も季戻りならすや

捨るはかりの風呂を振舞

打越に

たふるゝ襖うけて立聞

打越に

きぬたか止めば碓を踏音

風呂も襖も居所の用なり打越を嫌ふ○立聞に音も聞も聞躰打こしなり

顔出しなから若い虚無僧

細道も小川も名ある京くるり

風重たしと朱傘ひろける

御物見のひそ〳〵笑ひ聞えけり

南京鳩をつれて來る鳩

天蓋をかふりたるかそれを着さらして居る躰なれは朱傘

廣ける打こしへ躰近くしかも兩品とも釋教の用と見ゆ○京の字近くてこは一座一句の物そ

つめたき水も音は暖か

暖かなるは如何なる音にや

蝙蝠や土橋の裏を壹かせき

かはほりのかせくはとのやうなことにや

あふつ妻戸に月のひらめく

打越に

米とり濟す里のゆつくり

妻戸のあふつも如何に兩句居所ならすや

退屈な奥淨瑠璃も年忘れ

打越に

いふ事も聞ことも皆つれなくて

いつれも聞躰にこそ

水鳥にして家鴨なくさむ

季こそもたね家鴨も亦水鳥なるそはれならぬ物をこそ

打越に

蛙さらへて捨る五月雨

同

炬ふみけして戻る月代

腰のて打越つゝき候○月の字打越此論は雪丸けに五月雨の打こしに月の句出たるを闌更か咎められし一書あれともそは其傳を知らぬと見えたり故ありて是嫌はす

裘錢の百も上らぬ神の留守

町も及はぬ穢多の瓦家

ふの「ぬ附句になりて

雞子啼て崖の松毬轉ひけり

くわらりと空の晴る初東風

萬歳の一番船に乗あひて

此發句に脇第三を歳旦初春等の作にて季の戻りたるは如何二に萬歳の一番船に乗たる一作何の手柄ありや

手桶持春もちはしる鮎の落

座五つまりて聞苦し落鮎にとすれは初五へ戻る「てには」にて句柄も直るそ

繪馬掛に大さう騒く宵の月

二句去に

伊豫簾にすかす花の夜明り

すみ草の撰拵へに他にけり

連のあるまてのはす藪入

宵月に夜明り夜分近し○此藪入延ひしとすれは二三月迄も遲なりしと聞て可然けれとも延すとすれは當座の詞故正月也されは季戻りになれり

先八九分ふけし綿もゝ

ふけし「てには」語をなさず「ふきし也扨綿は花の跡かもゝになり扨綿の吹也もゝか吹とは云はす

朝風さむく毛を立る雉子

風の寒き故に毛をたつるところより雉子の心をいかにして察したるや公冶長の徒かしらず

あら苧に輪飾りなとも切込て

いかなる故のありて注連縄を苧に切込しやあまり事を新しく云はんとて世に有ましき事を求るにや

忘れたる閨の月を騒き出し

また釣て來ぬ鮠の献立

ある長者踊浴衣を施行して

一句置て

鴉めか長啼すれは葬か來る

忘れたるより秋三句つれたる心か閨の月ある頃の月と聞ゆ柳鮠春なり鮠とはかりは雜なり踊浴衣のみ秋にて來の字ちかし長の字打越なり

煎立の葩煎芳はしき店の先

二句去

軍にあれし町の氣の毒

居所ちかし○軍談の句に桑なし

夜半から釣らする廚の餘波哉

音はかりして月遲き松

雁下りる御旅屋の垣は透もなし

嚊も生るゐに預る物故打越を嫌ふ也○獵や網釣の糸なと生類にあつかる故に嫌ふ打こしと矜式歌にあり○かゝし鳴子抔生類植物に嫌ふも同し道理なりことに第三ならす

や

笹てすくふほとひよこ產けり

卵生のものはすべて卵を產て扨日を經て後孵るなり是を產とはいはす○田夫野人の調さへかへるといふに俗談平話をたゝすとは芭蕉も申置かれしそ

見る所へゆくまて暗し月の松

飛越す川に茂る犬蓼

囮竿倉の庇にあつかりて

作食うけに誘ひ合する

發句勿論秋なり蓼犬蓼ともに夏なり蓼の穗の花秋なり殊に茂るとあれば猶更夏なるに○第三囮竿季節慥ならす一句も其理聞えす○腰に打越し也

また春も寒し布子の折目高

寒しとおさては勿論發句なり平句にあらざるに

傘にもひとつ削懸釣る

初荷とる馬を宵より拵へて

初荷正月二日なり削懸釣は松の内過ての事也是も季戻りなり京攝には十五日まて飾を置けとも江戸には七日まてにて門戸の飾を除て削かけを釣なり祇園削懸は元朝なれとも是は釣とは云はす新年の水火を受るなり

松風の吹ほと月はみかゝれて

落した水に泡のみなきる

作德もおさまる寺を持なやみ

此卷の發句月の松なり又月に松を結びては遠輪回なり二に此三句秋ならすは同季つれさるに作德の納る寺とはかりにては秋とも云ひ難し夏作もわるものなり全躰句意雜なり季離れの所ならは可然に

色よさに焚き〳〵よける落葉哉

窓の明るき霜の朝さへ

此脇所謂無文也「てには止め脇も連歌にさへする事故俳諧には勿論なれとも其句の格によるものなり今蕉門の徒は格を知らすして「てにはとめの脇をする故一句拙くて笑至の事なり蕉門の先哲は其心得有てせられしを只其よき所に目のつかぬは傳書に疎き故なり

霜に明るき朝冴の窓

とすれは有文になりて句の据りも一入なるに

掌の破れさうなる數珠の音

二句去に

行脚の尻も先すわる秋

釋教三句去なり一句近し然し是は行脚といへは旅を廻る俳諧師の事と心得たる間違より釋教の心つかさると見へたり行脚とは能仁氏の頭陀執行に抖擻行脚とて諸國を歩行事なり俳諧行脚と云ふは其名目を借りたるまてなりされは俳諧行脚とか畫行脚とか斷なくおしなへては浮屠氏の行脚なり

木葉降奥にひかへて松の月

涸てかたよる瀧の落口

反古焚る烟の嗅き里越て

此發句も前にも云る如く發句の「てに遠慮すへき事なり發句の哉とめは「にてに通ふとて第三「にて留を遠慮するも作者のたしなみ也兎角古き式目を學はすして只末書のみを一家の規矩とする故かやうの事には氣のつかぬも笑止にこそ

狐の穴に傍示たておく

打越に

思はぬ人に團扇敗る〻

同

雜行ことに金を惜まぬ

いかにしても「に文字目に障りて又申事そ

約束の奈良茶斗て蛙聞き

烏帽子も着ねはならぬ世渡り

女房は京生れにて裾長き

中かわるさに隣覗かぬ

奈良茶食類ながら都の地名のかれす打越に京如何なり扨烏帽子も着ねはならぬといふ人柄は鈴ふり神道者か小宮の神主なと〻見ゆされは是も長袖のはしくれ也然れは女房もとなくては濟まぬ斷りなり女房はとする時は亭主はさすか長袖のはしなれとも其女房は田舍生にて不取合の趣ならすは所詮なし烏帽子も折々着る男に裾長の女房は

相應の事なりはと反する場ては無し然し其男に女房はにもせよもにもせよ前句の註なり隣覗かぬも又其再註になりて變化無し諺に云ふ竊桶なり○隣覗かぬの二句去に

飼鳥に屋根むしらるゝ不肖さよ

打越に

老曾ては日野を山家と譏れとも

又打越に

また誰も來ぬやら門に蜘の網

いつれも居所ならすとは申されまし

初心な槍奪を釣て慰む

橋詰の常床髮に顔賣れて

阿波座鳥と書た挑灯

三句の渡り變化なく殊に打こし同し人柄と見ゆ是らも竊桶なり

其日茶屋惣一羽倒こめて

くらひ一間は武具て塞かる

一文字は音訓とも七句去なるそ

乘が來て毎朝かぶる寒の水

水は浴るなりかぶるとは云はず芭蕉もかふりふり申さるへし

生干の和藥とり込暮の月

鹿か斃れて所厄介

隙て居る盆も脫れぬ役袴

是にて秋三句つれたる心なるへし中の鹿か斃れしは雜なり奈良の町なとにては間々ある事なりこれは鹿とさへ云へは秋と心得たる未熟よりそ鹿の妻戀こそは秋なれ鹿の斃るゝは秋に限るへきや鹿の聲、鹿鳴又は鹿とのみ詠て戀の心を案し込たる古人の作例を見誤り近き頃はそれもおさなしとや思ひけんある老人の句に

かち〳〵よ竹にあたるや鹿の足

淋しさや芝にからびし鹿の糞

なとせられしを批判せし事も有し此斃れしも同日の談なり鹿とさへいへは秋になり候はし猫とさへ云へは春なるへし題の本意を失ふ事は如何にめつらしく句作したりとも賞すへきに非らす

隙て居る盆も脫れぬ役袴

御無心ことに御歌下さる

名にも似ぬ武者小路の優長さ

こは前句の御歌下さる人を武者小路殿と名をさして註したるなり其ぬしのきこしめさはいかゝ思さんやそはとまれかくまれ前にいふ前句の噂なり又打こしの役袴も其家の何某と思しくて三句のわたりも

目にたゝぬ次郎太郎を花の番

打越に

本陣は背門に田も打網も打

日和にも雨にもかふる稍笠

貧乏村に澤山な鷄

田を打花に打こしを嫌ふ事勿論又田も打網も打に日和にも雨にも耳に立て本陣に村居所近し

噺聲てもしれる喜多流

打越に

何所の鐘やら麗に鳴る

兩句聞躰なり

娘入道具の休む居酒屋

是は道具をおろして休む人足なるへけれともさる長々しき事には心あまりて詞たらすかく云ひては道具か妖物にて歩行て來るよふ也

鳴狐氷の湖を渡る聲

啼聲と歌にも讃俳諧にもつかへとも此上の啼の字か下の聲の字か何れなりとも一字省きて濟む事なり文字の足らぬ故にや其たらぬ所にはよき詞もあるへきに

小祠にも只の石にも注連張て

打越に

醉はさめ花はうき立つ七ッ晴

是らの句作同調になりて打越聞苦し同卷に

風呂も流も月に明るき

岡崎は靜か吉田は神さひて

なと斯樣の句調卷々に多し老人の癖か

碪ときれて虫の啼出す

打越に

しるしの失せて知れぬ傘

て文字腰と腰に打越なり

出這入に散る軒の惹茣仁

二句去に

穴はりて鐘子かけたる小挽小家

居所ならすや

侮りにくい穢多の小理屈

髮結を裏からそつと呼にやり

穢多の小理屈に困りて裏からそつと髮結を呼にやると前句をかる付也前句無くは何故そつと呼にやるとも知れす初心なとの附句には折々ある事なれとも一句離しては聞えすかの一字離しては讀め申さすと答し惡筆の手紙と一荷にせは捧を折るへし

生僧の鯛味噌呉る壁隣

二句去に

明き家の屋根に龍膽の咲

兩句居所なるに

牛の子撫て子は撫もせす

打越に

竿つゝ張て飛越る川

腰のて文字打越なりしかし是も際限なきまゝに以下は略す

鶉鳴塀の内外かけ合に

啼鶉となくては句格調はす殊に第三ならすや

鳴網に左勝手の山の月

韻字留第三は連俳ともにする事なれとも是は其格を學はすしてせし故只平句也第三の格を知らされはたとへ「て留「に留なとにてするとも平句に同し事そ左もなくは脇第三の句格を古人も論すへきや

誘はれて染まぬも落る木葉哉

門田に殘る鳴のわし跡

鹿小家の火をまた消さぬ有明に

酴醾酴賣に起されにけり

人並に籾をするほと穂を拾ひ

落穂を拾ふ脇の門田をいかん鹿に家も亦其場なり表の見渡の珠數つなきにて○第三四句めに文字折合也

不斷蚊遣りも楠を焚なり

先住の讓りの斧は手に合はす

前句の楠を割る道具を御叮嚀過きて拙く不自在也

苞かと鳶の抓む蓑笠

苞かと思ひし其鳶の心を知られしそ不審なる

波もふみ込旅籠屋の庭

二句去に

秋風に破れ館のまはり番

是も居所ちかし

わたまし當坐茶湯三昧

花咲は一いきとれる鬼神鰒

八十八夜たつた空合ひ

數字打續きて

日暮るゝに風吹に磯の鶴

道はとちらも同し枯蘆

松ひと木伐れは枝葉の山つみて

發句風に植物第三迄續きては變化なし是は只風を風の事とのみ心得たる故の誤なり洛の言水か

風の果は有けり海の音

といふ句の性根を考へ見へるし第三輪回ならすや表の句は猶更かゝる事もたしなみなるそ

雪に來た人も珍らし雪の朝

二句去に

雨舍りする家とてもなし

降り物近く殊に表の見渡しなるに

屋敷の椎て屋根は常ぬれ

等閑に古い佛を持つたへ

上はかり見て妻も定めす

門過る妻車に夢覺めて

居所近し○葵車神祇也佛に打こし

疱の神にさかふ酒のみ

わそこ折こゝ伐り楠の枯さうに

しはらく空に一はいの椋鳥

又打越に

扇さらへに露の時雨るゝ

に文字折合○短句の腰のに打こしつゝきて

西行忌とてさわく潜上

梅生て世上の花はしらぬ顔

上の字前句にも

山から里へ池のはつ鮒

二句去に

落葉焚はかりか徳の御山寺

こは字去なるものを

朝倉方を追立し槍

唯軍談のきりぬき文句にて俳諧なし軍の句の造り方は古人も念頭にしめし置れしそかの炭俵の附句に蕉翁か

ひたるきは殊に軍の大事也

是兵粮はとすれは理屈に落て南無三也ひたるきはとせしか上手のてつまにて風韻そ

迷ひ子は只北山を指さして

茶を乞ふほとの知音もなし

迷ひ子に知音も無し是を二句一意といふて先哲もいましめ置れし事そ

手一束ほと髭延しけり

打越に

口あたりよき六八日の米

數字も支躰も打こし也

白川をこす藪入もおひたゝし

かるた結ひの帶のりゝしき

長紐の文箱の出入眼に立ちて

かるた結前句の人也入の打こし○此他亦前句の人そ

秋の蚊に安家買ふて後悔み

二句去に

雪駄ならへて垣にかはかす

居所近し

日南尋ねて下りる鈴鳴

此鳴も日南を尋ねて下りしや鳥の心知るへからさるに

酒杜氏二村三村かけ持ちに

打越に

旅せねは月の一句も疎々し

數字近くて殊に表の見渡しなるそ

松魚一ふし買ふて贅いふ

亦一文字句去に見へたり

京師にては表六句或は裏移り二三句迄にてやみたる由にて只丹波の月樵洛の杜鵑等と三嵰のみ聞ゆ其俳諧も

福耳と人ははやせと冷つきて

せつ〳〵立てはつす盃

て文字折合なり

花の枝ゆする小僧を白眼廻し

三句去に

門々て小言こき居る鉢坊主

釋教三句去なから其物變化なくては一卷の模樣惡し小僧に鉢坊主白眼廻しに小言きく抔句體似通ひて門々て小言の打越に

いさかひも浮氣と見れは面白き

是も小言にいさかひ如何と覺ゆ

飛んた蓮の實燒は又飛ふ

二句去に

さはとには芥も無いに芥川

三唫に同し作者の句前なれは聞苦し

脇に　植つけ頃の水も來ぬ川

と有る擧句に

汲上る間もぬるむ池水

脇の文字言葉等を擧句にせぬは勿論なるに浪花にての兩吟三唫等も

との山も雲には疎しけふの月

一風さむく河鹿聞ゆる

此脇も「てには留調はす只平句也「てには留の脇は連俳とも習ひの有る事にて本式千句の時は必す好みてする事そかし千句の式にて一處のみ歌仙なとに常々むさとすへき事にあらす兎角傳書に疎く只古人の作例あれはとうしてもよい事と思ふは其傳を知らぬ故なり何故脇は韻字留にすへしと古人の定め置れしやとうしても能き事ならは其式目は入らぬ事なり扨韻字留にすへき脇を「てには留にて調ふやうにするの傳授也

表六句目に

けふは御降此かたの雨

發句けふの月とあるに殊更表の折はしの句なるそ

女のむれに二間ついへる

約束もせぬにもて來る朝の惡

前の女出戀なれは此句にてしかと戀にすへきを惡の約束せぬと有ては決して戀ならす約束といへは戀の詞のみふにや約束も事によるへし朝の惡と有ても後朝とは聞えす旅籠もあるなり

月の宿船底橋を見あてにて

風かとはかり椋鳥の一つれ

白禰宜て一生立る顏の皺

船底橋も拵へ過たり一文字附句になりて

刺す事知らぬ寄居(カナナ)虫やさしき

刺すこと知らぬ虫は是に限るへからす諸虫皆さすに寄居虫のみさらぬなとはやさしかるへし刺すこと知らぬ虫の方多しさす事知らぬ胡蝶やさしきとてもいかやうにも

誠の友は酒屋又六

一休か杉葉立てたるをせられしこそ風流に聞ゆれ酒屋と

打出したるは未熟の作也又六とはかりにて作意あらは聞ゆるに

備へ崩すと見ゆる旅の手

これも前にいふ軍談の切拔文句にて滑稽なし軍の句はかよふに眞面目にするは初心なり成程俳諧といふ眼かなくては

脇に

下開寒く川鹿聞ゆる

とある擧句に

籠打明て薪揃ゆ家

未た擧句の法を御存知無きにや句もまた拙し

綿賣のすけなきものに時雨かな

烏は曇り鷺は照る冬

向ふ風天窓つかゆる駕かりて

市人あての酒の味なき

第三向ふ風といふ見込時雨の場へ戻りて聞ゆ殊に第三句の場と變化すへきものを無素氣無味表の見はたし

二句去に脇も冬の字の手柄見えす

檜笠かけた柱の露雫

二句去に

音かしましと庭の松賣る

又二句去に

問つゝきの方角迷ふ朧月

共に居所近し音かしましとを云ふはかの瓢を捨し清貧の人也されは松賣とは却て心きたなし是上下不相應の句也

榎の僧正の如く伐捨てこそ

孫は撫すに牛を撫てけり以下畧

右俳諧七草に載せて打越句去折去等の大概を顯はしたるものゝ中抄

場の越を嫌ふ事

問曰場の越と云ひて打越に山と有に家と附れは嫌ふ事あり居所は三句去るへしと聞傳れとも山に家とは事替りて嫌ふへきに非らす、いかなる事にや

答曰其句體によるへし、されと附んとして句を作れはたとへは

山〳〵は殘り少に落葉して

淋しき上に又寒うなる

わら磯のすき間も見へす打曇り

と附侍れは淋しかる人か山を見たると附たるに、又さひしかる人か海をみたると附たれは前句の附たる所を又附んとするなり是をひきさくといひて嫌ふこれ山と磯と其場打越せはなり、場のことといふはすへて此類なり、附ぬ場はくるしからねと付るとてする句なれは付ぬ場はいはぬ筈なり、活法の書に居所三句山類水邊等の三句去なるもその附の同しからぬ樣にとての定にあらす、其時わたりを不拵たゝ其名目はかりの去嫌ひと心得侍るはわた

りの論には不及なり

又問曰山に越して此議の句はいかにもわろし夫れ誰も知りたる事なれとも、人情の句に少しく場の有をも場なりと嫌ふはいかに

答曰附句は變化を第一とす、されは人情たりとも

建付の透たる宿に肱まくら

とすれは淋しかる人の肱まくらしたるなり、しかれとも寒いと有句なれは其寒いことはりを附んとして、建付の透たると句作するなり、其場は山と家と替れとも寒いいはれを附たる場なれは、場といひて嫌ふなり、同し肱枕と付るとも

女房を無理に泣せて肱まくら

と趣向を定めて五文字を女房とも傾城とも、其作は其席の機變によるへし、此外は一卷のうき沈みを見せていかほとも働くへし

打越を苦しむ事

問曰東西夜話に俳諧に打越をくるしむるは附方の變化を知らさる故なり、昔の俳諧はさる事にやあらん、今の俳諧は打越かつて苦しからすといかなる事にや

答曰苦しからすとは苦しむことはなきと云ふことなり

亦問今我々かこときとて席に臨て人情其場等の打越ありて附句にくるしむは夜話の說と違はいかに

答曰三法にて案方を定め八體にて附侍れは苦しむるはなき筈なり、然れとも我句には體を附れとも、場の内には人情を交へ降物の内には竹木なとを交へする故に、其交り物か打越へ障りて苦しむるなるへし、我附句に降物はかり人情は人情はかりにて、道具表式等の交物無時は我次に附るものも變化の附くるしむ事はなき事なり

問曰人情はかりにて作をせよとは不自由なる事にあらすや

古人も交り物有て句もおもしろし交り物なしにせは面白からぬ句と成て樂みには成り侍らす、交り物なしに句ことにせよとはせまき教にあらすや

答曰其許は交り物なくて一句の上おもしろからすとおもはゝ、いかほとも交物して遊はるへし、元と遊事なれは好む方に隨ふべし、今いふ所は打越に苦しまぬ仕方をいふなり、尤支考か教へにも交り物なしに句作せよとは云はす、是は全く予か新製にて打越の附安からん爲めなり

東西夜話の八體の引句にも交りあり

東西夜話前句

けふも浮世の入相を聞く

其人　つく〳〵と木枕の角廻し居て

木枕は道具なれは會釋の品の交りたるなり、夫れを予か案に

つく〳〵と腫たる膝をかゝへ居て

とすれは交り物なき人事なり

其場　湯上りの籠に近き草の花

湯上りといへる人の上に似て交り物にて予案に

細蔓のすたれに近き草の花

とすれは交り物なきなり

天相　飛鳥の影もかすかに雲ちかき

飛鳥は地に屬すの形あれは會釋の品にして交り物なり

予か案に

赤き日の影も幽に雲ちかき

とすれは交り物なきなり

時節　門松の雪もしつかにとし暮て

門松は形ありて會釋の品雪は降物にして時節ともきつと定かたし交り物なり予案に

寒空もはや程近く年くれて

とすれは交り物なきなり

問曰しからは支考か附句は交り物有る故に惡しきにや

答曰あしきといふにはあらす、其子細は「けふも浮世の晩鐘といふに其人はつく〳〵と居てといふか附にて木枕は句作なり、其子細は木枕とはかりは前句へ不付つく〳〵と居てとはかりは附なり、爰に付たる所の躰を見るへし、餘は是に準すへし

問曰東西夜話に打越のくるしきとは人の附たる跡を又附んと云ふ人なりとあり、是は人のしたしく付き侍る跡なれは此度は餘り付ぬやうにする事にや

答曰さにあらすたとへは

けふも浮世の晩鐘を聞く

つく〳〵と木枕の角廻し居て

此次は木枕を廻すといふ所に附へきなり、其木枕は旅籠と見て

扨此所高い宿賃

高い安いは翌朝ならては知れす又木枕の出るは夜の事なれは打越の晩鐘に障りはなけれとも、何とやら晩鐘頃に宿りたる事のあるましきにもあらねは、扨の一字に少し觀したる聞えもあつて、越の觀したるに聊心障りあれは

椀うつふせに普請場の膳

とすれは朝飯の支度にも聞ゆへきにや、此外陣中とも傾城町とも其木枕の有へき所はさま〳〵成るへし、是を會釋の案し方といひ旅籠屋普請場は附方に其場なり又前を女と見る時は傾城町として

水雜炊を金のかけ盤

かくする時は是を奥方と轉して此次を付へし、如此にはいかはとも轉すへし、附と句のよからぬは予か未練なれはなり

問曰前句木枕といふ句作なく、只人のみにて一躰前句に附侍らは轉し方むつかしくあらんか

答曰人の上にも前句の附たる所の躰と用とありたとへは、

けふも浮世の晩鐘を聞く

つく〳〵と脛たる膝を抱へ居て

つく〳〵と居てといふか其人の附にて腫たる膝は句作なり

此木屋町は能き座敷なり

此療治の人と見たるなり下畧

附句案やうの事

附句の案し方發句は格外の事なり附句は其座に望みて無情に案しぬか能きなり我か心沈みぬれは趣向もしつみ我草臥より人も草臥て一座終に成就せす附句は初念の趣向より心を落し付るかよき也此故に趣向を定る傳受あり惣して工夫は平生にある事なり其座に望ては只無分別なるへし定家卿も歌は深く案してはいたらぬものなりと仰られしなり附句第一調子のものなりあれはとて速く出すへからすなさとても久しく案し入るへからす能くも惡くも一座の程を知りてこそ俳諧の世情に便りある修行成としるへけれ但し大事の附句は先云はなして後に思ひ返せは心の結れとけてかく別なり二十五ヶ條

附句趣向を定ること　其趣向と云は一字二字三字には過くへからす是を執中の法といふなり物其の中を取て前後を見る時は百千の數有ても前後近し人ははしめより案して終を尋る故に其中隔りて必す暗し口傳源氏物語のこと　されは表八句の趣向は

初さくら、塗笠、暖簾、村雨、鷺、手習子、月、新酒

此の如く趣向を定置てあるひは作にも或は不作にも或はかたく或は和らかに黑白青黃の姿は作るに皆只句作の手つま也此法を知らされは人の俳諧に驚く事あり前二字三字の趣向より變化の姿も明らかに見ゆる故に最打越の好惡を速く知る故に此法を知らざる人は我句を作りて後に打越もよからす變化も面白からねと今までの骨折に心殘て其句を崩す事かたし二字三字の趣向をかゆる事は曾ておしむへき骨折にてもなし此法は第一に變化の爲なりと心得へし古への儒書佛經源氏伊勢迚も其中よりはしまらすといふことなし天地豈に人の爲に生せすや其中には其初なる事を知るへし口傳天地は人の名つけたる事あり　されは二字三字の趣向にも渡らす五體八體の附かたにもよらす世にいふ空撓といへる案しかた有て其時其句にあらされは文字の道理に書答へかたしそれは百韻にも三所四所はあるへし然らされは言路の道理に落て俳諧に不傳の妙所なし此執中の二字をさして我家の傳といふへし人よく此條を工夫せは天下の政明らかに人間明くれの働をも知るへし全條

前句へ附方のこと　今日初て俳諧仕候者も付申候へは必す前句へつけへからす隨分はなれても付ものなり付やうは前句へ糸程の縁を取て付けへし前句へならへて句聞へ候へはよしと申置候句の行樣段々申置候へとも紙筆に申上られす候云々杉風消息

附句見分け合點のこと　芭蕉曰近來の俳諧世人見樣を知ら

す古さと見えし門人ともに見樣申聞せ候

一篇見ては只輕く埒もなく不斷の言葉にて古さやうに見え申へし

二篇見申しては前句へ付やう合點行ましく候

三篇見候は丶句の姿かはりたる所見へ申すへし

四篇見申候は丶こと葉古きやうにて句の新麼所見へ申へし

五篇見候は丶句は輕くても意味深き處見へ

六篇見候は丶前句へ付やう格別はなれ只今までの付やうは少しもなき處見へ

七篇見申候は丶前句の惡き句にはわしく正直に致候ところ見え申へし

是にて大形合點致すへしと被申候杉風消息

執中の法

芭蕉二十五ヶ條のうちに附句に執中の法三義のあり執中とは中を取るといふ事也案方の肝要とす源氏物語なとの大部なるものも須磨の左遷より筆を立て前後は枝葉なりとそ淨溜理の五段續きも先三段目のおもしろき所を作してさて初段は寄せものなり附句も左の如く前句に對して附へきものは一字二字三字には過す是を辨されば句に向て趣向を求ること遲し爰に至て執中の法を用ゆへし其一字二字に手爾葉を加へ延もしちゝめもして二句連綿する事也附句は蓮の莖を切はなして中に糸を引か如く情のかよひたるを上品とすつらねうたといふも此心にや

へし折枝のからき肉桂

扨は夢座敷なくなる草枕

附は夢の一字

糊强き袴に秋を打うらみ

鬢の白髮を今朝見付たり

附は老の一字

手紙を持て人の名を問

本膳が出れはをの〳〵かしこまり

附は振舞

此秋も門の板橋崩れけり

赦免にもれて獨見る月

附は左迂

鳴子おとろく片藪の窓

盜人につれそふ妹か身を泣て

附は盜人の妻　以上俳諧小鍛

執中の法に附合は先つ趣向を定むへしその趣向をいふは一字二字三字には過くへからす是を執中の法と云ふなり物其中を執て前後を見る時は百千の數ありても前後は近し人は始より案して終を尋る故にその中へたゝりて必くらしされば表は句の趣向の定めやうはたとへば

初さくら　塗笠　暖簾　村雨　鶯　手習子　月　新酒

斯の如く趣向を定置て或は作にも或は不作にも或は和かにも黒白青黄の姿を作るに皆たゝ句作の手つまなり此法を知らされば人の俳諧におとろくも有り尤二字三字の趣向より變化の姿も明らかに見ゆる故に尤も打越しの好悪をはやく知るか故に此法を知らさる人は我句を作りて後に打越もよからす變作もおもしろからねと今迄の骨折に心のこりて其句を括ることかたし二字三字の趣向をかゆる事はかつてをしむへき骨折なり此法は第一變化の爲なりと知るへし此執中の二字をさして我家の傳と云

附合はその趣向を先とすへし趣向の字は前句の外の姿にて唯二三字を定むへし此定むる二三字の趣向に四五句の指合去りきらひの吟味してよく〳〵工夫を決して二三字の前後を句作るには前句の内のうつり言便にして制するなり依之これを執中の法といふなり二十五條解

逃句の事

逃句は多く形なき寒暖四時より風雨雲霧の類晦朔の類にて其數少し依て逃句の方時節は用る事多用なり

この頃は春めくはとに成にけり

とする時は全く逃句なり、是其形なく輕けれはなり、されはこそ十論變化の段は逃句は風雨寒暖の類より時節〳〵のあしらひをいへは逃句は輕く會釋は重しと見へたり、依て時節の用は逃句に多用なり、たとへは司召といへは時節の逃句なり、司召るゝとすれは人事に引けて逃句の用はなさす、しかれとも司召るゝ頃に成とすれは、又逃句となる、多用は逃句に用るにありと知るへし、かゝるか故に十論に逃句の内に時節と云ひたるなり俳諧或問

十論に三法の附方あり第一を有心附第二を會釋第三を逃句（ニゲク）といふ一卷はすへて此三に變化すへしされは俳諧の案方といふはいつれの附句にむかふ時も先とて我句を案すへからす始に三句の打越を見た爲め其次に四五句のはこひを考へ其次に目立たるさし合を見あはせてそのゝち我句の趣向を案すへし中略

俳諧は本より心のあそひにしてましては雖附の道理あるをやさるを浮世のよい事つくしに腰に萬貫の銀をまとひて鶴に乗て楊洲にあそはむといへるそれらの程をしらさんにはさて會釋といひ逃句といへる會釋は打越のむつかしき時に其人の衣類か喰物かそこらの道具表色にて程よふそこを除く事也さるは世間の諺に牢人あしらひといふ事もむつかしき時の機變也およそ百韻は六七十句も此會釋にて過るものなれは其中の模樣はさま〳〵に變して世法の時宜も此間に修すへし本より會釋といふ所にとちらへも變化の自由なれは是を俳諧の地と名つけて一卷の變化は此會釋によるへし逃句は全躰別名にして風雨寒暖のたくひより時分時節のあしらひをいへは逃句は輕く會釋は重し爰に別名の故を知るへし

然るに第一の有心附は其日其場の模様によつて或は寒いに物着るとも或はひたるいに物喰ふとも親疎は附所變のにしたかへは道理と理屈も其道おなしくよいとわるいも其場ひとしく物の至極は危き所にありて名人と初心との位地なるより上手はおそれて附ぬ時もおほしかへす〳〵もおそるへきは有心附のまきれにして此附方には先手後手の論あり本より俳諧の案方も碁將棊の工夫にかはる事なしたとへは前句の模樣にて

大名なれと碁はお下手なり

とあらんに相手は商人と趣向をさためて「損した門に畏ると句をつくれは商人は先手にして畏るは後手なり誠にお下手の風情を失はすおそれ入たる風姿をも見るへし しかるに世間の附方は先手に畏る者を案してもしや句つくりに商人とも思ひよらめと丶明眼の師は先後の理屈をしりてこれは前句の噂也と難すおなし口より同し事をいへとも先後に上手と下手ありて爰に俳諧の明暗をおそるへし下畧十論第九變化中抄

伸句の事

伸句といふは縮る句に對していふなり縮句は力を作して付心も立寄て付縮るなり伸句は逃て付ゆるめたる也「思ひ切たる死狂見よとまて付縮めて「青天に有明月の朝朗」「湖水の秋の比良の初霜」と二句附伸したる風景えもいはれす是等の二句は其前六句とまて緩中急「序破急のこと」に附責來れは死狂ひ見よにて事盡ておのれと拔へき場に至れり此見わけなくして又こ丶を附責る時は無理になる故或は重み付て醫陶敗なりと卷物奇麗ならす六句とも責來り拔へき場を逃さすぬきたる故此二句の伸句まことに快然として一入榮合よく麗しく見る也

深川の夜話に嵐雪の論に附合は大方料理の甘し辛しすく苦く物による如し能きも極て能きに非らす惡きとても亦惡しからすといへり此論よく當れり

面白き句の縮たるも場によりてうるさくさまてもなく尋常の伸句のやうなるを取替て居へたる時却て卷面榮有て奇麗に風味よろしく成る事ある物なりされは能きも能からす惡きも惡からすと知るへし直旨傳

遣句の事

遣り句を伸句逃句と同樣に覺たる輩多し誤なり伸句は所々にあれともやり句は數多なし是は殊外に附つみたるとき又は見渡し及席上しふりたる時は安々と句作りして其場の乘りをよく取り句を投やりにする也先師殊の外工夫ありし事也冬の日集のさも工なる卷の中に

藤の實つたふ雫はつちり

と云句あり其の後の集にも猶此はからひあり炭俵になく深川集にも亦あり附詰る場なし故にやり句なきなり

全體前々より運び力を盡す事弱く調子に緩中急なく常に平地を行く如くする卷にはやり句すへき場なし尖り來る所なき故なり

西瓜きる如く、梨子喰ふくちつきの如く鍔もとに切込如く大木を倒すか如くなとの敎へを味ひ知りて其意氣自得すへし

附句をたゝ上手にするはかりにては得へからす其氣かけろふの如し

景色と風情との句と同し事に思へるも誤なり

景氣は附責めたる跡の餘氣をさます場の外はなし

風情は附責るうちにも句に人を出さすして人の上を聞かす句にて附ふたる二句の間に其人其住居なと見ゆる也

ほつれたる去年の寢蓆のしたゝるゝ
寒徹す山雀籠の中かへり

是等の類也伸句ならは勿論景色とは大に相違せり是は風情の句といふ也景色とは

一筋も青き葉のなきすゝき原
薄雪の上に霰のころ〳〵と

是なり其用る場も句作も大に異なりと知るへし捨句といふは遣り句とは又別なり是は儲の會なとか千句にかさやうの時の心得也曠くましけれは各能き句せんと下心に思ふ故に席沈てしふり出し卷はしらす其慾を捨て捨句して席の氣を引立るなり今少しと思ふ所も自己を捨てする也

客ふり席ふりの氣變なり

卷中の序半急の事に古より敎るところなり其中に亦緩中急の詞有る事也此事は先師も曾くは沙汰に及はす意に持つ大事なり初心の輩加樣の事に頓着すれは句作繕まり却て修行のさはりとなる故也

句毎に風流と風情とを失ふへからす風流は心にあり風情は姿にあり風流なきは俗に落ち風情なきはしほりなく匂やかならす句作利口有るはいやしく云詰めたるは附へき運ひなし

但此風情といふは初に云ふ風情の句と稱るものとは別なりこは何の句にもせよ一句々々の粧ひを云也是を失ふ時は句々木の切石屑を見るか如く人體の皮骨を去りて骸骨を顯はしたるか如く拙なく賤しくきたなし殊更に俳諧は俗談平話をもて述るものなれはいとふつゝかにして聞苦く吟聲も淺間し此風流と風情とを含むか故に諷て拙からす吟して耻る所なし此境よく〳〵心得へきなり以上直傳

遣句　當世付句につまりたる時ざは〳〵と鍛を吹く風只目ふるまに雲はれて行なとゝいふ句を付るをやり句と覺えたる人多しさにはあらす前句はなはたむつかしき句又は付んとすれは打越の心あしく打越しを宜しくすれは付る事もならぬやうなる時只すこしはかりよせて流しやる事なり句のたくみになきをいふにはあらす不功の人はやり句は得せぬものとむかしより申あへりとなり俳諧名目抄

二句一意の事

二句一意の事とは

いつを昔　〻顔直し賑ふかたのめてたさに
たけをくらへてむすふ水引

深川歌仙　淋しさや湯守も寒くなるまゝに
殺生石の下走る水

二句一意は前句に云殘してあるものから越向を遠く句作を近く附へしさなくては附かぬ也

ひとつ里　それ聞む毛衣人のうつへくも
孝心しりも富る秋の戸

是らの句も凡て一卷の模樣と知るへし俳諧の聯句は一卷のやすらかになる樣にすへし一句にて功を得んとすると きは一卷みにくき物也欲をさりつとめて一卷を能くすへし俳諧寂楽

二句一意とは何の爲にする事そと云ふにたとへは貴人なとの句にて一句かへされぬ句に譯聞えす埒明ぬ句の遣たる時に其次の附句にて足らぬを補ひ埒明けてやるを二句一意とは云也

亦功者同士の中にはふと其意の有る事もあり「雉子か出て鳴けはあれをと思ひぬる」是のわさびを見るにつけても是二句一意也是は上手同志の上には又有る事也もとめとすへき事にはあらす

總て表に鐘又は入相なとゝはせぬ事也音としても聲としても不用時鐘なとゝつかふは苦しからす表に昔といふ事は不用夢も嫌ふ也

戀の句の事につきて論あり忍ひ男の來てイみたるにそこの下女の障子の明けたてにつけて聲高に叱るは忍ふ思に折かわるいとの心のひゝきを知らせたるて下女の心にはさしてもなき事を叱り給ふと思ふらめと其意は忍ふ男には通する也其叱るを實に落てしからるゝ事を捜したらんは全く前句の理を云なり此叱るはさして叱らすとすむ事をあらゝかに叱るはいとしき心のひゝきより出たるならんとその裏を案して見れは庭の雛に光源氏も居給ふならんとそこに虚實は明らか也戀の情は勿論此附心要用にて常の附句とても茲のあんはいは工夫すべし

我門に法に戻るといふ事要用のこと也發句とても附句とても平生とても此意を忘るましき事也たとへは三尺の溝を飛んとする時は一尺もとりて飛へはやす〳〵と飛也扉をたてんとするにもきしみて立かねる時は又引戻しては立引もとしてはたてする時は自然とたつ也行つまりて溝を飛んとし亦はきしむなりに扉を立んとすれはいかやうにしてもやすからぬ也戻るは進むの理にして戻るは戻るにあらす進むの用也と知るへし附合に戻るといふも附る爲めの用也とそありかたき敎へ也十二夜話之七

附合の敎へに　上手の鞠は蹴あけるより落るまてか何とな

くゆつたりとして而かも鞦のはつみも速かに鞦の姿もしかとよく見ゆる也それ故に上手のは暫く空にあるやうに思はるゝ也附合も左の如く上手はゆつたりと句作るゆへ跡の働にも苦しまぬなり下手の鞦はせはしくて鞦の働もせはしければ跡も難足に成りて苦しむ也附合の味合は全く是らの按排にある事なりと申されぬ

總て附合は前句の二句をよく〳〵吟しなせは前の句の附心もたしかにさはけ用と不用も明らかに見さためてひたと前句をよく見て心くはれは自然に趣向出るもの也初念の趣向にたゝよふへからすとの教へもあれと全く初念の大切にしていかやう樣〳〵の趣向出るとても初念の意は退きかたきものなれは初念か大切也とかく前句をよく工夫を仕盡してさて趣向を定る物なれは初念に疱忽の趣向工夫すましき事也されは附に向ふて案するに面白きよき句を附んと思ふ事甚たあしゝ惡しき句を付ていつれにも先埒を明て見れはそれを手かゝりにして句作るへし

さてまた爰に習ひあり前のはこひ三句の渡りを先つ工夫する時に亦其工夫にしつむ時は心に重く出來て沈む故に趣向にも骨折ある趣向出ても句作りしつむもの也又それに心付て前のはこひ三句の用不用を先かくる心に置ていくらも句作りして一句作りては三句の按排一卷の運ひに心を配り又句作りては心を配りいくらもする内には自然とあたりさわりなく種よき句作になりてとゝのふ也

附にくき所にても兎角趣向ある〳〵といへは自然と座中も心からみて趣向に沈む事なしつゝしむへき事也總て附合に行つまりて爰は運ひむつかし三句の用不用も見わけかたしとて趣向のなき事は有ましき事也天地の間の世情に遊ふものなれは趣向附合のなきといふ事あるへき道理なしさるは人と人との相對にもかはらす斯くいへは氣にあたるいはねは用か辨せぬといふ時にはけつかふ人々言語を工夫してあたらすさはらすによきはとにいひなして今日の用を便するなれは俳諧とても世情のあつかひなれはこれに何そかはる事あらんや畢竟五七五七々の法にかゝはりて句となれは外の事をいふやふに思ふ故に趣向に行つまる事ありさはあるましき事也

世上の交りにも按排をしらぬ人は附句にも趣向はなき筈也爰の事は大切なること也

廬師の口傳に附合に行當りたる時には附合をせんと思ふ故にひたもの句作にまよふ故にとゝのひかたしさやうの時は一向句を作る事をやめにして只世上の人の言話の長短或は山川草木の姿をひゝもの話しにするやうに世上に今日の言葉をもつてさま〳〵にいふて見れは自然とよきはとの言葉に言あてゝ付句出來る也五七五七々に直に句作せんと思ふゆへむつかしく無用の事もいはねは一句か聞へぬやうになりて案しまよふ物也とかく世上の平生の言葉にして見て附か附かぬかを工夫すれは自然とよき程

の言葉つかひ有て附句とゝのふ也と庶師口傳ありしよしありかたき事也

昔より今迄の俳諧に世上の事を漸くに二十ほと人々句にいふていまた百の物なれはいはぬ事か八十余もあらん天地に一片に遊ふ事なれはさはなき筈也畢竟は世上と句と別なる故なりと老師か申されしありかたき事也

附合にも世上の按排にも沒滋味といふ事ありさるは味ひのなき事也味なき物は甘くも辛くも成やすし世上の事にとりて工夫すべし言葉もいひ出さぬ先はモッシミにしてふと味を附こそなふて言出せる事は其誤を言はときかたし爰に沒滋味の内にあんはいをよく工夫して附合をせんには甘くも辛くもなしやすけれは虛實も爰に自在ならんさはとて味のなき事は今日の世情にはつるゝ也此鹽梅は常に心の附合にて工夫の第一也

附合に兵法のならひ有り是は全く付合の常用也紙ひとへのへたてあれは百里も同し事也ふん込て鍔元にて付る時に結句其理を得ること也とかく我物にして按排を工夫すへしとそ

附合に折聞附といふ事あり此折聞といふは佛法の十界にして地獄我鬼畜生修羅人間天道聲聞椽覺菩薩この十界也其内に折聞は段々と修行して佛の道も悟りおはへたれともいまた人にはとこす事あたはす一身はよく悟りてすましたれとも人に方便をなして救ふ事あたはすよつて佛界にいたりかたしされとも此折聞迄にも修行の至る事かたき物なれはあしきといふにはあらす

注文のとをりに看そろひかね

吸かけきせる女房へやる

此句にて考ふへし是よく附得たる句也されとも女房へやるといひつめてしまふたれば一句に尾ひれなし一句は至極は得たれとも跡へはとこす事なりかたし是折聞の附也勿論あたらしきといふ事にはあらすと也附合にうす鬢厚鬢糸鬢なとゝいふ事は嫌ふ事なりそれよりけつく下さまの治はつかへとも右の類はつかふましき事ならひ也とそ附合に屈したる時の敎に曰合ぬ敵と見て一太刀打てかけ通るといふ事あり聊あしらふて飛のいて附ること也是また入用の事也とそ十二夜話五

附句は往古より三變也昔は附ものを專とす中古より心附を好み元祿此かたは「句ひ「響「撓なといふ所をよしとすれと一卷の摸樣により附もの心附も亦あるへし獨歩行

附合の事

卷頭の句は景曲にして姿あるかよき也有心かちにふかきは脇も六ケ敷けれは表ふり安らかならす是は尋常の俳諧をいふなり事によりて發る句此論の外也いかやうの句出來んも知るへからす出來に任せて是に應すへし猿蓑集巳後常の席には景曲なる句卷頭に置れたり冬の日なとは有心

の發句より起りたれは全體重みを離れす猶諸集を見て其旨を知るへし

發句出來たらは體の句か用の句か又有心無心の大中小のはたはり時節等まて是をわきまへて發句けしきならはけしきの脇人倫人事ならは脇もまた是に隨ふ或は大に或は中に小に姿情意味其發句の機嫌にかなふをよしとす

古說に附句は一卷の糸の通りたる如くせよといふ敎あり芭蕉素より是を捨給はす左れと古の俳諧は連歌と等しく詞の上の論也

芭蕉は詞の俳諧をとらす心の俳諧なれは附合も是に隨かひ連歌及ひ古の俳諧は詞の上にのみなれは前句の詞にすかりて作る也芭蕉の俳諧は前句の心に問ふて心に答ふるの附也故に古俳諧は蓮の糸詞の上を貫通し芭蕉の俳諧は心裏を貫き通す也是をなすの術は「響き」「匂ひ」「技折此三つに蓮の糸を導き通す也されは一句も此三つの內に外れし句有れはそこにて糸か切るにより貫通せすして連句一卷の疵となる也但ことはりなれは一句も附かさる句とてはあるへからされともはしめより終りまてたゝへた〳〵と附るのにはあらす先第三を過て後は始末地の付といふを下敗にしてそか中に其折其場有りて一句に一句の附或は附へき場或は附せむへき場と云あり是を一卷一折の摸樣とは云也此又摸樣に順逆表裏の口傳あり其場其折の變に應して起り來るもの也芭蕉精撰の卷々を深く味ひ見なは大やうは考しること有へし一卷の首尾と云事ありて是又その首尾にかゝはるの一也唐にては詩をうたひ樂に合せ本朝にて和歌を諷して樂をたすく故に和歌は則うたひもの也俳諧も其和歌の一體なれは同しくうたひものなり此諷物といふ事を常に忘るへからす忘るゝ時は賤しくも拙くもなるなり師說錄

附合は先四五の運ひ四折の摸樣、打越しの氣味を見合せさて前句を見て考ふへし芭蕉云附合は耳に聞くへからす目に見るへしとかや是則ち初念の前句の姿を見るといふ案方のことそ姿を見るといふは言附たる所を見ることにあらす前句の姿と云ものあれは夫を聞て見ると心得へし只吟聲の拍子に乘る可らす是を姿を見る案しると云そ

偖附合の工夫は七名八躰あり然れとも一ッ〳〵其句に當て考は附所延引すへし是は日頃より熟讀して居る大切そ

先大樣有心會釋逆句此三つにて添行へしそこて段々前句の六ヶ敷三句の渡り有て其所七名八躰にて働くへしたとへは不斷は浮沈遲數にて濟事と同然なり病氣六ヶ敷時は惣身の脉を窺ひ藥をもる事なれは此心得引合て考ふへし

先前句を得て案方に取付時は打越前句の姿を考へさて前句の意を呑込むへし其上我句の姿句作りの結ひ吟味をすへし、句作といふは趣向の後にて前句のつなき所是句作に有ることなり、趣向は前句の噂をはなれて前句に外の姿を見るへし、句作は前句の由を尋て前句のうちの情を

嫌ふべしとの教を專一に思ふべきなり大方趣向はかりにて付合句作の前句の情なり結ぶ所はなきものそ夫故前句の噂にも付ぬ句も出來るなり自句の結ひ一句のうちからは前句々々を能く心に浮ふれは幾くらも面白き趣向は出來るものなり必す前句を餘所になし我句はかりの飾りを思可らす只一座一連首尾能き所惣體の心得なり案方七名八體の事左に證句を顯すなり

案方七名

有心　一字一言に心を配りて前句の姿を失はす句に其姿をとゝのふと云

大名なれと恭は御下手なり
商人は損した門にかしこまり

人情　三句へ渡りたるときは三句目は前の人を出して前句の人に對するをいふ人情逆ひのあしき時の用なり

あら應は唯の拳にいさませて
大名なれと薄着好なり
麥飯にわさと侘たる老の錆

起情　風景三句引張たる時三句目に人情をあしらひて前句の情を付出すなり風景勝なる時の用なり

一むら雨の通る日の影
五六本田中の杉のあつちこち
我は狐にはかされたやら

會釋（アシラヒ）　打越のむつかしき時は衣類飯食道具衣食にて附て轉するを云なり

逃句　打越の轉しやう前人悲勝なる時は風雨寒暖時分時節なとにて付るをいふなり

右二名一體にして會釋は重く逃句は輕し是を附合の地といふなり

拍子　一卷のかたみを言語の拍子にかけてちらし用るなり

燒餅の二ッ巴に三ッ巴
赤銅（カハ）鍔（ツバ）のなんた辨慶

色立　乘り掛々の挑灯しめす朝の風
汐さしかゝる星川の橋

附合八體

けふも浮世の入相をきく」といふ句に

其人　つく〳〵と木枕の角廻し居て

其場　湯上りの籠に遠き芥子の花

天相　飛鳥の影もかすかに雲近き

時節　門松に雪も靜に年くれて

俤事　楠かまめな便りのうれしくて

物語　入道も娘に後世をとりはつし

時分　朝夕の時分なり、湯上りの句の類なり

觀相　風景人物の觀なり、飛鳥五月雨の類なり

以上俳諧續稽古

附合八體の事

前句　使のものを待せ置てや

其一　與樣へ炙の隙をねかひ出

其場　板の間も鏡の如く奇麗すき

時分　暮るとも月夜は安き渡し舟

時節　御流れの例に涼しきあやめ酒

天象　一通り山から晴るゝにはか雨

觀相　記念とはおもひかけなきうき別れ

俳　宗盛の機嫌を熊野もはかりかね

時宜　とは其座、其時の時宜也證句引かたし

此八躰はこと〳〵註にも及はす句面にて分明也但し面影の事は七名にも名いひ叶かたきもの也實に無分別の場所の分別と心得よく〳〵古事のおもかけを取合すへきにこそ

附合八體の七名

有心　參りにも船下向にも船にして

となりの婆々もこちて出來合

是を有心付といへる心は前句にいつれとも其體なきは付にて姿をあらはしつらなる所の句體なり下七文字にて有心のこゝろをふくめり

拍子　上戸衆の寄れは更るも知らぬやら

さらり〳〵と手を打にけり

是を拍子付といふ心は前句に噂する所を付にて其姿をあはせ噂と姿と立ならひ自然に自他を分る也手をうつことときの品を拍子といふにあらす

色立　赤坂の名も折からに紅葉して

知行寺やらいかい白壁

是を色立といふは紅葉に白壁と色を取合せたる也しかし此附合のすかたはけやけきゆへしゐてする事にあらす百韻に一兩所と心得へし

起情　雲雀も上る程の日なれは

春風に醉はせはせしと船にのせ

是は起情也此前句には情あらはれす付句にて情を述るなり常船に醉人なからも此長閑き空とさし所を極め其姿をあらはして二句一意の句作とするなり是は一折に一所はくるしからす

向附　つかひのものを待せ置てや

異見いふ時は言葉も改めて

是を向附といふは使にさし向ひて前句より趣向を求出さす肌合むつましく連する體也自他は本體各ありといへとも五句三句のわたり親しき時はかくの如くする事もあり引句の外にくはしくいはゝ大名といふ句に老僧の付合するをも向附といふへきは其卷編む時の事也

應答　一代の料はないかや秋の暮

ほろりと落る蓮の實の音

是は應答といひ又會釋ともいふなり應答は自問自答の

心にして會釋は前句を釋する心也二句一人の述る所にて詞は自他あり是も打越のむつかしくわたり來るときの機變としるへし

遁句　幾年も箔のはけたる宮造り
　　口にかさりをいふは宿引

此付合の體遁句なり是は會釋の別名のことくに誤る人あり遁句は一所に別人有て前句にもたれす先つは遁句作りの趣向風雲寒暖の類より時節神祇の姿にて輕くつけはなし次へわたす故に尤手柄ある句なり會釋遁句はわかちかたきよし先哲も風話あり初心の人これを作る事なかれ其引句

　　加茂の社はよきやしろなり

附合八體の七名

有心　顔に懐梓開ゐる
　　黒髪をたはゐる程に切殘し

有心附とは多くは前句人倫のさまにして士農工商まち〳〵に貧福の情あり老若の姿あり貴賤の品は其人に隨て衣裳の摸樣も身帶の格搆も前句の言外を見盡し聞盡して聊もおのか按排を附せすそこに其人を見るやうにして一字の手爾葉をも殘さゝるそれを有心附と云ふ

柏子　芥子尼の小坊交りに打群て
　　折るゝ蓮の實たてる蓮の實

拍子は宗因風に今の姿をとゝなへたる事也

色立　引渡す虹赤〳〵とはるゝ雨
　　峰に峙たつ坊の白壁

色立は頼政か紅葉に白川の類なり

起情　朝顔の花の手際に咲初て
　　腹の鳴來る水のかはりめ

起情の名稱は有心に屬するか如くなれとも無情を有情に轉起するか如き附方もあり

迎附　狩人歸る岨の松明
　　落武者の翌日の道問ふ草枕

迎附とは前の句の人に人を對して迎合に付ることなり又句質目立すして前句の夫に是を對してあしらふか如く付ることもあり

會釋　里下をしては伯母御の泪くみ
　　塗た箱より物の出し入

會釋は打越のむつかしき時に其人の衣類か食物かそこらの道具等にて程よく附る也凡そ百韻は六七十句歌仙は二十余句此會釋にて過る物なれは其摸樣はさま〳〵に變して時宜も此間に屬するもの也一卷の變化は此會釋によるへし

遁句　此度の藥はきゝし秋の露
　　杉の木末に月かたくなり

遁句は會釋と同體別名にして風雲寒暖の類ひより時分時節のあしらいをいふ遁句は輕く會釋は重し爰に別名の故を知るへし以上蕉註解付記

附方八體の事

其人　其場　時分　時節　天相　觀相　時宜　面影

其人　また雛をいたはる年の美しく
　　かゝえし琴の膝や重たき

其人は前句の貴賤老少より衣食貧富の品を見わけてすへて有心の附方と知るへし

其場　大かたは持たる金につかはるゝ
　　庵より見ゆる町の白壁

其場は前句の都鄙山海より家内と家外の運ひを見わけて多くは會釋の附方と知るへし

時分　機嫌能かひこは庭に起かゝり
　　小悲の頃の空しつかなり

時分には晝夜朝暮の事をいふ也

時節　くれ竹に置直したる涼み臺
　　蓮の卷葉も解かゝる頃

時節とは春夏秋冬より式日祭祀等をいふ此時節と前の時分との二體は多用にして或は有心の附方もあるへく或は會釋の附方もあるへし

天相　長持に小揚の仲間そは〳〵と
　　くはらりと空のはるゝ春寒

天相とは日月星より風雨寒暖は更にして陰晴の輕き詞をもて多くは遁句の用と知るへし

觀相　此あたりすへて桔梗か原とかや

　　臉ふさきて陀羅尼一卷

觀相とは月といひ花といひ或は世上の哀樂を觀するをいふ觀相の句は一座を鎮むる附方なれは多くすへからす

面影　臉に星のこぼれかゝれる
　　引立て無理に舞するたをやかさ

面影とは源氏狹衣より或は軍書物語の品〳〵或は能といひ狂言といひ古代のさまに似よりしを當句に寫すをいふ

時宜　此一法は一座一興の扱ひなれは證句を出さす時宜の一體は其世に其時の風俗も其座に其日の挨拶も俳諧は平話の優游なれは一坐一興の附合もあるべし

以上幻住庵俳諧集

附合八體の轉句

一字流行　かけ合の窓に日和を定めかね
　　半分燒てやすむ田樂

いのころは羽織の裾にされかゝり
　　やふの異名を捨る一貼

意轉ノ附　切ゝ賣の捧はいろ〳〵吹そらし
　　名こその瀧といふはとこやら

二曲の附　何となく聲のとうりし歌かるた
　　無事てそたつか祖父もめてたい

小町か秋はよこれてんけり

植込の中に瓦を取ちらし

拍子木聞てたはこはしめる

尻に手を組む　天下　百姓

右轉句三段の付は前句の姿を見定め他の思ひよらさる所を付行く事第一なり彼宗鑑か姿を見よやかきつはたと云脇にのまんとすれと夏の澤水といへることきは口先の俳諧とて當元祿の新式にはなはたいむ事也七名は八體のつかひ方にして轉句は八體の轉句なれは自然にそらためのの句作あるとも下心には體廓にあたる所をわきまへ句作すへき事也第三聲枯す山郭公飛くれて是は難なし今時の付合多くは此第三の風情を以て轉句といふ也小町と天下百姓も地曲風曲の俳諧には常並の附合にて地の俳諧には轉句と意得へきものなり有や無やの闕

附合十躰の事

京極黃門は和歌三十體を撰む、宗養法師は連歌三十體を出す、季吟法印は俳諧三十體を出す、十體は初心の知り安からん爲に出せり

幽玄體　是は珍らしき一ふしをいひかけて作意を働かする中に無量の味ひこもるをいふ

春なれや旅なれやと社山越し

發句　霞をくゝる乘掛けの馬

發句　淋しさや問んとすれは蟹蛾の月

長高體　是はすら〳〵と何の曲節もなくいひ出して大樣にのひらかなる也

軒端の風かつけし春かせ

伸上り覗く垣越花有て

發句　山の景や一兒さくらにほの海

正風體　是は詞正しく心すなはち也いはゝ成德の君子にわふか如し

さて〳〵景の能所かな

沖鮑おもはすかつをかきへらし

發句　時鳥今一聲なけはとゝきす

有心體　是は心ふかく一手かゝりある句なり先は戀に能き體也と云り

はとくは嬉し髪よ心よ

合點した顏て手に取る封し文

發句　孕句をいつ悅んはとゝきす

物哀れ體　眞情を專にする也

おくれの髪をかき撫てやる

我死なは後のかゝさまいとしけれ

發句　万事は皆彼岸さくらの一さかり

花麗體　是は一ふしいひかなへて珍らしき景色を添たる也赤玉を白羅に包たるか如しといへり

ぬれにそぬれし湯女か戀瘦

世にはまたかゝる若衆も有馬山

發句　雁金は秋風樂の柱かな

見過體　是は本心を見たるまゝに作出すなり

浦の笘屋に氣ふり立なり

見渡せは花も紅葉も糀室

發句

村雨の露もまた干ぬまきざつは

撫民體　是は民をわはれみ世をいたはる心姿なり

夜寒しらする雁金の聲

發句

霜まよふ時や麥田のしつけ時

强力體　是は鬼神大勇者をも只一とつかみと思ふ體なり

見上けて見れはおそろしき顔

まち〳〵と夕陽を吠らむ鬼瓦

發句

摺小木も紅葉しにけり南蠻椒

興体　是は何の事もなきことを一ふし有る樣にいひ立たるなり

浪波を燒き夕陽日を燒く

不二晴れ南に一筋雲見えて

發句

やゝわんやも心して聞時鳥

附合十五躰の事附方十五法のこと

理附　違附　離附　其人　其場　時分　時候　景色　向

附　迎附　心附　響　寂　撓　句

理附附合四道の逆

甲斐の根かたは雪の橋木

鐵炮の玉ほりに行夏こゝろ

傳曰甲斐の根かたは寒國なれは夏木立の頃も布子なとうち着ねたらんと理を以て附たる也

違附全上。

須磨も明石も軍最中

松風にひとり念佛の聲澄て

傳曰前句は源平兩家の戰なるを隱者の山居なとして亂世をさけたるさま是違附也

離附四道の放

旅はうきものとは兼て知なから

はら〳〵はらと雨の來るなり

傳曰前句は旅中のものうき樣なるを只雨にて其姿をわしらひはなるゝ也一卷のむつかしき所にて用るの附かた也天相とも云

其人四道の隨

鷄頭見てはまた剿かく

奉公の苦しき顔に墨ぬりて

傳曰前句は鷄頭なとの日受にさし向ひてねねふりたる人なれは未た小者なとの夜手習に寢たらぬさまと其人を定むる付方也

其場

繩手を下りて靑麥の出來

との家も東のかたに窓を明け

傳曰前句は麥の出來宜きさまなれは其村は皆東窓に

萬日請よき所と其場を定る也

八九間空に雨降る柳かな

春の鳥の鬪はる聲

是其場の字眼を定めたる也

時分 四道の放

くる〳〵と五郎に繩をかけまくも

夜はしら〳〵と明六の鐘

傳曰前句は曾我兄弟が夜討のさまなるを五郎に繩をかけたる頃は夜もしら〳〵と明はなるへしと時分を定る也是も六ヶ敷附句のつゝきたる時走る附かたと知るへし

梅か香にのつと日の出る山路哉

ところ〳〵に雉子の啼たつ

是發句に場も時分も出たる故にたゝ時節をあはせたる脇也

苅株や水田のうへの秋の雲

暮かゝる日に代かゆる雁

是發句に場の出たる故に時分を字眼に定めたる也

時候 四道の逆

息災に祖父の白髮のめてたさよ

堪忍ならぬ七夕の照

傳曰前句に老の息災を只云たてたるさまなるを殘暑に人のなやめる頃を付て前句を繫く是時候也

景色 四道の放

又も大事の鮓をとり出す

堤より田の青やきていさきよき

傳曰前句は大事の鮓なと取出して客もてなす體なれは堤より田の青やきて酒のむけしきにて前句を繫く也

向附 四道の轉

きのふの文をまた明て見る

城中に相鬪の狼煙とつとわけ

傳曰前句は戀なとの文なるを爰には城中の相鬪の文なと見出して前句の人より差向ひたる方を付る是深祕の附方也

つかひのものを待せ置てや

異見いふ時は言葉もわらためて

是を向附といふは使に指向て前句より趣向を求出す肌合睦敷する體なり自他は各ありと離も五句三句の渡り親しき時はかくの如くする事もあり引句の外に悉くいはゝ大名といふ句に老僧の附合するをも向附といふつきは其まて編む時の事なり 幻住庵

迎附 四道の廻

江戸の左右むかひの亭主登られて

こちにもいれと石臼をかす

傳曰前句は日比睦しきさまなれは借りに來る人の其家の女房なとのさしむかひたる附かた也向附とは遠

近の違ひと知るへし

心附仝上

妹をよいところからもらはるゝ

僧都の許へ先文をやる

傳曰前句は婚姻の取組あるさまなれは伯父なとの許へ知らせやりたるへしと心にて附る也

時鳥またぬ心の折もあり

雨の若葉にたてる戸の口

是心の附也またぬ心の折も有とは常に待と云句也故に雨の戸口に立ると對せし也句意に任せて知可寂栗

響四道の轉

麥畑の替地にわたる傍示杭

賣人も知らぬ頼政の筆

傳曰前句は麥畑の寺地か屋敷かの替地に渡るさまなれは田家なとに持傳ふ古筆を頼政の筆とも知らす拂ふたる情と知るへし

寂一本四道の隨寂付

町内の秋もふけ行明屋敷

何を見るにも露はかりなり

傳曰前句の明屋敷を見れは露はかり也と只寂にて附る是らも華やかなる句の續たるをしつむる附方と知へし

撓たはみ四道の轉

星さへみえす二十八日

ひたるきはことに軍の大事也

傳曰前句は只暗夜の姿を附句より夜討と定め一句を撓む尤名人の場也初心の及ましき事也

句

にほひは一卷の匂ひにして百句は百句に渡るもの也是に依て句なし深く味ひ知るへし

匂ひの花といふことは千句と夢想にいふ事にて常の會に申さゝること未練の次第にて候意趣は千句滿坐に香を炷き候故匂ひの花と申候夢想同意なり以上雪中庵蕉蕉の卷俳諧寂栗幼住庵集

附合十六樣の事

假摺付　孤附　送り附　違ひ附　當り附　蒙り附　懸り附　親附　疎附　景氣附　名所附　問附　聞附　心附　并附　括り附

假摺附といふは前句の少の縁を取て詞をかさり面白く附ること也

笠かたむけて出る道野へ

雲雀たつ方にかすみの森見へし

此心笠かたむけて出るは道を尋る體の心なれは附句に雲雀の立かたに霞て少し森見へしは我尋ねる所の道筋にてはなきにと疑たる心なるへし

孤付と云は前句の據ある趣向を一とつ儲て置て夫にまた

附るをいふなり

立ならひけり里の門まつ

追犬の聲ひきうなる辻諷

是は里の子供か春の始なれは群居て駒とりなとして遊ふと假に趣向を儲設て夫に辻諷ひなと謠ふ浪人なとか來てそこら立まはるを彼の子供か犬抔けしかくる躰を付たるなり

送付といふは前々の句より移り來る所を送る也然れとも段々に同し心にて附れは三句目に引きはる也然は心を一つにすれは物をかへ物を一つにすれは心をかゆる者なり

花飛てこゝろうき立波の音

足を空にてしやくる飛凧

野送りは泪かと手に取る松明

右は物をかへたるなり

宮もわらやも同し夜喝し

春とへは嵯峨や吉野や女市

屏風障子もはなの繪坐敷口傳

是は心を付け送りたるなりまた

さねこんといひて別れし昨日今日

時に取てはあわぬ辻うら

祭待つ里のうなひは雨に泣

是は詞共に附かへたる也能々可心得

違ひ附といふは段々句の運ひわしく成來りたる時附違る

也去なから是に取ても三樣有るへし心を違へ物を違へ、詞を違る也

一重頭巾も夏は苦になる

織立て寒氣をふさく破れ障子

是は物を違へたるなり

夫婦の者は背戸へ隱居所

先住は奉加に殘る金ためて

是は心をちかへたる也

しつほりとしたる雨夜の御茶の會

仕方咄しに書く繪そらこと

是は詞を違へたるなり此外にもいかほとも有へく心を付て考ふへきことか何事も以心傳心なりよく〳〵心付き可きなり

當り附といふは前句の專一たる詞當にする也是に心得品々有へし作意のへる所也能々可心得者也

網引あとに殘る小いわし

浦の子か目籠拾ふ海松のみか

是は見るのみか小鰯をも拾ふ當りたるもの也

蒙り附といふは前句の下の言葉の當りて附句の頭にかふしする也手に葉と云に似たる物にて少し違ふ也夫は詞をつゝく是は一物ある物を用るなり證句にて知るへし

泪なからも出る道野邊

石地藏立かた闇き木かくれに

是は道野邊の石地藏とかふせたる也

懸り附といふは前句の頭へ附句の終りをかふせ付る也きせ手にはといふに同し心にて少し相違あり心得は前々のかふり附と同しもの也

乘る人も曲馬はかり心せよ

瀨にしたかひて引のぼる船

是船乘る人もとかけたるなり

親附といふは前句に同し詞にてしたしく附來る也されは脇なとのことくしたつる也あまり好たる事にはなけれとも前句よりの移りに寄るさま〳〵に附來るなり

郡て世渡る新田の市

舟宿の名代に坐敷威を持て

關のわら屋に歸る乞食

小町とて老母名を賣る昔今

是は慶長元和の頃都に今小町とて歌讀の乞食姥有る故事也

疎附といふは前句になき事をいひ出て趣きはかり取て心詞ともに用さるなり是には面白き句其ある也

月今霤瀨々の細代に照添て

雪ふらぬ夜は冬も朧夜

四季折々は夢ようつゝよ

昨日けふ燕か歸る雁か來る

此外いか程も有へきなり

景氣附といふは前句により處なく唯時の風景なと四時の移り替る飛花落葉の折々只眼の及ふ所を附け過る也

關よ霞の名のみ殘りて

行並へ半は雲を渡る雁

是は見たる躰の如し

名所附といふは所の名なとにかつて取寄せのなき所なとを取合附るなり

富士にて武藏野、嵯峨に鎌倉なとを付るを變對と云其名所の近所を附るを常對といふ變對に二樣あり古歌對、故事對なり私に曰武藏野に富士を附るは名所の國を隔てたりといへとも古歌に讀たる也又名所に讀たるものあり或は富士に時鳥花雪煙又武藏野に草隱れ茂み月抔樣のごと也是はみな〳〵名歌等の名所集に讀來れりむかしより名高き名所には古人の歌か名句かなと無き事は何の書に有とても付來らさる事也近代の名所の名物等を用附る事は沙汰の外なれは此類にはあらさる也さりなから能く心を付て申へく事なりよしまた作意にてくらへ付たる事もあり所謂嵯峨に鎌倉を付る事は何れも隱者の名所なれは似たるを見立て付たる也是また一體也心得へき事也古事も右同し事也何れの證句引に及さる事也

問付といふは前句の心を問ひ伺ふやうに付る也

人にしらるゝ身ともならはや
いかにして我一藝を極むへき
是は人に知らるゝ身になりたやと願ふ心は何とそ一藝を極めてこそと前句の心に問答したる成るへし

聞付といふは前句の心如何と能々聞定て付へき事也せまり付ともの事

形見に切れとせまき袖下
すねからも取か紙子の火打石
是は前句のせまき袖とあるからはふくさには成るまし大方は紙衣の火打の外にはならしと治定して附たる也去とも直に紙衣の火打とすれは袖にあたりてしたしき故に句をかくの如くかさりたるものなり

心附といふは前句の心を能々取立て句面にかゝはらす付逃けて能心に相應したる樣に見ゆるさまに付る也是には上手の入る所也樣體にて色々あるへし

鳥啼まて留られにけり
打殘す圍碁の一手の切盡し
半分月を隱す松はら
八景を皆はかゝれぬ扇子の繪
此外さま〳〵あるへし專ら當流の意味を用へき也

并附といふは其物をならへ付る也とかや親付といふに似たる姿もあるへし但廣狹のたかひ有旨也私に曰是は廣し彼は狹きのみなり是も物を并へ景をならへ事を并へ其外色々品あるへし

括り付と云は前句に數多き事を皆〳〵一所にくゝり集て附るなりたとへは

松梅さくら同し鉢の木
歌一首けふの坐敷に出來兼し

是は三種の三つを歌にてくゝり付たる也皆々如此也芭蕉曰此外肌へあるへきとも見へす候古風に立入りの諷取りの四つ手組の堀付の拾ひ付のとて有しかと是は皆々嫌ひ來りしなり此外に古事仕樣は何の古事も慥に聞ゆる樣に仕へき也紛らはしくてあれこれへ通ふやうなるをは嫌ひ來りしもの也專ら當流の附味を守るへしとしかいふのみ芭蕉後集

附合體用の事

躰用の事良德去嫌の歌に水邊や又山類の體用連歌の如く然るへき也とあり又御傘には左の字の所に躰用は俳諧には水邊山類共に以て體用の沙汰有へからすと有て一雪も是に同心せられたると見えて雨上りに體用の沙汰有へからすとあり其外立聞はなひ集に體用を分ち出し元隣空頼維舟良德色々抄物多くありといへとも或は躰用を分ち或

は躰用なしと沙汰せられたり貞德の詞にさへ二色にいひ澄かれしかはまして後人のまよふへき處也此事の分ちいはましく思ふ事もあれと畢竟當俳に其沙汰なきうへは不申及と云々

體用の事古今抄に中古は連俳の發句も附句も趣向と句作との差別なけれは敎ゆる人も其埒あきらかならす學ふ者も其詞にまとふ此故に我門には趣向を定るに執中の法ありて趣向を先にして其躰を定め打越より二三句の變をあわせ句作を後にして其用を窺ひ前句の姿情をとゝなへむとす是より發句と附句とにさしひかふ初念の掟也以上寄垣集

躰用の事雪中庵雪の技折に曰たとはゝ川は體橋は用船も用也附句に至此心得思ふへし用に體、躰に用とは續くへし

體用體とは惡しゝ推て知るへし

躰用の事古今抄に雜物體用の扱とは家に垣とも川に橋とも此類は二句にゆるすへし云々

躰用　山類水邊居所に各躰と用とあり躰はしかと山類水邊居所の動かぬ物なり用は躰の上にて少動くものなり又其上にはたらくものを躰用の外といふなり躰用三句續く時互に打越しを嫌ふ躰の外なる物は打越しに苦しからす委連歌の抄物に見えたり俳諧には此差別曩祖の沙汰なし給はぬはありてなし猶師說あり

躰付用付　是は又右の躰用とはかはりて何にてもあれ前句の躰なる物を付るをよしとす前句の用なる物を付るは用付とて嫌ふ事なり俳諧名目抄

附合虛實の事

俳諧は虛の實實の虛也といへり風雅の虛とは無念無想の空虛也其中より一物を生す則ち實也其の生物の形を顯して發句と成る句と成て又虛也又實也

源氏物語にて譬へは此物語は面影を書て皆作り事也五條あたり夕顏の宿今鍛冶町松原上る處升屋與三兵衞と云もの丶屋敷に夕顏墓あり水を水向て頻ゝをかくれは病も退くと云ふ物語も夕顏も墓も虛也驗あるは實也虛の實は加樣なるに有之

人をあさむく嘘とはかはり無念無想の中より自然と顯れ出るもの風雅の虛にて只曲を好み作を隱くして落し穴に入る樣なる作者こそ嘘つきとは云へし

俳諧の虛といふはうそには虛實化合して二つはなく言語にのへかたき處なり

虛實の事　俳諧は餘の歌と替りて談笑の姿を顯はし裏に清閑の心を含める句法なり玄旨法印云俳句は上段の虛をいふ如く綴ると也貞德の說も同は是金言として虛は虛也虛を實に綴るを是とし實を虛に作るを非とす是れ宗因の說なり實を實にいひ虛を虛に顯はすは俳諧の道にあらすと也師說錄

附合虛實の事

袴ゆふなる御所の童　形
射もころし切もとゝめよ襲ひもの
誰も疝氣は背中から腰

前句は御所に物の化と實の附方也三句目病氣と見直して惜めるさま虚にして一轉乘也是等に限るへからす虚を實にてしつめ實は虚にはとく所百員百篇に忘るへからす虚實は俳諧の兩翼にして是を辨へさる作者は一卷のつまり終に理外の妙處をしらす雪の楽

句作の仕立やふに虚實のわんはいをさとし申さるゝとて

女房叱つて酒買にやる

是は實にして實にあらすさるは今日の自然ならさる故なりさはとて是も平生に有事なから俳諧の平生にあらすしかも今日のおかしみなく實に落たる也是則實にして虚也人情の常にも自然の平話ならさる也

女房たらして酒買にやる

かくすれは今日の平生にも人和ありてしかもおかしみあり是虚にして實也例におかしく例にさひしきも平生に虚實のわつかいも是らのわさにて修行すへきことなり又

賣物のわたりさはりも物馴て
お主の恩の親も中〳〵

是は實に落たるやうに聞ゆる句なれとも是は二句の間に其子の主の恩にて人となりよき手代ふりになつたるさまを親の見て此恩の厚さは中々親も及はぬとそこに二句をさはさて物すきに二句の姿を見せたり一句の趣向は實に重けれとも句作りにて虚をさはさて輕く成たる也趣向と句作りとのわんはいも工夫すへき事也十二夜話

附合自他の事

聯句は自他の分ち肝要也將た三句の轉しを思ふへし左にかゝくる如く此外に附方なしといふは自他の分ちにして人情にて附かたなしといふ事也人情打つゝきたるときは其場、其場のわしらひ時節、時分、天相此五つをいつれなりとも附へし

人情なき句三句つゝくはわしゝ、人情の句を人情なき句にてはさむはわしといふも三句の轉せさるゆへなり、人情ある句二句つゝきたらんには、のはし句いくたひ出しても苦しからす、すへていふときは、のはし句なからのはし句と唱ふるはわしゝ其場〳〵のわしらひ時節、時分、天相と唱ふへし　俳諧寂楽

いかに能く附たりとも同體の句三句續ては以外わろきこと也　寄垣集

古き口傳にも油斷なく心を轉すへき事と侍り句毎に心をあらため行やうにすへき也仝上

硯にむかひすたれ捲つゝ　自
梨の花咲そろいたる夕小雨　時節
雉子におとろく女ひと群　他

此外附かたなし

むかい火に尼か涙やかゝるらむ　他

松風落て水の行す衛　其場

さつはりと醉のさめたる明屋敷　自

此外附方なし

並木の露のはら〳〵と落　時節

巡禮の子を抱たる朝の月　他

餘所目もさらに鍛冶か勢ひ　他の向附

いかにくるしき赤かれの髪　他の巡禮のあしらひ

ものゝ哀も盆の名殘よ　自にて他の句へむかひし也

此みつの外附かたなし

落瓦あらしは松にしつまりて　其場

皆わすれたる明かたの夢　自

看病の粥ふきさます小くらかり　他自より出したる也

着ものゝ手さかりもはや秋ちかみ　自自の句に自の句を附たるは其人の自の句より

此二つの外附方なし

ひとつすゝ手本もらひて粽ゆひ　他

しかる局に笑ふつぼねに　他の向附

跡や先裾にむしろの下向みち　他の局のなしらひ

染衣を思ひのまゝに賣つけし　自他の局へ向ひたる也

此二つの外附方なし

藥になつむ彌生つれなき　自

人事もいはて日中の御垣守　他自より出したる也

こほれ松葉を手ささくりぬる　他御垣守のあしらい

ほろ〳〵おちる屋根葺のちり　他向ひ附

此二つの外附方なし

あたらしき草鞋に旅のあらたまり　自

いのちなりけり洛外の春　自

見よかしに櫻かもとの女房達　他自より出したる也

此外附方なし

卷わらに弟もむかふ手束弓　他

浮世の中もたのむしき哉　自他へむかへたる也

西國をうては都も旅なれや　自

此外附方なし

杭四五本を門の馬つなき　其場

かけろふもえてかはる川筋

赤くすゝきし行燈のさや　其場のあしらい

爪へにうつる双六の石

日はうす〳〵と入相の鐘　時分

温泉の香に曇る朝日さひしき

雨の跡門田の稻葉穗に出て　時節

時鳥聲〳〵啼て通りけり

雲はこふ空は間近く風落て　天相

青天に有明月の朝ぼらけ

いつれも人情なき句なり、其場とは野山海川等を云、其場のあしらひとは硯、机、戸、障子すへて其場にあるへ

きものを云なり、時節とは四時の季をもつものを云、時分とは晝夜且暮のことを云、天相とは日月風雨陰晴の事を云、

又人事にて自とも他とも分かたざる句あり附句にて自とも他とも定むるなりたとへは

朝またき狩弓狩矢持そへて
うしろ姿もはたちうち外

かく附るときは前句も他の句になる也

つめたかりけるかち渡り川

かく附るときは前句も自の句になる也是附かたを以て前句の自他を定むる法なり

芭蕉曰聯句のこと前念へもとるへからすと則ち三句の轉し也

古人曰聯句のこと前句を動かすへしと是また三句の轉し也

烏酔曰聯句は有用にして無用無用にして有用の附方を思ふへしと是尤も三句の轉し也　全巻

文かくはとの力さへなき
うすものに日をいとはるゝ御かたち

熊野見たきと泣給ひけり

文書く程の力さへなきといふを及はぬ戀病を見て其戀せらるゝ人は羅に日をいとふ富貴の人と附たり三句目の作者其前句を動さす花山院の俤なとゝ見て熊野見たきと泣玉ひけりと其人を定むされは打越は自にして二句の附合は他の噂也人情の論能分るゝ此多少自他を辨へさる作者は三句目に至て人情の續を恐れ或は景情或は時分時節等に迯て終に附合佳境に入る事なし是蕉門附合の深秘也深く蕉門の部集を熟覧すへし　續の巻

附合古新の事

支考曰附句は句に新古なし附る場に新古あり云々蓼太云森羅萬象いかて古からんいかて新からん江戸筏集に

辨當と先へ來て居る按摩取
靜こゝろなく花のちるらん

古有言云情は以ㇾ新爲ㇾ先詞は以ㇾ舊可ㇾ用云々寂栗

定家卿曰詞は三代集に出へからす俳諧も亦意を新らしくするを專用となす詞は新たに作り出せるを嫌ふ或曰俳諧には俗談平話をつかうとも何そ苦しかるへき答曰俗談平話とは歌連歌につかはれさる詞をもつかふを云也且一句の句作にもよるを、さむしろとも、疊とも、薬こさともいふ是を俗談平話とはいふ歌連歌につかはれさる、疊、寢こさをつかふといふ事也俗中の俗言鄙言の事には非らす又新詞のことにもあらす去來抄に

蓑錢も用意顔なり花の森　去來

芭蕉曰花の森とは聞なれす名所なるや古人も森の花とこそ申侍れ詞を細工してかゝる拙なき事いふへからすと教へられたり

附合四道の事

一に轉　二に隨　三に放　四に逆

轉は前句の人情其場其時の一轉也放の付句に差別あるへし

燗鍋の藥ふる夜の辛頭とも
伽羅あらそひの風薫るなり
かゝる世をつく〳〵彌陀の爪はちき

前二句は戀句の應答なるを燒香の伽羅抔と一轉してかゝる名聞の世を彌陀の爪はちきと彈指を句作したり寺院の結搆伽羅炷人のさまて餘情に及ひはかるへし

隨は前句の姿情を動かさす隨ひ成すへし

繪姿の瘟斗は似たれとも
きぬ〳〵なしの膝に三絃
煤竹の女房こひ茶のおもひもの

前句は繪姿の瘟を咎てあやしき人の遊所の居續けなとゝ附たるをきぬ〳〵なしと云る詞に隨て女房のおもひものと應答ひたり

放は前句に對して風雨寒暖陰晴四時の働きと知るへし

先財布出して飛脚の汗を拭
拾ふた跡は我いのちなり
告わたる聲ほの〳〵と鳴鳥

前句は金飛脚の一大事と附たるを爰には拾ふた命を難風に逢ふたる舟なとゝし見直して只鳴鴉のあしらひ奇也

逆は前句の姿情を見直し多くはこなしの用と知るへし

凌霄の盛に空も曇らせす
世を川越しの浮つ沈つ
後ろから冥加な甲着せ申し

前句は凌霄の夏けしき大井川阿部川の淵瀬と附たるを爰には世を川越しのと云る言葉を咎て落人なと打渡したるさまと附たり只川越しの上にて行へきを一ひねりたる所二三の折の附方にしてこと〳〵は好ましき句也

以上俳諧小鏡

一字の變といふ事

抑々一字の變といふは我家の發明にして言下に趣向の違ひ有ると知るへし惣して指合と去嫌ひ跡々の付句を直すへからす言葉似かよひたる多からん姿は一字の變によりて雲泥の違ひ有りと知るへし芭蕉後集

四道の畧說

連歌に四道と云事あり俳諧にも猶此心得有るへしとて或人の書る物に

發句景氣あらは第三はいひたてたるへし

發句いひたてたる句ならは第三ひとへに景色はかりの句なるへし

四句目脇の句を吟して輪廻なき樣にすへしいかに能付たりとも同躰の句三句つゝきては以ての外わろきことなり

古き口傳の中にも油斷なく心を轉すへき事と侍り句毎に心をあらため行やうにすへき也

此外に下の句に口傳あり句を作るに七々のかなのつつきやう也二五、三四、五二、四三といふ事あり又しるし「しるき「みゆ「みる「きこゆ加樣の事人々あしく心得て皆仕違ゆる物也口傳　加樣に物毎に其かんを見出し分別して句を作るへしたとへ四道を知りたりとも加樣の事を習はさらん人は似たる事に似て似さる事は誠に似さるへし禪に云やすし〳〵かたし〳〵とかや申も心にそ解行かさらん程は道に入事ゆめ〳〵有へからさる也云々

附合三義とは　一にてには、二に句作、三に寄合、てには前句に對しての栞也打越へかえらぬやうに一句の働きあるへし

句作　前句に對して新古虛實を能く考へ可き事也

寄合　前句に對して趣向を定る事

　　駕につゝけは餘寒忘るゝ
　　一背負御守殿風のうしろ帶

是駕に供女の寄合也されと誰を案すへき古みなれは爰に趣向を立て女の駕訴訟と見出したるを新しみと云

　　駕につゝけは餘寒忘るゝ
　　願書もつて女の褄端折

されとかくの如きは句作なし是に手爾葉の技折をつけて

　　駕につゝけは餘寒忘るゝ
　　何ケ度も男まさりの願書

斯の如く男まさりと云處に走り添たる女の風情あり〳〵と見ゆ凡て附合は寄せ合の內に趣向の新古を見定て句作すへし是を執中の法といふ雪の枝折

附合三段の事

芭蕉の俳諧は連歌の後心の場より附合を定められたり

連歌の附合に初心中心後心と三段に分ちたる傳書なり

初心は二所を附る

　　霞こめたる木々のむら立
　　見ぬ花の匂ひにむかふ山越て

中心は兩方へ道ひて中を行

　　薄くやならん袖のうつり香
　　咲く花に染るよ法の心さし

後心は凡俗を放れたる付にて初心の人は見もすましきことなりとそ耳底記

附合に段をとる或るは段をかゆるといふ翁の敎へあれと當時の是を知る人なし故に一卷眠るか如し翁曰三十六句も百句も一卷皆文章也と故に其段とは則ち文章にいふ段落の事也一卷皆文章なるか故に段落有へき理そかし段落とは今日噺の上にもありて發句の上にていふ時は則ち切れ也此切れなき時は始末分明ならすして聞へかたし是一卷をはかるの第一義とはいふなり師說錄

附味の大事　附句を付るとは云はす乗といふ第一打越をせぬ事なり打越とは我付へき一句置て前の句をいふ「躰付「用付は古へ今に變らす只三句目よく轉する事也

五つか鳴れはかへる女房
此際も利上げはかりに言延し
まんまと今朝は鞆を乗出す

又

おとろへて土器ふるふ身の弱り
御念ころにて鎌倉を立
門々に翌の飾をくけり置き
いつにても此はなれ三句目を思ふへし
我あとからも鉦皷打來る
山伏の切てかけたる關の前
鎧もたねはならぬ世の中
付合は皆上戸にて飲あつし
さらり〳〵と霰ふるなり

是に皮肉骨流しなとゝいふ事備れりよく〳〵師につき習を受くへし俳諧蘊集

附味の事

附味は景氣、推量、俤此三つに極る色々の事有といへとも兎角此三つを能く工夫すへし千姿万體此中より出て天地かけ廻る事也又此三つをかくの如く並へて附るには非らす景氣に景色、推量に俤とも付るに二句つゝは苦しからす芭蕉翁傳

景色　乗かけも提灯しめす朝あらし
　　汐さしかゝるはし川の端
推量　衛士のかゝり火立る黄昏
　　采女招す玉の御簾のうち崩れ
俤　草庵にしはらく居ては打破れ
　　いのち嬉しき撰集のさた

下の句作の事

下の句に二五　三四　五二　四三と云こと事あり

同し作意をとさまかうさまに思ひ巡らして其内にとなへんに耳にも立たす聞よき樣に仕立ること也凡て三四を能きに定め四三を悪きに定めたり二五と五二とは其句によるへき也梅の鎖

下の句に二五、三四、五二、四三といふ事いかにも覺ねはならぬ事也師說錄

附合下の句を作るに七々のかなのつゝけやう也二五、三四、五二、四三といふ事なり寄垣集

二五三四とは

まさにしくれをさくさくらかな
待たる君に來たるあかつき

五二四三とは

橋　翻　りほとゝきすなく

峰の旅人の行衛もしらす

二五五二別條なし三四心よく四三よろしからす好さる也千句などには場に任すへし師說錄

附合疊字疊語の事

疊字疊語の格は昔より和漢に詩歌の常なれと附合に此格を用ゆるは凡俳諧を始とやいはむ爰にそれらの濫觴を尋ぬれは

前句　韮の柵木に蔦をなかめて
花の坐　蔦の居る花の賤屋とよめりけり

是は故翁の附合にて其頃武陵に名高き句也さて其時の口評に此附は前句のいひとりを歌の前書と聞なしたるよりかくは詠めりと附たる也此類は前句の情を起してこなたより意を添ふたれは起情の法ともいへるなり然は此いふ附合に疊字の沙汰はなけれとも今や此附を格別となせは百世に疊字の證文といはむ思ふに此附の詮用は前句の沙汰としるへき也但高句に伊吹山といはむに山郭公と疊みたらむは漢士に詩門の例なれは今の新製とはいひかたし或るとし加賀の小松にある人の附合に

婆々なれと婆々といふをは腹立て
名はいろ〳〵に御所の御道具

此附合は名殘の曲なりしか名はいろ〳〵といふ詞の前句に對して聞へすといふに其作者の附るは婆ともなけれはならぬといふを名はいろ〳〵といひかくせるよしさるは前句の噂といひて今の俳諧の第一にいむ事なれは爰には疊語の格を用て

婆々なれと婆々といふをは腹立て
婆々といへとも御所の御道具

かくは口評申せしかこれらを疊語の格とやいはむされは此頃の俳集に此格はやゝありなから或は低句より高句に疊みたるあり附合は前後に附る物なから高句より低句に疊むへし語路の拍子に違ひあれはなりされとも蔦の句のことさは前句を前書と見たる時は高低の論には及はさらん此格は本式に見合すへし古今抄

疊字の事

韮の柵に蔦をなかめて
蔦の居る花の賤家と讀りけり

此附句は菜園集に蔦の居る花の賤家の朝もよひ木をわる斧の音に聞る（一本に音を聞ふるともあり）此古歌を取て前句を歌の詞書と見なしたれは附句体用を分つ

琵琶に拍子を付てさゝなみ
さゝなみや雪の花ちる星月夜

前句は琵琶のさゝなみ附句は志賀のさゝなみ也餘は推て知るへし詩にも

去年荆南梅似雪
今年蓟北雪似梅

是らを疊句の格といふへし雪中庵小鏡

懐紙式の事

萬句　千句　十百韻

支考曰連俳の一卷といふは百韻を數の限にして十卷を重ぬれは千句といひ百卷を重ぬれは萬句といふ十百韻と千句の差別は一座と十坐の違ひにて去嫌の用捨ある故也

百韻

表八句七句目月　裏十四句九句目月十三句目花

二の表十四句十三句目月　二の裏九句目月十三句目花

三の折二の表裏に同し　名殘の表三の表に同じ

名殘の裏七句目花

支考曰四のひゝきをいみて名殘の折といへり

百韻式

發句天　脇地　第三人　次の五句五行五常也

百八句衆生八苦　十四句不動十四根本　二之表裏二十八宿　三之表裏千手廿八部　四之折十六句十六菩薩　六句當六根

右四折分配四天王也又比春夏秋冬

すへてさし合等くる時一坐何句とあるは百韻をさしていふ也

一硯　墨　紙　水　四方神　一筆　中央大日

古の百韻は表十句名殘の裏六句也今時の表八句名殘の裏八句も首尾合せて十六句也日本は東方にて陽國也依て陰數を用ふ陰數也婦人始て經行陽數にて二七十四也男子始て陰調ふ事則陰數にて二八、十六歳也是は句を用考陰の數百句に滿と知るへし、

古い百員は四花八月也是陰は陽に負るものなれは折毎に出して花四本の陽に合躰也されは名殘の裏の月花と立ち合してむつかしけれは宗長法師勅許を蒙りて四花七月に定られたる也以上筆つむし

米字

表は句七句目月　裏十二句七句目月十一句目花

二の表十一句目月　二の裏十二句初裏に同し

三の表二の表に同し　三の裏十二句七句目月十一句目花

各殘の表十二句十一句目月　同裏八句七句目花

七十二候

支考曰七十二候とは百韻を三折にはふきて三の折に裏を八句とす然れは三花五月にして其名は七十二候をかたとれり

七十二候は四季の七十二候より割たるもの也百韻の三の折をぬきたる也筆つむし

易

表八句七句目月　裏十二句七句目月十一句目花

二の表十一句目月　二の裏七句目月十一句目花

名殘の表十一句目月　同裏八句七句目花

青藍曰易とは周易六十四卦の數をかたとれり

源氏

支考曰源氏とは三折也さるは歌仙の變數にして中頃の名目なるよし其名は源氏の六十帖によれり歌仙三十六句に二の折二十四句加へて六十句とす花月の定坐同し

源氏とは三折也さるは歌仙の變數にして中比の名目なるへし表六句に裏を十二句とし三の折の裏を例の六句とす其名は源氏の六十帖に比す古今抄

源氏は面六句裏十二句二面十二句二裏十二句名殘面十二句同裏六句合源氏六十帖比す筆つむし

五十韻

百韻の二の裏まてするを五十韻とす

世に五十韻と定法に覺へたる人あり非也これは百韻に滿たさる下略と知るへし花鳥句强て本式を用るに及はす一坐の時宜によるへし筆つむし

五十韻は古法にして百韻の半を減すしかるを百韻の折附には初ノウと云に始りて二ノヲ三ノヲ三ノウと次第して名ノヲ名ノッと終る也此故に二折三折の懷紙にも名ノヲ名ノウと書たるはわるし四折の外は法の省略なれは五十韻はまして七十二候三ノヲ三ノウと書捨へし

四十四（ヨソシ）は五十韻の變數にして二の折の裏を八句とせさるは其日其夜の時宜を見あはせ或はちゝめ或はのはして一坐の首尾を作るへき爲也其名は四十四（ヨソシ）をよゝしとは例のいふ俗習なから稱せは祝言のひらきともいはむ古今抄

四十四とは百員二三の折をぬきたるもの也筆つむし

四十四支考曰五十韻の變數にして二の折の裏を八句とせるは其日其夜の時宜を見合せ或は縮め或は延して一坐の首尾を作るへき爲めなり其名は四十四をよゝしとは例のいふ俗習なから稱せは祝言のひゝきともいはむ古今抄

歌仙

表六句五句目月　裏十二句七句目月十一句目花

名殘の表十二句十一句目月　全裏六句五句目花

支考曰歌仙は名目の風流也そは十八番の歌合よりその讀人を歌仙といへるに爰には上下の句を合せて三十六吟の名となせり

歌仙は三十六句は名歌三十六歌に比す筆つむし

歌仙は名目の風流なりさるは十八番の歌合よりその讀人を歌仙といへるに爰には上下の句をあはせて三十六吟の名となせり本より月花も二折の式なれと六句十二句とせはしけれは今式には二花二月の沙汰あり本式の遺訓に見合すへし古今抄

長歌行

表八句七句目月　裏十六句九句目月十五句目花

名殘の表十六句十五句目月　全裏八句七句目花

長歌行面八句裏十六句名殘面十六句同裏八句合せて四十八句也筆つむし

短歌行

表四句月なし　裏八句初句月七句目花

名殘の表八句七句目月　仝裏四句三句目花

合せて二十四句也

長短行も求韻の俳諧の爲にと例の支考か新製なりその辨は「東花式」及「和漢文操求韻」の序に同し

短歌行面四句裏八句名殘面八句同裏四句

右長歌短歌は詩より出たる名也東花坊製作すされと長歌は裏のひる也短歌は面せはしく月花の配り殊に苦しけれは用るに足らすさりなから旅行なとに歌仙滿さる時の急用と知るへし笹つむし

十八公

表十句九句目月　裏八句七句目花

十八公とは千歳不變の松を象りて數をとれり

首尾

表六句五句目月　裏六句五句目花

支考云首尾の吟は一坐の時宜也或は奉納の諸願を祝し或は歳暮歳且の賀には始終をとゝのふる意也さるは六々とも八々とも表と裏の首尾を合せて月花二坐は摸樣によるへし

首尾十六句は百韻の表と大裏と合せたるもの也十二句は歌仙の首尾也笹つむし

首尾の吟は一坐の時宜也或は奉納の諸願を祝し或は歳暮歳且の賀には始終をとゝのふる意也六々とも八々とも表と裏の首尾を合せて月花の二坐は卷の摸樣によるへし

古今抄

懐紙用捨の事

本式千句表の條下に古法表十句の例を守りて今式は表八句の後裏二句過るまて表の如く嫌ふものゝ類今に至るまて連歌にはせす俳諧にはゆるすへきか先師曰いはれなき事也連歌に鬼女龍虎等さし出たる類は表のうちに嫌ふ俳にも鬼女は成かたし其外人を殺す切る縛る等の類用捨すへし是等は百韻の中にも一句に過へからす或問戀の詞述懐の類祝言にいひ立たる句はいかゝ侍らん答曰句によるへし文字は苦しからす假令祝言にいひなすとも人の上にいよ〳〵述懐なる花は淋しきの類は苦しからす壁の崩れにさかる夕顔なとは全く貧家の體なれは慎むへし他人の句は咎るに及はす又問ふ戀無常其外表に嫌ふ故事本説を下心に持て白地に云顯さゝる他のものゝうへに假用たるなとの句は如何侍らん答曰大方は表に嫌ふへし事にもよるへきなから詞に出すして下心に嫌ふことを持たるは作者論すへからす又問古今の人名表に出す事いかゝ答曰今の人の名は慎むへし古人の名はことによりて苦からす若出す事あらは其人名あるやうに句作すへし縁例なれは常にする事にあらす又問懐紙に戀の句なくては叶はぬや是を

む由縁は如何答曰此事は至て大切の事也懐紙に戀の句を大切に目立る事は神祇陰陽和合して豐蘆原草創の其例也戀なくては叶かたきそや慎むへし一坐一句のもの連歌新式に四十はかりあり前條にいへる鬼女龍虎に一つなれとも俳諧にはいひかへて又有へき也たとへは虎屋虎之助の類なり生類の虎の心なけれはすへて本名異名なりとちらにても一ッ異體は數をさためす他は是に準す直旨傳

懐紙端作の事　翁壯年には俳諧之歌仙晩年には俳諧之連歌とあり意味あり晩年を可用

はしめの名は三十六人の歌仙の名より起るといへとも法式定りての後は只三十六句の連歌也師說錄

本式十句表の事

神祇　釋數　此二ッの內一方は發句にあり

月雪花、郭公、名所、寢覺、如此出す　戀は不入

五句目に極めて名所を出すへき法也

月は定坐九句目

芭蕉曰世に表十句は知る人多し裏の詮議無沙汰なり裏は古法二句也秘也此二句に戀を出すへし今首尾の吟とて表六句裏六句する事自然に古法の表裏の數にかなひたる事道の天然なり

千句といふは十百韻也別にかはりたる式なし尙古式の卷にしるす

芭蕉曰百韻といふ事百句となりとも百詠百吟なといふへきをいかに韻とはこそ知る人なし俳諧大事是也此員詩を次て割たる數にて雪月花の用所明かなり表八句裏十四句也裏十六句と數を定へきなり律詩絶句の姿の數也仍て表四句目まて起承轉合又五句目より起承轉合月の坐轉の場なり裏の月花の座算るに起る轉の所に極て當るこれにて韻の字濟なり以上師說錄

懐紙之法式　紙は杉原也水引にて閉る也水引有合せす白紙にてとつる時は表の方にちょつ〳〵と墨を付へし祝儀の習也追善にはいつにても白紙にて閉る也會紙の表とちめの端の所に年月日前書略としたゝめ表紙をのけすに表より直に書出す也百韻八句書にして裏より七句七句と書也名殘の裏に至り又片面に八句書て終る也都合紙數は右のはり合にて裏のとち目までに揚句書つめて仕舞ふ也十二夜話の七

句數去嫌の式

春秋　五句去

春と春、秋と秋同季五句去なり三句より五句もつゝく二句にては捨てす

夏冬　二句つゝきて三句又は五句去る二句、三句つゝきても苦しからす平句にては一句にても捨る

神祇　三句去

二句より多くせす平句にては一句にても捨る

釋教　三句去
二句より多くせす述懷無常引合ては三句もする
戀　三句去今五句去後人の私也
二句より五句まてつゝく二句一本一句にては捨てす
無常　三句去
無常と釋教も三句去也一句にても苦しからす述懷と無常と引合せては三句にするなり無常はかりは三句つゝかす
述懷　三句去
無常に同し述懷と述懷、無常と無常三句去也
居所　三句去
二三句つゝく一句にてもよし躰用二句にてゆるすもわり
人倫　三句去一本二句去とあり
二句つゝきても苦しからす
山類　三句去
一句にても苦しからす二三句つゝきてもよし躰用は二句にてゆるす
水邊　三句去
山類に同し
生類　三句去
二句もつゝく魚と鳥虫と品かはれは二句去也
植物　三句去

二句もつゝく木と木は三句去也木と草と品かはれは二句去なり
衣類　五句去
二句より多くはせす帶に名もんなとは三句去なり
食物　三句去
二句もつゝく飲物と食物と品かはりては二句去なり
器財　二三句去
品かはりては二句つゝくも苦しからす
夜分　三句去
三句まてはつゝくも苦しからす
時分　朝と朝、夕と夕は三句去り朝と夕、晝と夜は二句去
降物
一句にて捨る二句より多くはせす
其品替りて二句去也雨と雨は折去也雪と雪も同し露と露は三句去也
風体　二句去
一句にて捨る又三句去二句つゝかす松荻なとの聲は風体二句去
天象　二句去一本三句去
一句にて捨る二句もつゝく其品かはりて二句去なり月と月は面去なり日と日は三句去星は只一句なり二句より多くはせす

發物　三句去一本二句去
一句にて捨る其品替りて二句去也雲と雲とは三句去也降り物に二句去但霧は降物發物兩用二句より多くはつゝけす
支体　四句去一本二句去
二句もつゝくかしらに爪なとかはれは二句去
書体　三句去
一句にて捨へし筆に短冊なと二句なり
火体　三句去
一句にて捨る器財なとは句によりて二句去
病体　二句はつゝかす四五句隔つへし病名に針灸も三句去へし
名所　三句去一本二句去
名所地名替りて二句去二句もつゝく名所と名所、國名と名所と替りても三句去也
旅体　三句去
一句にてもよし二句もつゝくけしきと人倫とかはりて二句
疊字　何々とかへす詞二句はつゝく打越しには嫌ふ
二句去にて降られぬ物
風体、火体、書体、降物、言語、乘物、歩行体、時分、濁り假名、畢ぬのぬ、ふのぬ等也
字去とは三句去也折面を替ても餘興に移りても三句去へし

三句つゝくものは三句去五句つゝくものは五句去とするか覺へよき也寄垣集四季部風去嫌早引等

句所に寄て名目ある事

端作　懐紙のはしめに俳諧之連歌と書を云也但堅懐紙にはなし
發句脇第三　本書目次に掲くる條に就て見るへし
四句目　よくめと云是は第三の句に付る也
五句目六句目月所　第七句目の名也爰を月の坐とする也
筆際　是は第八句目執筆の句所なる故七句目をかく云一巡の終に執筆の句あり其前句に老人功達の人にさせ侍るを筆際と云
筆句　第八の句也執筆のする所なる故也夫も人衆多くある時は執筆の句はせぬ也大かた通用の名也
裏移　九句目は裏にうつる故に裏うつりと云
かやうに押出して云ふは初折表八句過九句め裏のはしめの句をいふ二三名殘の折に成ては二のうら移三の裏うつりと云なり
一順　發句より筆句まて人數の句を一通り書とむるをいふ也また裏一巡あり下に出す
一巡は其會に定まる人數いくたりにても發句より次第に付侍りて終に功達の人句を付るを筆際といふ其次第に執筆の人句を付るなり是にて一順なり

再返　右の人數へ又一通りまはすを云ふ也
　一巡のふたゝひめくるを再遍といふなり
素秋　若しは初心の人なとわやまりて秋の句はかりを三句も五句もつゝけ月の句なきをいふ
　此名目慥により所なし近來の俗説なるよしなり
素表　裏うつりより神祇釋教いつれも相交しへてするものなるをたとへは餘の句はあれとも戀の句かつてなきを云也
つれたる　一に「つるゝ」ともありつれたるといふ詞はたとへは春ならは三句か五句まて秋の句も同し夏の句冬の句は一句より二句までつゝきたる時何の季はつれたりと云て限りとす
　春秋は二句にては捨す故に三句つゝき候へはつれたると申なり戀は一句にては捨する物故に二句續けはつれたると云なり
戀はなれ　戀の句つれたる時余の句にて付のくを云
　戀句といふはわろし戀の句とのゝ字を入へしとなり
　戀春戀秋は秋に戀をむすひ春に戀を結ひたるなり
句長　十七の句仕立たる人は次に又十四の所にてする物なりかく心得るを長かよいもしいといふ意を句たけく・るといふ也
　上の句と〳〵下の句と〳〵つゝかぬやうにくりわはするを句長くるといふなり

神祇　神の事同宮なとの儀式と云
釋教　佛の事佛法僧の態を云
無常哀傷　死葬の沙汰世のさためなき有樣難の事等也
述懷　光陰のうつりやすきと又は身のおとろへたる事なとを云
初折　第一折めの紙をいふ也合四枚有也
二の折　二まいめを云
三の折　三枚目を云
名殘の折　四枚目を云、百韻懷紙四枚目也
句の花　第四の折の名殘七句目にする花をいふ也
揚句　名殘の八句目を云
文臺際　文臺のそはに居る人を云但初心の人の居る傍にわらさるへし
宗匠　一坐のさし合なと沙汰する古老の人也
指合繰　それ〳〵のおきてをさはく也
表を摺　若し案しても一句もなく人に句所をとらるゝを摺と云
句所　誰々と云て名さし當所を云
打越　當前に付へき句の前なるをいふ也
花前　花の句すへき前の句なる故に云
生類　天地にあらゆる生きものをさして云
人倫　人の事也
態　人のすることを云

行歩（きやうふ）　人のあるくていを云又行路躰とも云
乘物　舟車馬などの人の乘るたくひを云
天象　天にある日月星雲などを云
降物　雨霰雪霜なと也
吟聲　執筆懷紙の句を讀わくるを云
前句　我か付へき前の句を云
墨付（すみつき）　すてに書かゝりたる句を云
執筆句を受とりて懷紙に筆をたつれは案しかへたきとても最早句を戻さぬなり
戻る　付て見ておもはしからさるを仕直しさするを云
趣向　よき句を思ひ付たるを云
句作り　句を仕立て誤りなきやうにする也
遲吟　句のおそく出來るなり
獨吟　ひとりして悉くすることなり
兩吟　二人してかけわひに一卷するを云
双句　是も前に同し
三吟　三人してする也
鼎吟　三吟のこと也
秀逸　ことの外出來たる也
内會　内々に催したる會を云ふ也
即興　俄かにとり立る也
卷頭　卷のはしめに入たるを云
卷軸　同しく終に入たる也

卷　清書したるを云
座字（さし）　會に行て錢なと出る事有を云但坐字何錢
句引（くひき）　誰は何句〳〵と句數を書付をいふ也
懷紙の外に句引の紙とあり滿坐の後句數を書し歳旦の句帳と云ふ
句合（せ）　發句はかりいくつも並て點とる事也以上供諧寄垣集
云捨（いひすて）　昔連歌の式目いまた定らさりける時は上の句を云かくれは下の句を付下の句をかくれは上の句を付なとして物に書しるすといふ事もなく即坐の興となせるのみ是云捨なり式目定まり懷紙に書付るにいたりては云捨にはあらす今も人に答ふるにも又自云出るにも筆紙を用ひすして口にさひ侍るは云捨なるへし近來點取世にはやりもてゆくに隨ひて點をとらぬ會を云捨といふ人あり點取は晴の會の稽古なる事をしらする故なり猶わやまりては一巡を出す堅懷紙の端書に何月何日於何所云捨會なとゝ書て出すものあり笑ふへし
云掛　緣語をもて云かくるなり秀句といふ是なりつれく草に寺法師をはろしと云たるをいみしき秀句なりとかゝれたれは此名目古くよりいへる事なるへし
鑿（いりほか）　穿鑿過たる句作をいへり詞のいりはか風情のいりはかとて有よしなり
入（いる）　付句を云出すにさし合ありて戻せは其句を付待ちて

止ぬるをいるゝといふなり

一字誹言　たとへは鳥なきてといへは俳諧にならぬとて鳥ないてとし又霜ふりてといふを霜ふつてなす類なり

會料　會の入めを云也

點料　點代のこと也

批言　何に何はあしくもなとゝ書付るをいふ也

褒美　ほめらるゝ也

平點　一點かゝりたる也

長點　二點かゝりたるなり

珍重　もてはやすとほむ也

無點　點のなきを云

突　同前

點〻　點の總高也

引合　同し點高にていつれの勝とも定かたきをいふ也

句題　發句の趣向すへき季の詞を宗匠より出さるゝをいふ也

探り題　同し事なから色々の題ともをあつめて人數程つゝみて出すを取て其あたりたる題にてする也

切り句　歌の八文字を切て出すを云

加筆　宗匠になをさるゝ也

添削　一卷の點をこふ事也

雅丈　俳諧の友たちを云

入集　板にする句を頼む時入集奉頼と云

歳且　年のはしめの祝の發句するをいふ

三ツ物　同しく脇第三まて付て三組あるを云

引付　三つ物の跡に入らるゝを引付に入ると云

一句一直　千句興行の時掟のひとつなり句を云出すにしさし合あれは直して又出すに猶さしあへは又入てもはや其句はせぬなり

一二三附　一巡の間は名を書て再遍より一二三と數付して名をかゝぬ事也月次の奉納又は一日千句にはかならす如此する事なり

韻字　句の留の字をいふ和漢の詩に韻といふは下の句のとまりをいへともけれとはかはりて上句の留をも韻と云故に百句を百韻といふなり

傍題　梅の題の發句に鶯を結ひて梅の事はわきへなりたる類なり

はまる　前句へ付通たる事なり

筈刺　錐小刀の事なり硯に必らす添る物なり俗にはんさしといふ

袴着す　中七文字の用にたゝぬをいふ

二句物　一座に二つ有物なり

二句去　二句去と打越嫌ふものと紛れたること多し打越し嫌物は付て苦しからす二句去のものは付ることもな

らぬなり

二句散亂吟　二句へたてゝの上出勝に付るをいふ也

發句　かなに書く時はくと書かよしはつくと書へからすとなり

同意　前句と同し心なる句をいふ

等類　古き句をとりてするに其句と心のかはらぬを云

同作　百韻一坐の內前に出たる趣向の同しき句後に出るをいふなり

同字去　三句去の輕き字をいふなり同の字を畧して字去ともいふ

取成付　夜を竹のよにとりなし神を髮に取なしなとして付るなり連歌に異形通對といふといへり

遠輪廻　前に出たる付合に又其やうなる付心の句を付るをいふなり變に多きものなり又一句の作意も前に出たる句に似たるは遠慮すへし

兩節句　歳且歳暮の句をいふなり

輪廻　打越へ心のもとる事なり

兩嫌　神祇に戀をひすひ尺教に戀を結ひは戀と神祇と尺教と兩方に嫌ふなり

片嫌　是は述懷々舊無常哀傷等に戀を結へは戀はかり又嫌ふをいふ

折嫌物　懷紙一枚の間を嫌ふものなり

折句　五七五七々の上に文字を置事なり又沓冠といふあり

沓冠　句の上下に物名なとの字を置てする事なり

沓はかす　座の句の無用なるをいふ

掛てには　前句のとまりを付句のはしめにうけて云つくるを云なり

掛合　心のかけ合詞のかけ合てにはかけ合とてなり

影月　月といふ字さし合たる時月の字を入すしてする月をいふ

冠着す　初五文字の用なきをいふ

立入　物の名を句に作り入るなり

出句　豫て一巡出來して有を文臺立て會はしむる時發句人より次第々々に仕たる句を吟して執筆にかかせるなり是を出し句といふ

短冊　かなにはたくさくと書てたんしやくと讀となり

連衆　かねて定りたる一巡の人をいふ

總代　夢想ひらきある事なり

追加　人々の發句あまた書つらね侍りて後遲く到來の句又は賞翫の人の句なとを卷末に書加ふるを追加といへり又千句の滿坐の上其祝言をするをも追加と申なり獨吟千句なとには其作者の又百韻をしてそへたるも有多くは表八句のみなり

中句　上の句の七文字をいふなり

難句　付にくき前句をいふ又は一句に思ふ所あるをも申な

り

裏一巡　座中の人々名殘の折になりて各一句つゝ付侍るをいふ

結題　月前酒などゝいふ題なり又寄花戀などゝいふはよせ題なり

後付　付やう前句と前後したるなり

雨中吟　うれはしく晴やかならて何となくむつかしき句をいふなり

求食　みつからの句に又自句付るをいふなり

さし句　此所を是非ともに付よと宗匠より其人をさして望むをいふなり

座懷紙　小懷紙をいふ

再注　前句を注するやうに付る事なり

季狹　戀の句に春秋の戀を付三句過て又季なしに戀付る事なり

聞物　音聲ある類なりたとへは鐘などの打越松風等宜しからさるなり

禁句　遠慮あるへき句なり

聞句　是は謎の句にて思惟すれはよく聞ゆるなり聞發句ともいへり闇の夜は松原はかり月夜かな、嗅て見よ何の香もなし梅のなといふ類なり

見渡　懷紙一面の間をいふ

繪懷紙　四季の繪をかきたる也

平句　發句脇第三舉句四本の花の句此外はみな平句といふ

非衆　連衆の外に出座の人をいふなり

左書　句を書て其左にかやう〳〵と其子細をかくなり又貴人の御句などは句の前に名をかゝすして左に是は誰殿の御句なりと書付るなり是賞翫なり

以上俳諧名目抄

會席作法

當坐などの會は巾すに及はす乘日の一順

一順とは其會に出たる人の數を句にて定るなり盡く一句つゝ付て廻はす故にはしめてめくると訓て字の聲は一順といふ也二度めくるを

再返と云皆堅懷紙なりさて一順過て横懷紙にうつすなり

但是は懷紙の面に書て後少々句を引直す事も有る故に所々消しなとして懷紙の面見苦しくならぬやうにとなり

應安元年二月に二條大閤樣救濟法師周阿等と合牀の新式目編集のつゐて

執筆

懷紙淨書の役也古式は色々の作法あり

諸樣を極めらる其大概に云

會に臨て執筆する人の專らたしなむへき事を拔書

先つ硯文臺會席へ出す事懷紙をは常の俱紙の如く折て硯を

は手元に置く何れも文臺の上に置て執筆さし寄りて書へき
やうに置くへき也

硯

飾りやう家々の傳あり好む所に隨ふへし然れとも、墨の
つか、耳かき、筆は一對いつれも笠をきせて置く也笠さ
し此分は是非ともに入用の物なり是その席の亭主の故實
也口傳

の蓋を取てふせて硯のかけこに並ひて是を置き水を入墨す
る事五磨七すり

但此分にては墨うすき故に前かと勝手に能ほとに摺て出
すへし亭主の方

するへし

墨の置所口傳　是は執筆の故實

其後筆を染て硯のかけこに置

但筆の笠有るをあれこれと取て見て仕ふ事なかれもとよ
り墨の付たるを遣ふへし筆の笠は上へぬくへし口傳

又硯の筆いかにわろくとも私の筆用意しるり顔に取出し
て書くこと尾籠也但亭主又は貴人より別の筆下さる時は
夫にて書くへし夫も會終りて懐紙淨書の時はいかにも能
き筆を奔走して書くへき也

懐紙を折る事四折の内一重ねを取て兩方の端を引揃へて折
るへし

但四季の繪かきたるもあり

除りに折目をきふく付るへからす

懐紙を折る時引揃ふる樣にすれは自らうすくと折目付也

折殘の紙をは硯の蓋の上に置へく

此法を知らさる物は盤の上または文臺の上なとに置くこ
と尾籠の事なり

執筆の居樣貴人の御前なとにては左右なく安坐すへからす

右の膝を立つへし

若御詞かゝりたらはろくに安坐すへし

是は殊に貴人なる御方への禮也大方の貴人には無其義

遲參の人に付向披露すること當句より

其人の付へき前句のこと也

打越まて

打越とは其人の付へき前句の手前の句也

披露すへし

貴人には一面も又は幾度も吟すへし但時宜に依るへし

惣して懐紙は持て書くへき也

凡は胸の通りに上くへし猶口傳

筆を持て披露する事あるへからす又去嫌或は過たる物を見
るとて懐紙を折返しゝゝ見る事有るへからす只覺へたる分
を嫌ふへく

指合なとは少々有とも苦しからす猶心得有て態と書もあ
り

附句出來の時先吟して其坐の宗匠に伺ふ宗匠領納ならは懷紙に寫し名まて書て吟しあくる也

貴人の御句は披露まてもなく頓て是を書て披露すへし平人の句は宗匠領納を待へき也

客人なとの句受取て名乘問ふ事苦しかちす指合去嫌は幾度も執筆より吟味すへし

貴人少人の句又は初心の人又は度々指合有て面を摺やうの人の句は少々のさし合は見ゆるすへし

坐中の人いかに指合有とも直すへからす又執筆たる人文臺に直りて後

茶を呑むへからす菓子喰ふへからす大酒すへからす成はと物も早く食して出

いかやうのおかしき句おかしき事にも大聲に笑ふへからす食なとの時は膳をもつて末坐に退へく但貴人の御詞かゝりて御免の時は膳をもはたらかすへからす又文臺も動かすへからす以上元錄寄垣梁

執筆附端作の事

貞德云連歌には五ヶ十ヶ字と賦物あれと俳諧は則百韵なから俳言にて賦する連歌なれは端作をも俳諧之連歌と書へき也

正保三年三月十七日於花咲亭定

これ夢想懷舊經文名號之連歌等の心はへ也然れははしめより執筆懷紙に俳諧之連歌と書付て發句を待へき也師說

如是

但文傍には俳言の賦物とる方もあれは其用意して先尋常のやうに硯をおろし蓋を取り懷紙をさはき

懷紙一重の中を取て文臺に置上をとりて硯の蓋に置く墨摺り筆を染て偖懷紙に何ともかゝすして筆を持添て發句を待へきか

さて發句出れはうち誦して宗匠の方を伺ふに宗匠俳諧之連歌とかけといふ時又發句を誦して端作より發句名まて書て吟しあくる也

若賦物取る事あらは上賦、下賦を心得て賦何々俳諧連歌と書へき也或は連歌の二字をかゝても苦しからすとかく兼て宗匠に問ひ伺ひて其下知に任すへきなり

夢想の時は硯懷紙右のやうに捌き終りて其夢想の句を執筆より吟する也さて興行の人その句を常のやうに聲ひきく出せは執筆又打誦して端作發句書付てさて吟し上る事同樣也

懷舊の會の時は執筆右の如くして筆を染め懷紙を取て懷舊之俳諧と書付て發句出れは誦て書付て吟しあくる也經文名號等の俳諧も皆懷舊追善の折に有ることなれは右懷舊の俳諧の如くなるへし漢和和漢の折も同前也

衆人愛敬をもとゝして立居しけからす眠らす笑はぬやうに曉るへし俳諧の二字紀氏古集にかき支給へる文字なれは只言篇にかく習也又俳諧と書くも苦しからすとそ季吟

著増山の非

執筆習のこと

先文臺を持出懐紙四枚を二枚つゝ重て二に分横に折て又竪を三に折硯の蓋の上に置文臺の中央に置くへしさて宗匠に一禮して文臺に向ひ硯をおろし紙二重ねとも文臺の上に置硯の蓋は我脇に置くへし紙一重は蓋に置一重を取り上二枚重ねのまゝ書くへし文臺に置て書くへからす手に持て書くへし是は百韵の法なり

歌仙は懐紙二枚表に六句裏十二句書也此他附合の請取渡し懐紙綴ちやう亦吟聲に祝吟愁吟等の事師に付て習ふへし

吟聲は發句二遍讀て名をよむ脇より下は一遍と名をよむ

執筆は句はかり讀て執筆とはよむへからす

吟やうは長句の下五文字短句は下の七文字を次第上りによむ

一順の留り句をは發句の如く二遍讀て名をよむ

匂ひの花は抹香濟てよむ

愁吟は次第下けによむ追悼追善には愁吟也

名は句の留りに書く

雲紙の青き方を表に赤き方を裏にす

追善等には紫を表とす短冊にも青き方は上也

一句の内かしら字並はぬやうに文字假名交へてかくへし

墨次きも短冊の如く書く是を藤の花かきと云雪中庵傳書

生花傳書に詩歌連俳と花の心得あり

詩歌連俳の會の席には生花は時候によりて名所の花を生るへし尤も幽玄第一に生る秋冬より早春までは閑情に生るへし必す猥がはしき生方有るへからす

名所の花には

梅難波津梅津初せ山　柳佐保川かも川　桃漢土桃園桃原の渡　櫻吉野山初瀬山嵐山御室音羽山　燕子花八ッ橋淺澤　菖蒲淀の澤かやの池　蘆三島江三津濱難波津　荻二見濱伊せの濱和歌の浦　山吹井出玉川まかきの島　松住の江高砂　芒眞野の入江武さしの　紅葉立田高尾　秋草さか　竹伏水　藤多古浦　菊吹上濱

餘は押て知るへし惣て名所の歌なき草木は生るへからす其内にも時候早く咲たるは珍花とてよけれとも後れたるは用ふへからす又時節に早過たるも又殘花に同し

祝儀の花には古禮を正しくして花も本手則ち眞の生方なり必す客位に生るへし草木とも雜木雜草は用ひす總て諸事に緣ある花を用ひるなり

新宅の花は總て水に緣の有る花を用ゆ赤き實物は火の色に寄る故に禁す生方は根〆を堅く福相に生るへし

婚禮の花には婚儀は日本の大禮にして國の始家の始子孫相續の根元なれは粗畧に扱ふへきにあらす依て松竹の二種にて婚禮の媒を祈る松は男の義を表して云竹は女の貞操を表す水引を以て其根を結ふ二度解さるを祝ふ心なり

旅出の花は神に手向て道中の無事を祈る生方なり生花傳

宗匠判者執筆亭主
連衆の心得の事

貞享式には宗匠の法と判者の法とを新式の二條にわかちて執筆の法を一條となし亭主の法あり連衆の法あり五條は例の心得としるへし

さて宗匠の心得といふは第一に其座の人情と見さゝけて我句に人を屈すへからす人は宗匠の顔を見て待心より調子を失ふよきもあしきも風雅の運ひなれは其日の俳諧の始と終とをかんかふへしさて人〳〵の附句あらんに第一は附心の道理か理屈かを聞わけて附句の趣向を稱すへく前句の噂を難すへし

第二は三句の打越より四五句のはこひを論すへし四折の變化は勿論の事也必らす當句の面白みになつまされ句作のあしきは宗匠より直すへく趣向の悪しきは作者へ返すへし指合の事は執筆の役なれは宗匠の心をついやすへからす然るに道はいつれの道にも法と式とは立たれと俗にはそれを青表紙といへる俳諧は殊に新式なるより一座の設口傳といふ事ありて宗匠のよしあしは此時の用也おほくは月花のあつかひより二季にまたきたる彼岸の類も四季にわたりたる無名の祭も發句にすれは季となるものなり附句にすれは雜となる物なり詞のさし合も物の去さらひも其場にしたかひ其人によりてとかむるもありとかめぬもあり新式のかけたるをおきなふ時あり古式のかたく明なるをためる時ありこれらをおほやけの私といひて其才にたえされは人も感とす其和をそなへされは人も信なしさらは此理を先につたへて其式を後にまなひなははしめて宗匠の名はよひぬへし

爰に古人の詞あり君子も重からされは威あらす威あらされは信なしとは道をまなひ藝をならはひに妙所は信の一字より入れは俳諧もなそ有德の師によらさらんされと俳諧のおかしみより笑言をもて人をみちひかむに例の一節をしらさらんには古人の詞の聞まかひもあらむ

次に判者の心得といふは宗匠の一體別名なから釋門に佛と菩薩とのことき三十二應の自在を得て世法をあつかふに分明あらんされは詩歌の勝劣はむかしより君子の射にならひて運俳は賭物を爭ふ時もあれは道を損するも判者にあり道を益するも判者にあり況や百韻の點式には長點の法あり圏點の格あり秀逸の印は例の危けれは點も無點も判者の變といふへし

第一に判者の心得は俳諧一道の點といふ事を知るへし其卷に向ふ時は宗匠の附合を聞くに殊ならす指合は筆者の役なれと目にあたる時は斷るへし

さて一道の點といふは判者の心の好所を捨て例に當句のよしあしになつます附合の運ひの會釋と見へてはたとへ心にいらすとも一點加ふるは勸懲の法なりいてそよ一本

の筆を動かして一國一城の人をなびけ西へも東へもむかすべきに其人は判者の癖をまなへは判者は其癖に化粧をつけて果は其黨の相詞となりなひされと點者の額うちて價をまつ人は此論に及はすそもや判者の宗匠にすくれて世法をわつかふ大事とは世界の俳諧のよしあしをは判者の心にはよくしれともいへは斯くいひ斯われはとありてこの所のさたのならぬなり其黨の俳諧をまとはせは其中に丈夫の人ありて例の難所をわとへ戻りて俳諧はとにもかくにもあらす上手といつは其理の明らかに下手といつは其理にくらかりしをと初めて自己の眼をひらけて判者の虛實を看破せむ爰を醫師には盻眩といひ祖錄には千疑一決といへりこれらは儒佛の內證にして下愚の人には沙汰すましき教化の人の大祕事なりされや昔の俳諧には俳言なしといふ判あり其世は例の輕口をたくみて連歌師の餘興にもいひ捨たれはさる脇書もすへけれと今や我門の俳諧には俳諧の心といふ物はあれと俳諧の詞といふ物はなしたとへ筑波の躰をつくし八雲の詞をかさぬとも連歌と俳諧の姿は別なり此故に我家の點式には雅言のぬめりには俳諧の躰なしとも俗語のいやみには俳諧にわらすともそこの兩樣を書わけよと新式に故翁の傍訓なり爰に雅言といひ俗語といひとちらも俳諧の公用なるにぬめりといやみとをそれか病ひとはこれらに俳諧の明白を察すへし誠や世の中の善言も惡言も口ある者の口占ならめとそれに病の有無をいへる式目の委細を稱せさらんや世にまた俳諧にくらき人の點者は十國十色なるには俳諧はすこふるいひ勝なりといへるそれらは放下の人にして此中の論にはわつからす

次に執筆の心得といふは宗匠の機變を能くはからひ連衆の調子を失はす假名と眞名との配りを口傳おはへてたとへ偏畫のまされありとも手つかひはやく書たらんそれを第一の心得といふへし例に指合と去嫌は素より執筆の役なれは人の附さる以前よりわしからん物は見直すへし

さて指合のある時は宗匠の顏を見て窃に其事を申すへき也其場は人の句によりて其儘さし置事もあらんそれも世情の人和なから一座の禮節を知らさらんには公私のさかひに道をわやまるへし中略

次に亭主の心得といふは勝手の馳走に立さわかす喰物の次第を挨拶の人にしらせてそれを宗匠に通すれは姑と終とを心得る也されは我家の面通言になら茶三石喰ふて後はしめて俳諧の意味を知るへしとはある時に故翁の戲なから論語の精にはいひまさりて名をさしていへるは例のさひしみ也されと厭はすとしつめたる文章の優にはおとろきて爰に雅俗のさかひを知らは子成か文質の論をもしらん

さて新式の饗禮に其席は一汁二菜に過す茶と煙草とはかきりある物かくその器物に氣をつけて亭主の結構に任す

へし酒は二献に過すへからすとそ誠や茶人の時分よりも俳諧の供給は大事といはむおそき時は待こゝろに屈し待得てあく時は昏睡におこたるまたざらんほとは亭主の心得なりかく酬應の輕かちんも偏へに儉約の心にあらす例のねむらす例のさひしからん其故あるを知るへき也

世に客發句といひ亭主脇といへるさよと偏には思ふからす發句は客の位に似て其さまもおほつかなく詞の外に心をあまし脇は亭主の働に似て其心あきらかに發句の余情を調ふる故也脇の韵字も此沙汰に知るへし

世にまた名殘の花をさしておひの花といふ事あり此名は俳諧の儀式たちて奉納追善のたくひには發句の作者は其花を望むへし始と終とには其心をあしらひて爰に其事を句はす故也

其座に亭主の心得は執筆は名殘の表みちて裏一順と斷る時に亭主より其花を望むへしそこに一順を待あはす爲也其席は舉句もつねならねは或は一座の老人か或は一家の故ある人か其日の時宜を見あはせて花の次手に舉句をも望むへしかくて滿座の再吟に發句をは吟しかへさす匂ひの花より舉句へつゝけて押返し二度よむへし其事の儀式を尊重する心也これらの故は諸抄に論せす名のみ覺へたるは覺束なし

次に連衆の心得といふは例に衣食の機嫌をと稱へ其日其席の時刻におくれすをの〳〵其所にあつまりて文臺のたゝぬ先はみたりに宗匠の居間に出いらすそこに一順を調ふる時は取次をもて其句を窺ふへし連座の前の威儀に屈せさらん爲也いつれの席にも小懷紙の用意して面々硯にて草稿すへし本より文臺に遠けれは趣向の間の指合にまとふさて其席にのそむ時はおほむね座配の次第ある物なれは辭義にかまひすきてはかへりて無禮なり膳中の詞の世なれたるも皐し附句は手をさけて執筆へ申へし宗匠もをのつから聞しりなむ一句一直とも出合遠近とも此類は古式に五條ありて今はた爰に記するに及はすすへて俳諧の席を論せは第一に世情の人和をとゝなへて論語に温厲の變をおもへ第二は談笑の風俗にあそひて關雎に哀樂の頌をしれや俳諧は其日の陰晴にひとしくよきもあしきも一時の變ならんかへす〳〵も我門の俳諧師は俳諧は俳諧のよしあしにもあらす俳諧はそも何の爲なるや法式はそも何の故なるやと其道をあきらめ此論をとかめて平話の中の風と雅とを知らは道理も理屈も今日の戯にして虛實はをのつから風雲の變にかなひ姿情はをのつから花鳥の和にあそはん其人はよし俳諧をまふひてたとへ鳥焉の字をしらすとも和漢に滑稽自在の人といふへし

傳曰此篇は全く我家の法なから他門の式にも變らぬは其書此抄に聞なれて大うつ童部もしるらめと爰には理事の二を論して其法は何の爲なるや其式は何の故なるやと法式の所謂をしれと也すへては貞享の式目をつみて五條の

心得をいへりけりさて宗匠の心得に一座の設といふ事は其日に其場の機轉なれは其事は日夜に變すへく其理は古今に通すへし

宵闇はあらふる神の宮うつし

北より荻の風そよきたつ

此句は歌仙の初折にて月秋の七句目なるに宵闇に月の附かたけれは荻に神風の威靈をあしらふ然れは其次の殊にむつかしきを例に遷宮の宵闇はほのかに月影を含たれはと爰には月といふ字はかりを出して

八月は旅おもしろき小幅綿

これらは一座の名譽なりとて其比に書つたへ侍しか我門の太龜生はいつれの卷の宵闇をも月とおほへたる沙汰もあれは爰に宗匠のよしあしとはいへり此故に一座の設にはそこはくの條目を書ならへて公私の二字に結語せし爰に一犬の虛實を思はさらんや蓋おもふ此段に風雅の運といふ詞は白馬に祖翁の常語なるか左るは黄門の家訓にも道の冥加といひ高運といへる風雅の詞の須使なから俳諧には例の殊勝地といふへし

次に執筆の心得とて假名と眞名との配をいへる但此事は古法にはあらす東華式の文格より我家の書法とはなしぬ連歌にはおほく假名をもちいて俳諧にはおほく眞名をもちゆれは眞名と眞名とのかさなりて上下の連續の心得かたき時ありたとへは

古池や蛙とひ込水の音

のことき込水のつゝき隱ならず「蛙飛こむ水の音とは勿論にして眞名にかゝねはならぬ事もあれは其時は「飛込む水の音と無用の「むの字を加ふる事いはは大和の風躰にして假名と假名との配にもウフの通用を知るへき也此外にフヒへの音韵もイキシクの竪横も芭蕉門の假名遣とて貞享式の一條となせる例の口傳とは此類也むかしより物の法式には道理を破りて時宜にしたかふ事あり古傳のあやまりを用ゆる事あり何の故ともしれぬ事ありそれを故實の法といへれは例の師をえらひて先しるへきはたゝ此故實の一法ならん蓋や第二の條目に俳諧の黨をまとはすとは道に教化の大祕法にして儒門には是を孫言といひ老家には是を寓言といふ況や佛書の虛實自在なる五千餘卷はすへて方便說也これらに指月の喩をしらは爰に俳諧の用と無用とを知らん蓋や

第三の條目に一座の禮節といふ事は前に人和の温厲なから今は公私の二字に結して法の私曲をいましめたる爰に十論の公道をあふき爰に十論の公法を學ひさらんやこれらを百世の五條目と知るへしをいな我門の文道は道德の二篇に實をほとき法式の一篇に虛をおきなふ是よく虛實の設にして讀人これらの變をしらは此十論に鼻息を通してはしめて俳諧の名をよはれて天下に横說竪說すへし君見よ儒門の四教とても忠信の教は諸道のつねにして孔子

の道は文行の學にありかく其の道の差別をしれは三家の意地をしれる人といはむ唯おそれてもおそるへきは俳諧の道の平地にして容易の人のふみまよふへきをや中略

論語も始は學の一字より終は言の一字をもて言を知らされは人をしらすと万古不易の大道を結語せしは其言といふは論談なり論談といふは俳諧也俳諧はたた虚實にして其虚を談すれは釋老となり其實を論すれは孔孟となる爰に論語の名をも知るへし下略

以上俳諧十論第十法式論抄

三石とは山谷集に虚思道か諷言をひきて不學者使飲墨汁三斗とも東坡集には荆公か俳諧をひきて純灰三斛の語あり三ノ字は物のほとなるへし爲辨抄

儉約　一字錄の連俳篇にそも俳諧の家風といふは釋迦孔子のあとをもとめす和歌連歌のぬめりをあらひて一道の意地を建むとすれは身を輕んして儉約せよ人を重んして謙退せよと古風の文章はかゝぬ也我と今日の道理をしり我と今日の時宜にあそへは何かは世法の和節にそむかむ唯おそるへきは時宜の變なりとそ誠に其錄の一大事は言語論談の實をとめす時宜の交通を知るにしかすとそ全抄

宗匠居間　一座の式目に俳諧の交席は其家の普請によりて二間三間なるは論なし一間ならは屏風に陰とりて宗匠も連衆も威儀に居すへからす初心の方へは代句をして一順をはやく附へし當座の一順に新古を論せす附合のさまのやすらかなるは爰應の次第のはくれさる爲なりとそ

五條ノ式

一　諸禮停止
一　小語低聲
一　出合遠近
一　一句一直
一　月花一句

右は舊式を增減して貞享式の條目なり此外に千句の一條あり自句二連とも三連とも連衆の多少によるへきなり万句は千句の法にかはらす十百韵といふ時は一座と十座の差別にして一卷〳〵に百韵の式也しかれは一座と一卷とは去嫌の用捨と知るへしさて舊式の出合遠近といふに但シ聲ノ先といふに書あれとも先後の沙汰は紛るゝ時もあれは遠近のみにてしかるへし月花の一條にも舊式は雪月花とあれと雪は八なれは其沙汰に及はしたとひ月の句といふとも句順には堅く辞すへからす花は決して一句なるへし千句万句の一座にては月花の用捨も勿論なれは百韵の一座とても法式は例のやすき方によるへしかたけれは不興の時もわらんしかれとも一座の法はおほむね古式をまもるへく一卷の掟には古式の害なるもおほかるへし全抄

心の俳諧の事

心の俳諧は燒米をかむ如く詞の俳諧は黑砂糖を嘗るか如し

味ふて輕きとしたゝるさと飽くとあかぬとの違ひあるへし詞の俳諧は低く心の俳諧は限りもなく高し詞の俳諧には甘み多しと云は言葉に花をかさる故成るへし大概俳諧を得足らんものはそこは見限りて洒落をこそ好むへきに何とて甘みを好む者多くあるやを答云甘みの風流に迷ふ事音頭拍子に囀る鳥のみに非らす一端洒落に遊たる人甘みに思ひ付細みを捨て詞曲の俳諧をするも有ると聞ゆ物好とは云なから隱遁は淋しきとて俗にかへりて市にひさくか如し併しなから寂て高きは及ひかたけれは花やかなる所に目のうつるも尤也以下芭蕉の鎖問答

蕉門の俳諧は言葉の俳諧に非らす心詞一體の俳諧なれは栞りを專らにする故に五七五栞り續て聯聲に用ゆへきたへ間なし故芭蕉も此古法捨給ふには非すして用給はさりしと見えたり他門は栞りを不用故に心はなるゝ所多し此故に聯聲の法あり先賢は蕉門には無用の法なりされと芭蕉も捨給はすして論置き給へは知らさるは道に疎しといふへし勤て知るへきことなり師說錄

心の俳諧　古代の諧俳は附方連歌の如くにして俳言を求め連俳を分つ祖翁より以來は連歌の附に非す前句へ對して理外の見出しあれはたとへ一句に雅言を述て俳諧なきも附たる所私の俳諧也此境を知らさる時は歌のみ連歌師なとに俳言なきと問れて驚くへし能く信用すへし古代の付方とは

轆轤首とや君かなるらん
傘の骨身にしめる戀風に

如斯ろくろに傘戀風に君と四つ手あらみにして連歌の附かた也今樓は

轆轤首とや君かなるらん
櫛うりに及こしなる垣一重

如斯前句をのひ上りたる姿と見てこなたより櫛賣の句附也櫛といふ字は首の枝折也雲中庵雪の栞

俳諧修行教の事

蕉門に千歳不易の句一時流行の句といふあり是を二つにわけて教へ給ひとも其元は一なり不易を知らされは基立かたく流行を知らされは風新にならす不易は古に宜しく後に叶ふ句なる故に千歳不易といふ流行は一時〳〵の變にしてきのふの風は今日宜からす今日の風は翌日に用ひかたき故一時流行とはやることをいふなり

魯町曰不易の句の爲はいかに去來曰不易の句は俳諧の躰にしていまた一の物數寄なき句なり一時の物數寄なき故に古今に叶へりたとへは

月に柄をさしたらはよき團扇かな　宗鑑
これは〳〵とはかり花のよしの山　貞室
秋の風伊勢の墓原猶すこし　芭蕉

是等の類なり魯町曰月を團扇に見立たるも物數寄ならす

や去來曰風比興は俳諧のみにかぎらす吟詠の自然なり凡吟にあらはるゝも此三つをはなるゝ事なし物數寄とはいひかたし

魯町曰流行の句はいかに去來曰流行の句はおのれに一つの物數寄ありてはやる也形容、衣裝、器物等にいたるまて時々のはやりあるか如したとへは

むすやうに夏にこしさの暑かな

此躰久しく流行す

われは松にてこそ候へまさの雪　松下

海老肥て野老痩たるも友ならなむ　常矩

或は手をこめあるひは歌書の詞つかひ又は謠の詞とりなとを物數寄したるあり是等も一時流行し侍れと今日は取上る人なし魯町曰むすやうに夏にこしさといふは緣にあらすや去來曰緣は歌の一事にして物數寄にはあらす手を込ると緣とはかはりあり

魯町曰不易流行其元一なりとはいかに去來曰此事辨しかたしあら增人體にたとへていはゝ不易は無爲の時流行は座臥行住居屈伸伏仰の形同しからさるか如し一時〳〵の變風是なり其姿は時に變るといへとも無爲も有爲も元は同し人也

魯町風を變るには其人ありとはいかに

去來曰本を知らすして末を變る時は或は變風其變風俳諧をはなれ或ははなれすといへともつたなし芭蕉奥州行脚の年冬はしめて不易流行の敎を說給へり

魯町曰不易流行の事は古說にや先師發明にや

去來曰不易流行は萬事に渡るなり然れとも俳諧の先達是をいふ人なし長頭丸以來手を込る一體久しく流行し

角樽や傾けのまふ丑のとし

花に水あけて咲せよ天龍寺

といへるまてに吟したり世の人俳諧は斯の如き物とのみ心得つめぬれは其風を變する事を知らす宗因師一度其こりかたまりたるを打破り新風を天下に流行し侍れといまた此敎なしかりしよりこのかた都鄙の宗匠達古風を用す一且流〳〵を起せりといへとも又其風を長くおのか物として時に變すへき道を知らす先師はしめて俳諧の本體を見つけ不易の句を立また風は時に變ある事を知り流行の句變ある事を分ち敎給ふ然れとも先師常に曰宗因なくんは我々か俳諧くかい貞德の涎をねふるへし宗因は此道中興開山なりといへり

丈草曰不易の句も當時其體を好みて流行らは是も又流行の句といふへき也

去來曰蕉門に不易流行の說々あり或は今日の一句〳〵の上を說あり是も流行にあらすといひかたし然れとも不易流行の敎といふは俳諧本躰一時〻〻の變風とのこと也

去來曰俳諧を修行せんと思はゝ昔より時代〻〻の風宗匠〻〻の體を能く考知盡すへし是を知る時は新古おのつから

分るものなり

俳諧の修行者はをのが好たる風の先達の句を一筋に尊み學ひて一句一句に不審を起し難を搆ふへからす若し解かたき句あらはいかさま故あらんと工夫し或は功者に尋明むへし我か俳諧の上達するにしたがひ人の句も聞るもの也始より一句一句をとかめかちなる作者は吟味のうちに月日かさなりて終に功の成たるを見す先師曰今の俳諧は日頃に工夫をつけて席上に臨んでは氣鋒を以て吐へし心頭に落すへからすとなり

支考曰昔の俳諧は如來禪の如し今の俳諧は祖師禪の如し捺著すれは即轉す

去來曰先師は門人に教給ふに其ことは極りなし予に示し給ふには句毎にさのみ念を入る物にあらす又句は手つよく俳意たしかに作へしと也

凡兆には一句わつかに十七字なり一字もおろそかに置くへからす俳諧もさすかに和歌の一体也句に栞りの有やうに作るへしとなり意は作者の氣性と口質によりてなりあしく心得る輩は迷ふへきすちなり同門の中にもこゝに迷をとる人多し

去來曰俳諧は新意を專にすといへとも物の本情を違ていふものにはあらす若し其事をうち返していふには品ありたとへは

　　戚時花濺涙　惜別鳥驚心　或は

櫻花ちらはちらなん散らすとてふるさと人の來ても見なくに

といへるたくひなり

　　戚時惜別大宮人の見さる是等一首の眼也

去來曰俳諧は火をも水にいひなすと清輔かいへるに迷ひて雪のふる日は汗をかきけりといふても苦しからすといふ人あり夫は火を水とはかりこゝろへいひなすといふ處に心のつかさる故なり雪の日に汗かくやうに一句を能いひなさはさもあらむ

　　咲かへて盛ひさしき朝貞をあたなる花とたれかいひけむの類也

去來曰句案に二品あり趣向より入ると又詞道具より入るとなり詞道具より入る人は多は頓作多句也趣向より入る人は遲吟寡句也

されは案し方の位を論する時は趣向より入るをよしとす詞道具より入る事は和歌者流には嫌ふと見えたり俳諧にはあなかちにきらはす

去來曰蕉門に同巢同窟と云事あり是は前吟の鑄形に入て作する句也たとへは竿か長くて物につかへるといふ句を刀の鐺か障子にさはる或は杖かみしかくて地にととかぬと吟しかゆる也

同窟の句は手からなしされと兄より生れましたらんは又手柄なり

去來曰句に句勢といふ事あり文に文勢語に語勢あるが如したとへは

ふるふかことく小糠雨ふると云句を

先師曰　打わくること小ぬか雪ふると作れは句勢あり

となり

去來曰句に姿と云ものありたとへは

妻よふ雉子の身をほそうする　去來

此句初はつまよふ雉子のうろたへて啼と作りたりけるを

先師曰去來汝いまた句の姿をしらすや同し事も斯いへは

姿ありとて直し給ひるなり支考の風姿といへるこれ也

去來曰句に語路といふものあり句はしりの事也語路は盤上

の玉のはしるか如く滯りなきをよしとす又青柳の風に亂

るゝことく優を取たるも面白しろからん溝川に土泥のな

かるゝやうに行あたり〳〵なつみたるはわろし其外卷中

一句二句は曲をなせるもあるへし夫とても語路の滯たる

は嫌ふ也

先師曰發句は頭よりすら〳〵といひくたし來るを上品とす

洒堂曰先師曰發句は汝かことく物二つ三つあつめて作る

ものにあらすこかねを打のへたるやうにありたしとなり

先師曰發句は物をとり合すれは出來る物也夫をよく合する

を上手といひあしきを下手といふなり

許六曰發句は取合て作する時は句多く出來るものなり初學

の輩これをおもふへし功者に及ては取合不取合の論には

あらす

許六曰發句は題の曲輪を飛出て作るへし廓のうちにはなき

もの也自然曲輪の中に有は天然にして稀也

去來曰發句は曲輪の内になきものにあらす殊に即興感偶す

る物は多くは内にあり然とも常に案るに内はすくなく多

くは古人の糟粕なり千里にかけ出て吟する時は句おはき

のみならす第一等類をのかる初學の尤思ふへき處也功な

るに及ては又内外の論にはあらす風國俳諧句毎曲輪の内

なり予此事を示さは

電に德利提て通りけりと云を

德利提けて行かゝりと直す

名月に皆さかやきを刺にけりといふを

さかやきを皆そりたてゝ駒迎と直しぬ

去來曰他門と蕉門と第一案し處に違ひありと見ゆ蕉門は

景情ともに其有處を吟す他流は心中に巧まるゝと見へた

とへは

御蓬萊夜はうすものをきせつへし

元日の空は青きに出舟かな

鴨川や二度めの網に鮎ひとつ

といへる如し禁闕に蓬萊なし洛陽に出舟なし鮎一つは少

なき事にや皆是細工せらるゝなり

去來曰蕉門の發句は一字不通の田夫十歳以下の小兒も時に

よりてよき句あり却て他門の功者といへる人は疊束なし

他流は其流の功者ならされは其流のよき句はなしかたし

と見えたり、

先師曰發句は昔より樣〻替り侍れり附句は三變にとゝまれり と云

杜年曰發句の善惡はいかに

去來曰發句は人のもつともと感するはよし、さもあるへし と云は其次也、さも有べきやといふは又其次也、さはあらしといふは下也

杜年曰發句と附句の境はいかに

去來曰七情萬景こゝろに留る處に發句あり附句は常なりたとへは

　鶯の梅にとまりて啼といふは發句にならす鶯の身を逆に啼といふは發句也

杜年曰心に留る所は皆發句なるへきか

去來曰此うち發句になると成らぬとありたとへは

　つき出すや桶のつまりのひきかへる　好春

此句を先師の古池の蛙と同しやうに思もへるとなん事珍しく等類なしさそ心にもとゝまり興もあらむされと發句にはなしかたし

野明曰句のさひはいかなる物にや

去來曰さひは句の色なり閑寂なる句をいふにはあらすたとへは老人の甲冑を帶し戰場に働き錦繡をかさり御宴に侍りても老の姿有るか如し賑かなる句にも靜かなる句にも有るものなりたとへは

　花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰さひ色よくあらはれたり

野明曰句の位とはいかなるものにや

去來曰これも又一句をわく

　卯の花のたえ間たゝかむ闇の門

先師曰句の位尋常ならすとなり

去來曰畢竟句の位は格の高きにあり句中に理屈をいひ或は物をたくらへ或はあたり合たる發句は位下たるものなり

野明曰句のしをり細みとはいかなるものにや

去來曰しをりは哀なる句にあらす細みはたよりなき句にあらすしをりは句の姿にあり細みは句の心にあり是も證句をあけていはく

　十圓子も小粒になりぬ秋の風

先師曰此句しをりあり

　鳥ともゝ寐入てゐるか余吾の海

先師曰此句細みありと評し給ひしと也

去來曰惣してさひ位細みしをりの事は以心傳心なれは唯先師の評をあけて敎るのみ他は押して明むへし

去來曰凡吟ある時は風あり風は必す變す是自然のこと也先師是をよく見取て一風に長くとゝまるましき事を示し給へりたとひ先師の風なりとも一風になつんて變化をしらさるは却て先師のこゝろにたかへり

先師曰發句は昔より樣々替り侍れと附句は三變にとゝまれ

りむかしは附物を專とす中頃は心附を專とす今は移り響句ひ位を以て附るをよしとす

去來曰支考等あらましを書出せり是を手にとりたる如くにはいひ難し今先師の評をあけてさとさん他はおしてしるへし

赤人の名はつかれけりはつ霞　史邦
鳥もさへつる合點なるへし　去來

先師曰移りといひ句ひといひ實は去年中三十棒をうけられたるしるしなりと悅ひ給ひけり爰におもへは句ひといふも移といふもわつかに句作のわやにしてのると乘らぬとの境なれは冷暖自知の時ならては悟し明らむる事あるまし此句もし「赤人の名もおもしろやとあらは「鳥も囀るけしきなりけりとも作るへきを名はつかれたりといへるより合點なるへしとは相うつり行ところ味ひ見らるへし

くれ椽に銀かはらけを打くたき
身はそき太刀のそるかたを見よ

先師曰此句を引て敎るとて右の手にて土器を打つて左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ける一句一句に趣のかはる事なれは言語に盡しかたきところ看破せらるへし

杜年曰句の位とはいかなる事にや

去來曰前句の位を知て附る事なりたとへよき句ありとも位應せされはのらす先師の戀の句をあけていはゝ

上畠の干菜ぎさむもうはの空
馬に出ぬ日は內て戀する

前句は人の妻にもあらす武家町人の下女にもあらす宿屋問屋の下女なりと見て位を定めたるもの也

細き目に花見る人の頰はれて
なたね色なる袖の輪ちかひ

前句古代の人のありさまなり

白粉をぬれとも下地くろい顏
役者もやうの袖のたきもの

前句のさま今やうの女と見ゆ

花になるへき雪のきぬ〳〵
月影に鎧とやらん見すかして

前句いかにも可然ものゝふの妻と見ゆ

ふすまつかんて洗ふあふら手
懸乞に戀のこゝろを持せたや

前句町家のこしもとなといふへきか是をもて他はなすらへてしらるへし

支考曰附句は一句に一句也前句附なとはいくつも有へし連俳にいたりては其場其人其時節等前後の見合ありて一句に多はなきもの也

去來曰附句は一句に千万也故に俳諧變化極なし支考か一句に一句といへるは附る場の事なるへし附る場は多くなき物也句は一場の內にもいくつも有へし

先師曰氣色はいかはとつゝけてもよし天象地形人事草木魚虫鳥獸のあそへる其形容みな〳〵氣色也

支考曰附句は附る物なり今の俳諧は附かさるをよしとす先師の句一句もつかさるはなし

去來曰附句は附されは附句にあらす附過るは病なり今の作者附る事を初心の業の樣に覺へてかつて附さる句多し聞人も又聞得すと人のいはむ事を耻て附さる句を咎めす却てよく附たる句を笑ふやから多し我か聞るとは各別なる事も多かる

去來曰附物にてつけ又心附にて附るは其附たる道筋しれり附物をはなれ情をひかす附んには前句のうつり匂ひ響なくしてはいつれの處にてか附ん心得へき事なり

去來曰蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふたゝ前句へ是いかなる場いかなる人と其事其位をよく見定め前句をつきはなして附へし

先師曰附物にて附る事當時好すといへとも附物にて附かたからむをさつはりと附物まて付たらむは又手柄なるへし

宇鹿曰先師十七の附かた路通に傳授し給ふと聞

去來曰遠境の門人の願に依て附方を書出し給ふされと後〳〵はせをか附方は是に限りたりと人の迷ひならんとこれを捨らるゝ其書出し給ふ分十七ケ條とやらん聞えたり是を傳受とし給ふ事を知らす大津にての事とやらむなれは路通もし其反古を拾ひとりて人に敎るにや

許六曰此事をねかひたるは千那法師なり

去來曰附句は何事なくさら〳〵と聞ゆるをよしとす卷をよむに思案工夫して附句を聞むは苦しき事也

去來曰風に千變万化すといふとも句体「新く「清く「輕く「慥なる「正しく「厚く「閑なる「和なる「剛なる「解たる「懷しく「速なる如此はよし「鈍く濁れる「弱く「重く「薄く「したるく「澁たる「堅く「騷しく「古さかくの如きは惡し但し堅きと鈍なる句には善惡あるへし

支考曰附句は句に新古なし附る場に新古あり

支考曰古風の句を用るにも場によりてよしされと古風のまゝにはいかゝ古体のうちに今やう有へし

先師曰一卷表より名殘まて一躰ならんは見くるしかるへし

去來曰一卷面は無事に作るへし初折の裏より名殘表までに物數寄も曲もあるへし半より名殘の裏にうけてはさら〳〵と骨折らぬやうに作るへし末に至ては互に退屈いてきたれる物也猶よき句あらんとすれは却句しふりて出來ぬ物なりされと末〳〵まて吟席いさみありて好き句出來らんを無理に止ることはあらす好句を思ふへからすといふ事也

其角曰一卷に我句九句十句有とも一二句好句あらは殘らす能句をせんとおもふへから却て不出來なるものなりいまた好句なからむうちは隨分好句を思ふへし

去來曰附物にて附る事當時嫌ひ侍れと其あたりを見合一卷

に一句二句あらんは又風流なるへし

浪花曰今の俳諧物語等を用ゆる事いかゝ

去來曰同しくは一卷に一二句あらまほし猿蓑の中に待人いりしに御門の鍵も門守の翁なり此集撰む時物かたり等の句すくなしとて粽結ふの句を作して入給へり

附合修行の事

當時の俳諧を見るに人の上三四句もつゝく時はいまた人情附け盡さゝるに仲句逃句を附けてはつせり故に力らを盡すへき場出て來らすして始末只地の附の如く一卷たるみて爰はと感すへき處なく織物のしまの如く見ゆるのみいかなれは人情をせむる事をかく恐るゝにや三句四句にも其人情盡さゝるに於てはたとひ一卷人情のみにて附るとも害なき事也其中には別段の人柄もいて來たるへき事也仍て人情を付る事修行の專一に心得へき也去來も既に此事を論せり俳諧は中より以下のものとおやまれるは俗談平和とのみ覺へたる故也俗談平和をためさんか爲也拙なき事はかりをいふの俳諧と覺へたるは淺間敷事也俳諧は万葉の意なれは貴となく賤となく味いふへき也唐明すへて中華の豪傑にも恥る事なし唯心のいやしきを辱とすと

俳諧提要 終

跋

爰に俳諧あり其道のしるされる事は故人もさま〳〵教へおかれしが未とくと得る事あたはすさるを門下に五乳人釣雪なる者あり二十有餘年の丹精やう〳〵成りて俳諧提要の一部をものせりこはまたくつもれる雪に道の明るさを覺えしとやいはんよりて一言しるすものは

前雪中　不白軒梅年

明治卅六年八月十六日印刷
明治卅六年八月十[illegible]日發行

俳諧提要
定價金五拾錢

編者　五乳人鉤雪

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

不許複製

博文館發兌 俳諧書類

▲俳諧作法▼

老鼠堂永機君著

●俳諧自在　全一冊洋布上綴　小判一二三〇頁　正價壹圓　郵稅拾貳錢

有情無情天地の森羅萬象を提へて、之を十七字の内に收むるもの是れ我俳句にあらむや、此平民的文學を解釋して其起原沿革及び作法等を精細に叙述し以て初學者の指南車たるものは此書なりとす、俳家の泰斗永機宗匠の心血を濺がれしもの請ふ一本を購ふて斯道の妙趣を味ひ給ふべし

雪中庵雀志宗匠校閲　五乳洞鈴雪君編

●俳諧提要　全一冊和裝横綴　中判　三六四頁　正價五拾錢　郵稅六拾錢

三宅青軒君著　彩色木版寫眞銅版挿入

●俳諧獨學　全一冊洋並綴　大判　二五六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

僅かに十七字中に物象情懷を味して、限りなき餘類風趣あるは俳諧なり、今や斯道に志すもの都鄙に多く俳運の盛なる將さに元祿時代に迫らんとす、本書は斯道の栞として丁寧懇切に句作の方法式例を擧げ初歩より堂奥に至るまで始んと漏す所なし

松永撫松庵君著

●俳諧麓の栞　全一冊洋並綴　中判　二五八頁　正價貳拾錢　郵稅六錢

高井園山君著

●俳字節用集　全二冊和紙木版　小判　枚　正價貳拾錢　郵稅貳錢

廣田精知君著

●和歌俳諧節用集　全二冊和紙銅刻　小判　二九二枚　正價參拾五錢　郵稅四錢

伊藤松宇君校訂　名家手蹟寫眞銅版挿入

●付合作法全集　全一冊洋並綴　大判　三六三頁　正價參拾錢　郵稅八錢

目次〔蹴のあゆみ◎其角十七條◎二弟率繩◎入船◎名目抄◎付合小錦◎七名入盤付合要錄◎手引菟◎蕉眼集◎淺四つ手◎淺川早引集◎俳諧引種◎續給歌仙◎蕉古◎俳諧獨遣の便◎梅林茶談◎俳諧仕樣帳◎目の寶◎俳諧直傳◎雜則◎七部集連句早見◎歌仙式圖解〕

▲俳諧句集▼

老鼠堂永機君、阿心庵雪人君校訂　寫眞版挿入

●芭蕉全集　全一冊洋並綴　大判　三〇四頁　正價參拾錢　郵稅八錢

目次〔解題◎貝おほひ◎田舍之句合◎常盤屋之句合◎冬の日◎波留濃日◎野さらし紀行◎鹿島紀行◎續の原◎笈之小文◎更科紀行◎おくの細道◎曠野◎ひさご◎嵯峨日記◎猿蓑◎炭俵◎續猿蓑◎芭蕉句集◎枯尾花◎芭蕉翁文集◎芭蕉翁桃青傳〕

老鼠堂永機君　阿心庵雪人君校訂　寫眞版挿入

●其角全集　全一冊洋並綴　大判　二八〇頁　正價參拾錢　郵稅八錢

目次〔解題◎虛栗集◎新山家◎雜談集◎萩の露◎句兄弟◎若葉合◎未若葉◎俳諧錦繡◎狐尾琴◎たれか家◎續五元集◎五元集脫漏◎新二百韵◎五元集◎五元集拾遺〕

雪中庵雀志君校訂　名家手蹟寫眞版入

●嵐雪全集　全一冊洋並綴　大判　二九〇頁　寶價貳拾錢　郵稅八錢

目次〔解題◎支考集（一名嵐雪全集、附傍註及脫漏）◎同撮解◎嵐雪文集◎同俳諧集◎同撰集◎同雜事◎吏登全集◎吏登句集附脫漏◎文章附欽仙一卷◎撰集遺稿◎或問珍◎七部捜◎十三條附錄のすさみ〕

老鼠堂永機君　其角堂機一君校訂　名家手蹟寫眞版入

●支考全集　全一冊洋並綴　大判　三四〇頁　寶價貳拾錢　郵稅八錢

目次〔解題◎葛の松原◎笈日記◎續五論◎四華集◎東華集◎白陀羅尼◎三葉風◎南無俳諧◎冥衣◎阿誰話◎俳諧十論◎發願文◎三千化◎蓮の桃の首途◎三日月記◎野槌千支考〕

大野西竹君校訂　名家手蹟寫眞版入

●許六全集　全二冊洋並綴　大判　三〇〇頁　寶價貳拾錢　郵稅八錢

目次〔解題◎許六句集◎韻塞◎へんづき◎俳諧問答◎宇陀の法師◎歷代滑稽傳◎風俗文選〕

岡野知十君校訂　名家手蹟寫眞版入

●也有全集　全一冊洋並綴　大判　二八四頁　寶價貳拾錢　郵稅八錢

目次〔解題◎蘐園集◎栽葉篇◎鶉衣◎巷南武須比◎白話傳雜咏◎小草籠◎野夫談◎俳諧夢の跡◎横井也有傳◎也有の俳諧〕

不白軒梅年君　雪中庵雀志君　雪窖人宇貫君校訂　寫眞版挿入

●蓼太全集　全一冊洋並綴　大判　三二二頁　正價參拾錢　郵稅八錢

目次〔蓼太句集◎俳諧附合小艇◎俳諧發句小艇◎芭蕉庵再興集◎住吉千句◎俳諧天狗問答◎俳諧十三條◎花だゝす◎俳諧棚探し◎蛇水兩岸行◎三春日記◎一夏百歩◎筑波紀行◎百羽搔◎武藏野三歌仙◎三翁末來記◎蓼太終焉記〕

●素堂鬼貫全集
大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全二册洋並綴　大判二八八頁　正價參拾錢　郵税八錢
目次　素堂句集◎素堂文集◎とく／＼の句合◎俳諧五十韻◎松の奥◎俳諧七車◎鬼貫句選◎俳諧聯句百韻◎ひとりごと◎犬居士◎伊丹發句合◎花月千句◎百番發句合◎芭蕉後傳

●一茶句集
俳諧寺社中校
全二册和製　木版和紙刷　正價貳拾錢　郵税六錢

●蕪村曉臺全集
大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全一册洋並綴　大判三〇〇頁　正價參拾錢　郵税八錢
目次　解題◎（蕪村全集）◎蕪村句集◎蕪村句集後編◎蕪村發句解◎蕪村文集◎新花摘◎俳諧玉藻集◎十番左右句合◎其雪影◎一夜四唫◎續四歌仙◎明がらす◎續明がらす◎桃すもゝ◎花鳥篇◎五車反古◎蕪村終焉記◎（曉臺全集）◎曉臺句集◎竪並集◎しなり萩◎秋の日◎常ふくろ◎佐渡日記◎爪しるし◎夜の柱◎曉臺終焉記

●蕪翁句集
角田竹冷　佐藤飯八　大野洒竹　三君校
全三册木版　美濃判和紙刷　正價壹圓　郵税拾錢

●一茶大江丸全集
大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全一册洋並綴　大判三二〇頁　正價參拾錢　郵税八錢
目次　解題◎一茶句集◎一聯句集◎一茶句帳◎一茶俳文おらが春◎大江丸俳ざんげ◎俳諧袋◎あかたの三月よつき◎袋のもれ◎（附錄）俳諧寺一茶の行狀◎俳懺悔と俳諧袋◎一茶坊と大江丸◎夏目成美

●蕉門十哲集
老鼠堂永機君　晉雪庵柳涯君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全一册洋並綴　大判三〇二頁　正價參拾錢　郵税八錢
目次　解題◎（寶晉齋其角）◎其角文集◎續虛栗◎類柑子◎（服部嵐雪）◎嵐雪文集◎（東花坊支考）◎支考文集◎（森川許六）◎許六文集◎（向去來）◎去來文集◎伊勢紀行◎去來抄◎（僧丈草）◎丈草文集◎寢轉草◎（志太野坡）◎野坡俳文◎野坡句集◎（越智越人）◎越人俳文◎不猫蛇◎（立花北枝）北枝俳文◎北枝句集◎（鯉屋杉風）◎杉風句集◎冬かつら

●芭蕉以前俳諧集
大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全二册洋並綴　大判六三〇頁　正價一册參拾錢　郵税一册八錢
上卷　俳諧畧史◎俳家系圖◎俳諧年表◎解題◎犬筑波集◎守武千句◎淀川◎あぶらかす◎玉草千句
下卷　解題◎犬子集◎俳諧初學抄◎西翁十百韻◎談林十百韻◎江戸八百韻◎江戸新道◎蓼つくし◎椎の葉◎太夫櫻

●元祿名家句集
大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全一册洋並綴　大判二八六頁　正價參拾錢　郵税八錢
目次　解題◎言水句集◎來山句集◎沾德句集◎鷺獅子獸◎辰巳集◎深川集◎有磯海◎芭蕉庵小文庫◎小鳥掛◎談々句集◎俳諧温故集◎米◎園女句集◎智月尼句集◎秋色女句集◎千代尼句集◎花讃女句集◎多代女句集

●俳諧句合集
角田竹冷君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全一册洋並綴　大判二九八頁　正價參拾錢　郵税八錢
目次　貝おほひ◎六百番俳諧發句合◎田舍句合◎常盤屋句合◎可般圖◎新蛙合◎續の原◎蠶栗合◎俳諧勸進帳◎句兄弟◎新句兄弟◎とく／＼句合◎伊丹發句合◎三十六番句合◎百番句合◎萩まつり◎十番左右句合

●俳諧類題句集
尾崎紅葉君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全二册洋並綴　大判七二〇頁　正價一册參拾錢　郵税一册八錢
上卷　俳諧發句題叢春總目錄◎俳諧發句題叢春上◎俳諧發句題叢春中◎俳諧發句題叢春下◎俳諧發句題叢夏總目錄◎俳諧發句題叢夏上◎俳諧發句題叢夏中◎俳諧發句題叢夏下◎俳諧發句題叢秋總目錄◎俳諧發句題叢秋上◎俳諧發句題叢秋中◎俳諧發句題叢秋下◎俳諧發句題叢冬總目錄◎俳諧發句題叢冬上◎俳諧發句題叢冬中◎俳諧發句題叢冬下
下卷　例言◎發句類聚◎春の部◎夏の部◎秋の部◎冬の部◎新類題發句集◎春の部◎夏の部◎秋の部◎冬の部◎雜の部◎類題發句集◎春の部◎夏の部◎秋の部◎冬の部◎雜の部

●明治俳句
竹村秋竹君編
全一册紙皮上綴　小判五〇〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢
維新王政の復興は明治文學の勃興となり俳句の革新を促し以て今日の盛況を見るに至れり故に國内の新聞雜誌にして此等俳家の作句を載せざるもの殆んど稀なり編者別に審美眼を以て方今作家中好句と認めたるもの二萬以上を採り更に其中より七千餘を撰擇して本書となす春夏秋冬此本なかるべけんや

●俳家成美全集
栗窓無角君著
全一册洋並綴　小判五二〇頁　賣價貳拾錢　郵税八錢
目次　俳家成美◎巢兆小傳◎成美家集◎はら／＼傘◎成美連句集◎四山藁◎四山藁追加◎随齋諧話◎成美追善集◎成美墓碣銘◎巢兆句集

▲俳文及雜著▼

●俳諧文集
巖谷小波君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
全二册洋並綴　大判三二八頁　正價參拾錢　郵税八錢
目次　◎本朝文鑑◎和漢文藻◎芙蓉文集◎新編俳諧文集◎秋風庵文集◎雞口集

●俳諧論集

波君校訂　名家手蹟寫眞版挿入

全一冊洋並綴　正價參拾錢　大判三三〇頁　郵税八錢

目次（玉くしげ◎俳諧◎南北新話◎俳話耳底紀◎三草紙◎俳諧一巾抄◎蕉門俳諧語錄◎俳諧參話◎柿晋問答◎山中問答◎湖東問答◎俳諧或問）

●續俳諧論集

嶽谷小波君校訂　名家手蹟寫眞版挿入

全一冊洋並綴　正價參拾錢　大判三〇六頁　郵税八錢

目次（芭蕉二十五ヶ條◎俳諧有也無也闕◎俳諧十編論◎俳諧十編答辨抄◎續五編◎片歌二夜問答◎十二夜話◎白雄夜話◎俳諧諧雪おろし俳諧七草）

●俳諧珍本集

大野酒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入

全一冊洋並綴　正價參拾錢　大判三一八頁　郵税八錢

目次（立圃句集◎梅翁宗因句集◎兩吟一日千句◎俳諧破邪顯正◎丙寅紀行◎俳諧爪作◎背すだれ◎新三百韻◎のぼり鮎◎節文集◎俳諧古選◎卷泥句集◎涼袋獨吟集◎花見次郎◎舍利風語）

●俳諧紀行全集

佐藤皈人君校訂　大利古俳人手蹟寫眞挿入

全一冊洋並綴　賣價貳拾錢　大判四〇〇頁　郵税八錢

目次（發凡七則◎俳諧紀行全集提要◎日本行脚文集◎野晒紀行翠園抄◎奥細道菅菰抄◎奥細道拾遺◎桃の葉◎陸奥千鳥◎摩詰菴入日記）

●俳諧逸話全集

松澤四丁君校訂　名家眞蹟寫眞版挿入

全一冊洋並綴　正價參拾錢　大判三三二頁　郵税八錢

目次（滑稽太平記◎行脚怪談袋◎蕉翁消息集◎俳家奇人談◎俳人百家選◎耿耿俳百人選◎續俳家奇人談◎名家逸談）

●俳諧年表

角田竹冷君校閲　星野麥人君、牧野謙次郎合著

全一冊和上綴　正價六拾錢　大判二八六頁　郵税八錢

本書は延德元年より明治三十四年に至るまで四百十三年間世に知らるゝ俳人及之に關する著書等を五十音の次序により網羅し山崎鑑が一休和尚に參禪せし以來俳道の出來事、俳人の生死、俳書の撰述等一目瞭然の年表たり國家、文學家、歷史家等、座右欠くべからざるの珍書なりとす

貧園五岳君畫

●俳諧畫譜集

全二冊和紙木板小判　正價貳拾錢　郵税四錢

雄齋圖輝君家　木版密畫挿入

●俳人百家撰

全一冊和紙木板中判五〇枚　正價貳拾錢　郵税貳錢

67
270

087320-000-0

67-270

俳諧提要

五乳人鈎雪／編

M36

DBE-0607

UNIVERSITY OF CALIFORNIA
LIBRARY

明心寶鑑 全

6
3